



# 東日本大震災支援活動経過報告書

## 淑徳大学東日本大震災支援ボランティアセンター



# 東日本大震災支援活動経過報告書

淑徳大学東日本大震災支援ボランティアセンター

## 目次

- |     |                          |
|-----|--------------------------|
| 第一章 | 巻頭言                      |
| 第二章 | 発災後の初動対応                 |
| 第三章 | 雄勝ボランティア                 |
| 第四章 | 学生ボランティア活動をサポートしていただいた方々 |
| 第五章 | 2011年夏～2013年初夏まで         |
| 第六章 | 他団体との連携                  |
| 第七章 | 資料、新聞記事、学生報告会資料など        |



学長

長谷川 匡俊

## 息の長い被災地支援を

驚天動地の大地震の衝撃から四日後、私は、本学ホームページ上に被災地の皆さまへのお見舞いとともに、全学生に向けて学長メッセージを掲載しました。その一文の後段には、つぎのようにあります。

ここで改めて学生諸君にお伝えし、ご協力をお願いしたいことがあります。現下の惨状を一人ひとりの心に刻んで、自分のできること、なすべきことを考え、4月から是非キャンパスに戻って元気な顔を見せてください。いま私は、卒業生の旅立ちを控え、喜びと共に複雑な思いに駆られています。諸君の前途にはあまりにも厳しい現実が待っていると思われるからです。しかし、こうした時こそ淑徳人の本領が試されるのではないのでしょうか。母校はいつまでも卒業生に対し応援団でありたい、と私は願っています。(中略) 国情は二重三重の難局の只中にあります。社会の一員として今ほど互助・共同が求められているときはないでしょう。

(本学HPより)

# 第一章

## 巻頭言



このときの私の偽らざる心情、そして、「もしも、学祖がおられたならば」との思いこそ、微力ではありますが、本学の被災地復興支援を貫く理念ともいうべきものであり、教職員並びに学生諸君に強く訴えてきたところでもあります。つぎに掲載するのは、同年5月、学長として初めて東北の被災地をお見舞いしたときの所感をまとめたものです。

このほど、岩手県の平泉が、ユネスコの世界遺産に登録されることとなりました。東日本大震災の被災地の方々に希望と勇気をもたらし、復興の足掛かりとなることを、心から祈らざるを得ません。

去る5月のゴールデンウィークに、私は、学生ボランティアが活動し始めた石巻市雄勝町の大須小学校避難所をはじめ、大船渡、陸前高田の被災地を訪ね、また、御父上を津波で亡くされたこの3月期卒業生を弔問しました。さらに宮城・岩手両県と同窓会支部の卒業生10名余とも再会して、被災状況を聞くなど情報交換をし、大学として、息の長い被災地支援を約束したのでした。

5月3日、最初に訪ねたのは石巻市横川の浄土宗大忍寺でした。本堂前でお勤めをさせていただき、振り返るとご住職がおられるではありませんか。「これから、多数の児童・教職員が犠牲になられた大川小学校に向いて、追悼のお勤めをしたいと思います」と伝えたところ、「私もご一緒します」ということになり、

ご住職の先導で、いまだ大津波の爪痕が痛々しい同小学校へ伺ったのでした。校門と思しきところには、犠牲者を悼む家族や有縁の人たちが献じたたくさんの花束や、児童が好んだ品々が供えられていました。私たちはその前に立ち、しばし一緒に慰霊の読経念仏を捧げた次第です。後日談になりますが、大忍寺のご住職は、その後毎日同校に出向かれ読経しておられるそうです。



大須小学校の避難所で、卒業生の岩佐勝大須中学校校長(10期卒業生)と久しぶりにお会いしたとき、遅くなってすまないといった気持ちと、母校は常に近くにいるぞ、といったメッセージを少しは伝えられたのではないかと安堵したものです。何よりも、1か月以上に及ぶ学生諸君のひたむきな支援活動が、これを裏付けるものとなりました。

5月5日帰葉の日、朝になって平泉の中尊寺を参拝することに決めると、山内諸堂を巡拝し、ご本尊に被災物故者諸霊の追悼と震災復興を祈りました。東日本大震災と向き合う私の思いです。

大学広報「Together 187号」より

その後の活動の経過は、本学ホームページ「東日本大震災復興支援サイト」を通して学内外に発信してまいりましたが、改めて被災地支援ボランティア活動の発端を振り返ってみますと、とりわけ以下の4点が背中を押してくれたといっただいでしょう。第一は、同窓会のネットワークです。卒業生の皆さんの助言や励まし、頼りになる情報の提供等に支えられたというべきです。第二は、学生のボランティア活動が活発な本学の伝統です。「笛吹けど踊らず」ではなく、学年や学部・学科を超えて、つぎつぎと立ち上がってくれたことです。第三は、地域支援室(地域支援ボランティアセンター)が拠点となって機能したということです。いち早く「東日本大震災支援ボランティアセンター」の特設につなげることができました。第四は、学生消防団の存在です。災害時には初期対応が重要であるだけに、消防団の役割を評価したいと思います。

むすびに、「身の丈に合った息の長い支援の大切さ」を掲げるにつけ、ゆるがせにできない今後の課題について列挙しておきます。①本学の教育におけるボランティア活動の明確な位置づけ、②専門職教育への活かし方、③教職員の引率など積極的な活動、④活動資金の調達、⑤同窓会支部との連携、⑥行政および関連機関との連携、⑦情報の共有化(現地との情報交換)、⑧風化させない記録化と継承の課題などです。

学生たちの真摯な取り組みに対して、常に変わらぬお力添えを下さったすべての方々に深く感謝申し上げますとともに、被災地の復旧・復興を心から祈念してやみません。

## ■長谷川匡俊学長被災地訪問記録

平成23年

- 5月 2日 宮城県石巻市に入る  
浄土宗大忍寺(石巻市横川)のご住職とともに大川小学校にて被災して亡くなられた方々へ慰霊の読経念仏をささげる
- 3日 大須小学校(避難所)を訪問。大須中学校長・岩佐勝氏(10期卒業生)及び本学学生ボランティアを激励  
同窓会宮城県支部県北メンバーと古川駅前懇談
- 4日 被災した卒業生(43期卒業生)佐藤史乃さん宅弔問(大船渡市)  
大船渡市内の社会福祉法人典人会を訪問  
(卒業生・柏貴美さん、内出幸美さん、水島隆さん)  
同窓会岩手県支部県南地域メンバーと一関市内で懇談
- 5日 平泉中尊寺を参拝。山内諸堂を巡拝し、ご本尊に被災物故者諸霊の追悼と震災復興を祈願
- 8月 6日 同窓会福島県支部総会出席(白河市)  
7日 細谷昭夫 同窓会副会長と福島県内を廻る  
8日 同窓会宮城県支部仙台地区メンバーと仙台市内で懇談  
9日 仙台市内の浄土宗被災地支援拠点、蓮光寺及び大願寺訪問  
同窓会岩手県支部県央メンバーと花巻市内で懇談
- 10日 遠野市社会福祉協議会、陸前高田市社会福祉協議会及び、医療社団法人勝久会(大船渡)木川田理事長訪問
- 10月13日 上記、木川田理事長が中心となって盛岡市内で開催された、介護老人保健施設職員や一般県民対象の講演会で基調講演。  
大船渡市長・戸田公明氏および前宮古市長・熊坂義裕氏と講演会会場で懇談  
また、宮古市内にて熊坂伸子普代村教育長と懇談  
同窓会岩手県支部宮古地区メンバーと宮古市内で懇談
- 14日 大学院生長洞萌美さんの被災した実家(宮古市津軽石)を訪問  
津波で犠牲になった卒業生(16期卒業生)箱石進一さん宅(山田町)を弔問  
津波で犠牲になった卒業生(3期卒業生)菊池よし子さんのお墓(山田町)のご親戚の方の案内でお墓参り。  
2名の在校生が、津波で家を流された山田町内を視察



# ボランティア活動の 検証と今後

東日本大震災支援ボランティアセンター長  
副学長

足立 あきら 叡



## 共生、実学の精神のもと、 本学ならではの活動を継続していきたい

“Not for him , but together with him.” 学祖の言葉の重みをあらためて自覚した支援活動であった。そして、本学の実学教育、地域貢献活動は時代の要請に応えるものであり、いっそう充実・進化させていかなければならないと強く感じた。

まず、今回の支援活動は、本学の長年の蓄積のもとに展開されたものであることを確認しておきたい。いわば「学祖のバトン」が受け継がれたものである。本学においてボランティア活動は特別なことではないと皆さんも感じていることだろう。開学以来培われてきた共生、自利利他の精神を礎に必然的に始まった活動であったと言える。地域支援ボランティアセンター等での豊富な経験、さらに卒業生の皆さんのネットワークも活動を支えた。

実学の伝統のもと、支援活動を教育として展開することも徹底された。すなわち「現地の方々と共に汗を流し、支援ということの意味を現地の方々と共に学ぶ」ということである。共生の精神を実学を通して学ぶことであり、本学が長きにわたり取り組んできた教育・社会貢献活動の延長線上にあるものに他ならない。

参加した学生たちは「“ボランティア”の本質がわかった。現地で活動して本当の意味の“ボランティア”になった」と話す。言うまでもなく、ボランティアは一方向的に助ける、あるいは与えるものではない。人のために役に立ちたいと思い、行動し、そのことによって自らも生かされていくことである。今回の活動を通して、多くの学生が“together with him. (彼とともに)”の本質を身をもって理解したと確信している。

さて、私たちは今後この支援活動をどう展開していくべきなのか。周知のとおり、本学は宮城県石巻市雄勝町を重点に長期にわたる支援活動を決意している。当然のことながら活動の質的向上を図っていかなければならない。この2年間の活動においては、いわば非日常的な状況における緊急的支援の意味合いがあった。避難所での生活支援、がれき撤去



等、ニーズや目的が明白な活動を行ってきた。混乱した状況の中で、参加した学生たちは、ふだん当然のことのように感じている人との関係性、あるいは物資やインフラ等の大切さをあらためて学ぶことができた。

震災から2年が経ち、現地ではわずかながらではあるが、希望の灯がともし始めていると聞く。前を向いて歩み始めている方々にこれからどう寄り添っていくか、そのような関わりの中でどう学んでいくか。つまり、現地の方々と共に生活の日常性、継続性、関係性をどう再構築していき、その中でどう自分を活かして(学んで)いくかということが重要な課題である。理想を言えば、本学がコミュニティの一員としてごく自然に“ともにある”存在になっていくことだ。

そのためには、これまで以上に、現地の方々のニーズや心の声をきちんと受け留め、それに応えていかなければいけない。若い人でなければできないことがあるはずだ。例えば、お茶を飲みながら、お菓子を食べながらよもやま話をするという「お茶っこ」に加わる。日常性を取り戻す貴重な時間だが、ここに子どもや孫のような学生が参加することによって、元気づけ、私たちも元気を頂く。ここでは、日常性を共に生きるといういつそう深い「Together with him」の精神が問われてくる。まさに、重い価値を持つ学びの場が開かれていると言える。

ナイチンゲールに次のような言葉がある。

「世の中に看護ほどに、自分の経験したことのない他人の感情の只中へ自己を投入する能力を、これほど必要とする職業はない」

大切なのは他人を理解する能力というより、関係性を築こうとする「勇気」であると私は理解する。ぜひ、無我夢中で飛び込んでほしい。そして、そこで得たこと、学んだこと

をしっかり自分の言葉にし、心に刻み、振り返ってほしい。

本学は石巻市雄勝町に「おがつともいきハウス」を開設した。ここを拠点に、息の長い支援活動を展開していく。同時に、教育、福祉、地域振興等のさまざまな活動を通しての学生の学びの場となることが期待されている。現地の方々もいわば教師である。これらの活動をどのようにコーディネートしていくか。本学の教育力が試されているわけであり、私を含めて教職員の責任の重さを痛感している。

現地を再訪する学生、卒業生も多く、この絆を絶やしてはならない。その意味で、本冊子はまだまだ序章である。学生一人ひとりが持つ、学ぶ力、成長する力を私は信じている。これを支えるサービスラーニング、アクティブラーニングの取り組みに本学がいっそう注力していくことは言うまでもない。

お世話になった皆様にあらためて感謝申し上げるとともに、思いを新たに今後も教育や地域貢献に注力していくことをお約束する。



## 第二章 発災後の初動対応



東日本大震災 初動対応記録

地震発生 2011年3月11日(金曜日) 14:46

千葉キャンパス

中庭に避難(放送指示あり)

点呼を行い、約400名がキャンパスに在籍していることを確認した。

全員に中庭に待機するように指示を出し、もし中庭を離れる場合必ず複数で周囲に報告して行動することをルールとした。またこの頃、京葉コンビナート(市原市)で燃料タンクが爆発、火災が発生、キャンパスでも数回の爆発音が聞こえ、炎も見えたが学内には混乱は生じなかった。



- 14:50 非常放送により、中庭に学生・教職員を集め避難。事務局総務に災害対策本部を設置。震災の情報収集にあたる。
- 15:05 職員により施設被害状況点検及び構内在学生の安否確認のため巡回開始するも激しい余震のため中止。
- 15:35 第2回目の構内巡回により、学内にいる全員が中庭に避難を完了した。
- 16:00 12号館101教室に学生を移動、名簿を作成し、約400名の学生を確認。教室のテレビにより交通情報などの情報確認ができるようにする。
- 17:00 在校学生のための食料品の調達。
- 18:00 携帯電話が不通のため、事務局内の電話機を保護者連絡用として学生に開放した。
- 19:00 備蓄していたエマージェンシーキット(飲料水・固形食糧・緊急用保温アルミシート)および携帯電話簡易充電器の配布。
- 19:30 帰宅困難学生約200名に対して、12号館203～206教室を帰宅困難学生の簡易宿泊所とし、準備・開放した。
- 20:30 体育系サークル部室棟での宿泊を許可。
- 25:00 約50名の教職員が会議室などで宿泊する。

千葉第2キャンパス

学生50名が在籍していたが、帰宅困難な学生14名と教職員7名が学内に宿泊した。また、3月12日のAOⅢ期入学試験の延期(3月18日)を決定しHPに掲載した。

埼玉みずほ台キャンパス

- 14:52 1号館前に学生を集め避難。事務局に災害対策本部を設置。震災の情報収集にあたる。
- 14:55 職員により施設被害状況点検及び構内在学生の安否確認のため巡回開始。
- 17:15 校内放送により、4号館101教室に学生を集める。名簿を作成し、約80名の学生を確認。教室のテレビより交通情報などの確認ができるようにした。
- 18:30 2班にわかれ、在校学生のための食料品の調達。
- 19:30 海外研修中のプログラムに参加している学生の安否・帰国確認開始。
- 20:30 在校学生に1号館第一会議室にて夕食を提供。約30名の学生が自力で帰宅。
- 22:00 運転再開の見通しがたたないため、帰宅困難学生のための宿泊準備開始。三芳町役場に緊急用毛布貸し出しを要請。備蓄していた緊急用保温アルミシートの配布。
- 23:30 約50名の帰宅困難学生について、男子は柔道場、女子を多目的ホールにて宿泊させる。
- 23:45 東武東上線みずほ台駅より、電車内滞在中の帰宅困難者の受け入れの要請を受け、教室の確保など受け入れの準備を進める。
- 24:00 約40名の教職員が職員控え室などで宿泊する。

池袋サテライトキャンパス

午前の講座が終了し、午後の講座が始まっていたが、全員の安全を確認し、17:00には事務局を除いて全員が退去した。また、当日の夜間講座の中止を決定するとともに、当日から1週間のすべての講座を中止した。

2011. 3. 12(土曜日)

千葉キャンパス

- 6:30 大巖寺において炊き出しをしていただいた。約300名分のおにぎりを作るためボランティア学生10名が手伝う。
- 7:00 事務局において学生への状況説明準備。
- 7:20 朝食の提供(12号館101教室)
- 7:42 入試への問い合わせ多数あり。

- 8:25 小湊バスから千葉駅周辺の交通情報を確認し、12号館101教室にて千葉駅へのスクールバス運行説明の実施。
- 8:45 千葉駅へのスクールバス第1便出発。
- 9:22 スクールバス千葉駅に到着（JR各線の運行報告が入る）。
- 10:00 埼玉みずほ台キャンパス 帰宅困難学生の全員帰途の報告がはいる。
- 11:00 JR千葉駅のホームは人であふれており、電車も1時間に1本程度と教職員より報告。
- 11:15 ボランティアセンター常任支援学生2名来室。
- 12:00 「帰宅について説明会」を学生に対して行った（12号館101教室）。
- 12:30発 スクールバスを4方向（八街方面、新浦安方面、木更津方面、飯岡方面）、と茂原方面（奥村車）の5ルートに分かれて分乗して帰宅。
- 12:40 対策本部 教職員解散命令（12:45）局長より。
- 13:00 千葉キャンパス 帰宅困難学生 全員帰途。
- 14:00 千葉第2キャンパス（看護学部） 帰宅困難学生 全員帰途。

#### 埼玉みずほ台キャンパス

- 2:00 東武東上線みずほ台駅より、帰宅困難者の受け入れ撤回の連絡を受ける。
- 7:00 在校学生用の朝食準備。
- 8:30 交通機関再開により、学生への帰宅を指示する。
- 9:00 教職員についても同様の指示をする。
- 10:30 当面の間、情報教室、図書館の利用、スクールバス運行の停止を判断。
- 12:00 全教職員の解散を指示する。

#### 2011. 3. 13 (日曜日)

##### 千葉キャンパス

- 15:00 ①震災対応窓口設置（西塚、江島、石田、岡本）  
震災地域学生対応 ②卒業式対応 ③その他  
行事対応 ④停電対応 ⑤学園暦の変更
- 16:00 S-NAVI（学内ポータルサイト）で学生へ震災  
対応窓口設置を告知。
- 18:45 状況を学長、副学長へ報告。

#### 2011. 3. 14 (月曜日)

##### 千葉キャンパス

- 5:50 計画停電対応、公共交通機関運行状況など情報  
収集。
- 6:15 学部長、状況報告。
- 6:30 学生厚生委員長と連絡。
- 7:15 S-NAVI及びポータルサイトで学生および教  
職員に本日出校しないように配信。
- 7:30 スクールバス1便のみ運行。以降は運行中止
- 8:00 震災対応会議（学長、副学長、学部長、常設委員  
会委員長、事務局部課長）を行い、以下を決定し  
た。  
決定事項）  
①卒業式 3月20日に延期して実施（来賓なし、  
式次第は変更しない）  
学部生にはS-NAVIで配信、大学院生には電  
話連絡  
②新入生向けスプリングセミナー中止  
③第一回車椅子バスケットボール大会の中止  
④3月19日の入学試験は実施  
⑤学生の学内使用禁止  
⑥エレベータは関係者以外使用禁止  
⑦職員は交通機関が途絶えているため、自宅待  
機
- 10:25 東京電力へ停電計画の電話確認（14日は停電な  
し、明日以降は17時に確認）。

##### 千葉第2キャンパス

ポータルサイトと直接電話をかけ、全在学学生、教職員の安否確認が完了した。

##### 埼玉みずほ台キャンパス

- 10:00 震災対応会議
- ①卒業式を3月17日から3月24日に延期
- ②埼玉みずほ台キャンパスの輪番停電 みずほ台エリアは、第  
1グループとなり3月14日は16:50~20:30で実施  
3月18日実施予定のAO3月Ⅱ期を3月23日に変更
- ④海外研修安否大熊先生引率（シドニー）、小川先生引率（中  
国）どちらも安否確認済み。また、短期海外研修（ドイツ、3  
月18日~3月25日）中止について検討
- ⑤ゼミ教員に、全学生の安否確認を指示
- ⑥スクールバスは11時30分を最終とし、3月23日まで運休。3  
月24日の卒業式のみ特別運行。3月25日以降は未定。
- ⑦学生成績発表（1~3年）は、ポータルサイト上での確認に変更

2011. 3. 15 (火曜日)

千葉キャンパス

- 9:00 スクールバスダイヤ変更 (1時間に1本を運行)。計画停電のため蘇我駅発15:00のバスを最終とする。
- 9:30 学生対応は案件ごとに所轄の委員長で対応を決定してもらう。
- 10:30 学生厚生委員会実施。  
決定事項) 学内入構について  
①入校時間 (9:00~16:30)  
②クラブ・サークル活動は自粛  
③各教室貸し出しは中止  
④大学各種窓口は通常通り  
⑤図書館は閉館  
⑥スクールバス特別ダイヤにて運行
- 14:30 派遣・アルバイト職員帰宅指示。
- 15:00 学長メッセージを大学ホームページに掲載。
- 16:00 専任職員帰宅指示。

埼玉みずほ台キャンパス

約1500冊の落下図書を書架に戻す。

2011. 3. 16 (水曜日)

千葉キャンパス

- 9:10 東京電力から200番地の停電はないと確認。
- 9:20 スクールバスダイヤ変更 (16:00まで運行)。
- 12:52 千葉東方沖地震発生 (M6、震度6弱)。
- 15:00 千葉大学、計画停電のため、外部とのネット接続遮断 (30分ほどで復旧)。
- 19:35 東京電力に3月21日まで淑徳大学 (千葉・千葉第2) の計画停電はないと確認。

地域支援ボランティアセンター学生ミーティングにて現状で行える活動として、大学最寄り駅などでの募金活動を行うことを決定。

また、学生サポートセンター室長より、中止となった卒業式後のケータリング食材が宙に浮いており、支援に回せないかとの連絡。これを受けて、千葉県社会福祉協議会経由で旭市社会福祉協議会と連絡を取り、避難所での炊き出し支援の申し出をする。日程等は調整後ということとなった。

埼玉みずほ台キャンパス

AOスタッフより学生義捐金ボランティア募金活動を行ないたいとの連絡を受け、学内調整をし、3月18日より3月31日まで断続的に東武東上線みずほ台駅前において募金活動を行なう旨決定。

短期海外研修 (ドイツ) は中止することを決定。

2011. 3. 17 (木曜日)

千葉キャンパス

第2回震災対応会議 (午前11時より)

- ①在学生、保護者、卒業生、教職員親族の被災状況の情報共有がなされる。学生のご家族が被災、実家が津波で流失した等の報告。大船渡、宮古在住者との連絡が未だに取れないとの報告。
- ②社会状況の混乱に鑑み、20日に延期予定の卒業式を中止することを決定。卒業式を行わないのは、創立以来初めてのことである。いずれ遅れても何らかのセレモニーを実施したい旨を確認。なお、卒業証書については、大学および教職員のメッセージを添え各学部から送付する旨の決定。
- ③4月1日の合同入学式は中止とする旨の決定。これに代えて、キャンパス単位で各学部新入生オリエンテーションの中で入学に際してのメッセージを学部長より伝えることとする。
- ④新年度学事日程について、現時点での予断はできないが、実習日程等を考えると大幅な変更はかけにくい。また、エネルギー需給を考えると、夏期にエアコンが使用できない可能性もあり、可能な限り繰り延べ期間は短くしたいとの意見が出される。
- ⑤広報・地域支援室より、大学ホームページ上に卒業生らの被災情報共有および今後のボランティア支援のためのブログ設置を提案、了承される。

千葉第2キャンパス

JR 蘇我駅および JR 鎌取駅前にて学生有志による募金活動 (2日間実施)

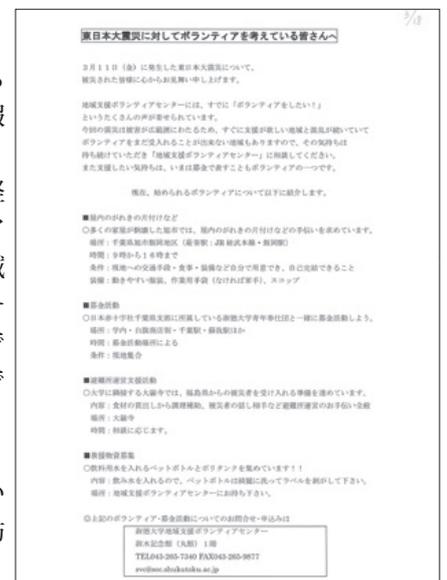
2011. 3. 18 (金曜日)

HPにて被災在学生及び入学予定者に対する緊急学費減免の発表。

千葉キャンパス

「震災支援サイト」を立ち上げる。卒業生安否情報提供のお願い等を掲載。

また、発災後1週間が経ち、学内でもボランティア参加希望者が頻繁に地域支援ボランティアセンターを訪れるが、各メディアでも、自己責任、自己完結でのボランティア活動を強く推奨していることから、「ボランティアを考えている皆さんへ」を作成し来訪



の学生に配布。

被災在学学生及び入学予定者に対する緊急学費減免を決定、大学ホームページおよび支援サイト上で告知。

旭市飯岡避難所の炊き出し支援「ランチボランティア」を3月23日に実施することを決定し、S-NAVIにてボランティア募集。

#### 埼玉みずほ台キャンパス

東上線みずほ台駅前において募金活動開始。



#### 2011. 3. 19 (土曜日)

##### 千葉キャンパス

JR蘇我駅およびJR千葉駅前において、地域支援ボランティアセンター学生による募金活動開始。

#### 2011. 3. 23 (水曜日)

##### 千葉キャンパス

ランチボランティア 学生20名、教職員4名が千葉県旭市の津波被害により、市内4ヶ所で610名の避難所生活をしている皆さんに、中止になった卒業式後の謝恩会のために準備されていたローストビーフ、タンシチュー、パンなど、温かい食事を提供した。



#### ランチボランティア参加学生コメント

今までボランティア活動に参加したことがなく、今日初めてボランティア活動をして、被災者の方に「ありがとう」と言っ

ていただけるだけで今回のボランティアに参加して本当に良かったなと思いました。これからも積極的に参加したいと思います。

(社会福祉学科3年 青嵐 千尋)

旭市の被害は、東北の大被害に隠れてテレビなどであまり報道されていませんが、実際に来てみると思った以上にひどい状況でした。困っている人がたくさんいることをあらためて実感しました。

(社会福祉学科3年 四釜 脩)

#### YFCによる震災ボランティアに行っ〜旭市のがれき撤去〜

3月23日 農家で自主的ボランティア

3月28日 旭市でのがれき撤去

YFCに限ってではありませんが、私も含めてメンバーの中には被災地出身者が多くいます。今回の災害はとても他人事とは思えませんでした。そんな中での今回のボランティア参加は「何かやらなきゃ」「行動しなきゃ」と思ったことから始まりました。

よく「自分にできることをやろう」「自分も何かやりたい」と言う人がたくさんいます。テレビ、CMでもよく見ます。しかし、それを実際行動に移せる人はなかなかいるものではないと思います。その要因は「個人だから」というところにあると私は考えました。その考えからみんなでならきっと何かできる、行動することができると思い、呼びかけたところ「何かしたいと思っていただけ何もしていなかった」という思いを持っていたメンバーがたくさんいることが分かりました。それが分かれば早いもので、みんなの思いをまとめて、先生や地域ボランティアセンターに伝えたところ、旭市のボランティアを紹介してもらい行くことができました。

(代表・社会福祉学科2年 江井 健吾)

私が行ったボランティア活動は、たった一日の活動でしたが机の前では何時間勉強しても得られないことを学びました。活動中に感謝の言葉をかけてもらった時「活動してよかった」と心から感じました。現地も余震が続いていますが、地元の方々には一日でも早く安心した生活が出来るよう願っております。

(コミュニティ政策学科1年 門多 冬馬)

どんな凄惨な状態でも現地には笑顔でボランティアの自分たちに接してくれる方々がいてくれて逆にこちらが元気を分けられました。私たちにできることは少ししかないが、これからもできることをやっていきたいと思う。

(社会福祉学科3年 大森 優光)

人とのつながりの大切さをとても感じた。知らない土地に

行って知らない人と話して、その人のために頑張ろうと思った。少しでも復興の手助けになればと思い行動した。今が幸せだと感じた。行動してよかった。又機会があれば行こうと思う。

(社会福祉学科2年 黒澤 和寿)

人と自然について改めて考えさせられた。自然の中で生かされていることを強く感じた。だが、その中で人間の強さ、きれいな部分も感じる事が出来たのも事実である。これからこの体験を通して未来に対して考えていきたい。

(社会福祉学科2年 篠崎 哲郎)

現場に行くことによって津波の恐ろしさと被害の大きさに驚いた。しかし復興に向け、自分たち以外にも様々なところからボランティアの方が来ていてとても力強く感じた。

(社会福祉学科2年 小川 大介)

旭市へボランティアに行くまでは被災地の状況はテレビのニュースでしか把握していなかったため実際にこの目で被災地を見たときは驚いた。家の中や庭には海の泥が散乱していてそれをかき出す作業をさせていただいたのだが泥は予想以上に重かった。皆で必死にかき出して海の泥が家の中から無くなった時はとても達成感があった。まだ、余震が続いているが地震に負けないで一日でも早く復興してほしいと思う。

(社会福祉学科2年 朝日 哲也)

テレビの映像では現場の悲惨さはわからないと思った。実際に現場を見た自分たちでさえもきっと当事者の何%も分かっていないのだろうと感じる。きっとこの紙に悲惨さを書いてもなかなか伝わるものではない。百聞は一見に如かず。思いを行動に移すということは難しいかもしれないがぜひ現場を見てほしいと思う。このボランティアに行った以外の他のメンバーも含めてYFCはがれき撤去の他に募金活動もした。これからボランティアの募集があるかもしれないが、ぜひ個人だけではなく同じ思いを持った仲間と共に行動すればより積極的にできると思う。

(代表・社会福祉学科2年 江井 健吾)

(学年所属学科は当時のものです)

### 2011. 3. 30 (水曜日)

#### 千葉・千葉第2キャンパス

千葉駅、蘇我駅前にて、日本赤十字街頭募金開始(4月3日まで)

### 2011. 3. 31 (木曜日)

#### 千葉キャンパス

在学生及び卒業生安否確認開始

### 2011. 4. 1 (金曜日)

#### 千葉・千葉第2・埼玉みずほ台キャンパス

合同入学式中止。

#### 池袋サテライトキャンパス

通常業務開始

### 2011. 4. 2 (土曜日)～4 (月曜日)

大船渡市(市役所、避難所)～陸前高田市(避難所)～釜石市～大槌へ支援物資を届ける。



岡澤 順キャリア支援センター課長(20期卒業生)が、枕・ウィンドブレーカーをそれぞれの避難所に届ける。

今回、支援物資として、教職員間の募金をもとに購入したウィンドブレーカー100着、まくら株式会社さんよりご提供いただいた枕100個、また募金活動時にお声がけいただいた蘇我中学校PTA役員さんよりお預かりしたペットフード等を搬送した。

大船渡市役所

①教職員有志の募金により製作した、ウィンドブレーカー100着 “がんばっぺし!いわて”

②枕100個 【松戸市のまくら(株)さんご協力】

③ペットフード他 【蘇我中PTAさんご協力】

④Tシャツ・ウィンドブレーカー・お菓子類 【学内協力】

大船渡市民文化会館の避難所へ

・缶詰36缶、インスタントラーメン120食

○災害義援金

①大船渡市役所会計窓口へ15万円

②三陸気仙沼復興委員会 市民文化会館内ボルコロッソ気付10万円

なお支援物資については、大船渡市役所の三浦課長にお世話になった。

### 2011. 4. 6 (水曜日)

#### 埼玉みずほ台キャンパス

福島県双葉町社会福祉協議会への支援物資について

旧騎西高校（埼玉県加須市）へ淑徳大学同窓会福島県支部副会長・北村雅氏（10期卒業生）からの要請により、山口光治国際コミュニケーション学部長、相澤修一郎課長が支援物資を届けた。①電気炊飯器6個・8合炊き3個・1升炊き3個 ②無洗米40kg（5kg×8） ③野球用品（職員から寄付）・グローブ5個・バット4本・軟球ボール9個

#### 2011. 4. 7 (木曜日)

宮城県石巻市大須小学校避難所で陣頭指揮をとっていた卒業生の岩佐勝氏（10期卒業生）からの支援要請が細谷昭夫同窓会副会長・東北地区連合会長（1期卒業生）を通じてもたらされた。

#### 2011. 4. 13 (水曜日)

第一次調査隊出発。長谷川俊哉地域支援室長・松崎滋地域支援室長補佐、石川紀文サービスラーニングセンター長。（現地調査の詳細は第三章に後述）

大学の社会的責任と行動の明確化を目的として、大学協議会にて東日本大震災支援ボランティアセンターを設置することを決定した。

「学生が、大学等の内外において、学修成果等を活かしたボランティア活動を行うことは、将来の社会の担い手となる学生の円滑な社会への移行促進の観点から意義があるものであることから、被災地等でボランティア活動を希望する学生が、安心してボランティア活動に参加できるよう、ボランティア活動に関する修学上の配慮と、ボランティア活動に関する安全確保及び情報提供に留意し、引き続き学生への指導をよろしく願います」

（4月1日付 文部科学副大臣通知 一部抄訳）

#### 2011. 4. 14 (木曜日)

##### 千葉キャンパス

石巻市に搬入する野菜調達のために千葉に来県した細谷氏を招き、千葉キャンパスにて被災地の情報共有の集いを開催した。

#### 2011. 4. 21 (木曜日)

第一次調査隊の報告をふまえ第1回 東日本大震災支援ボランティアセンター会議を開催。学生ボランティアの派遣について、支援活動の方針を定めた。（第三章に後述）

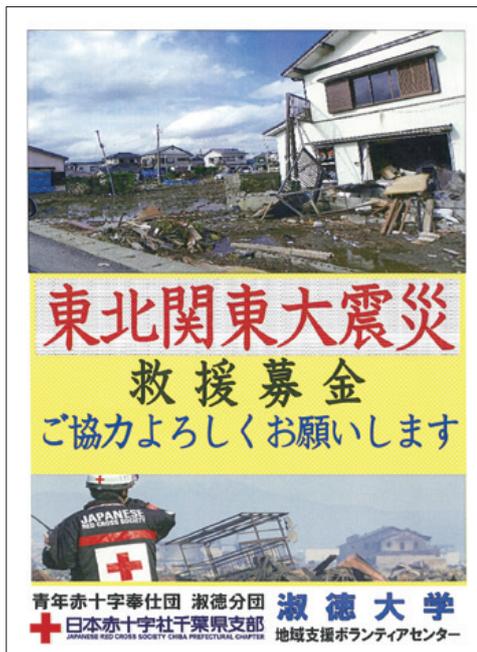
#### 2011. 4. 23 (土曜日)～24 (日曜日)

石巻市雄勝地区 第二次調査隊（磯岡哲也コミュニティ政策学部長、山口国際コミュニケーション学部長、松崎地域支援室長補佐、石川サービスラーニングセンター長）出発。ボランティア活動のベースキャンプを確保した。また、物資の調達ルートも確保でき、長期にわたっての支援活動の目途がついた。

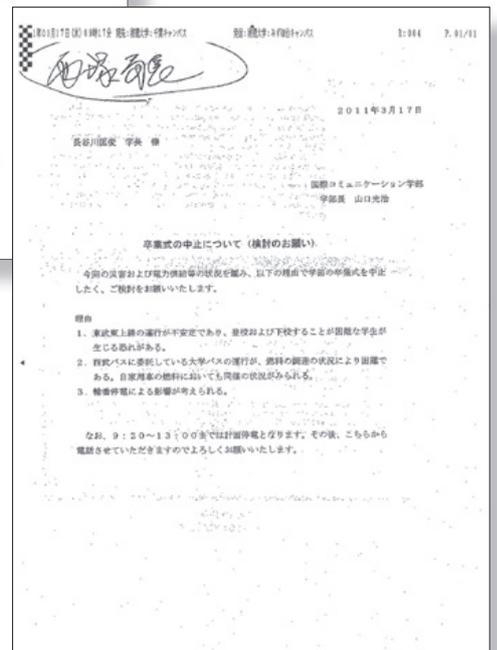
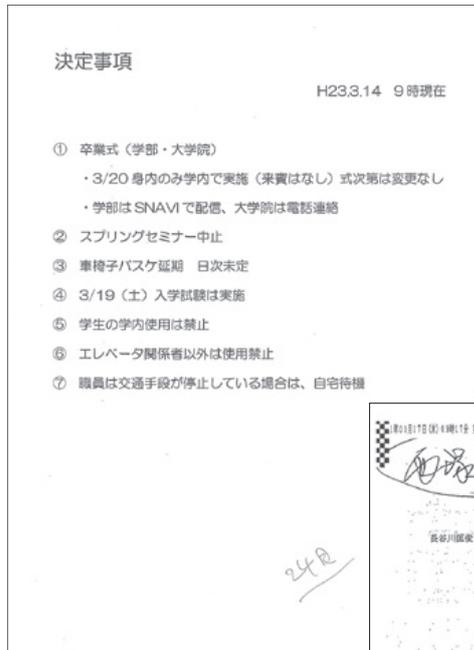
#### 2011. 4. 27 (水曜日)

雄勝ボランティア準備班4名（ボランティアセンター学生支援員コミュニティ政策学科2年 中村亮佑、社会福祉学科1年 若狭啓太、本多敏明助教、松崎地域支援室長補佐）が千葉を出発し、淑徳短期大学（東京都板橋区）に立ち寄り、調理器具や食器の支援物資の提供を受け、一路、東北自動車道で現地へ向かい、ベースキャンプとなる「箕岳観光センター」に到着したがすでに夜半を過ぎていた。





2011.3 当時の街頭募金用チラシ  
このときはまだ、東北地域の被害の全容が  
わかってはいなかった。



2011.9 の千葉県旭市  
半年が経過しているが、津波被害の爪あと  
がまだ残っている。

# 第三章

## 雄勝ボランティア

- 3月11日 金 宮城県沖M9.0の大地震発生
- 3月12日 土 長野新潟県境 M6.7
- 3月17日 木 千葉第2キャンパス街頭募金活動開始
- 3月18日 金 埼玉みずほ台キャンパス街頭募金活動
- 3月19日 土 千葉キャンパス街頭募金活動
- 3月22日 火 埼玉みずほ台キャンパス街頭募金活動開始
- 3月23日 水 千葉県旭町避難所でランチボランティア
- 3月28日 月 YFC 旭市にてボランティア(がれき撤去)
- 4月2日 土 岩佐校長、同窓会にEメール 窮乏を訴える
- 4月4日 月 東北地方同窓会が、岩佐校長物資支援を行う
- 4月14日 木 ボランティアセンター 石巻市雄勝町 視察(第一次調査隊)
- 4月18日 月 大学内に、東日大震災支援ボランティアセンター設置
- 4月24日 日 ボランティアセンター 石巻市雄勝町 視察(第二次調査隊)
- 4月28日 木 準備班 現地入り
- 5月1日 日 ボランティア第1班 現地入り
- 5月2日 月 準備班 帰校
- 5月4日 水 ボランティア第2班 現地入り
- 5月5日 木 ボランティア第1班 帰校
- 5月7日 土 ボランティア第3班 現地入り
- 5月8日 日 ボランティア第2班 帰校
- 5月10日 火 ボランティア第4班 現地入り
- 5月11日 水 ボランティア第3班 帰校
- 5月13日 金 ボランティア第5班 現地入り
- 5月14日 土 ボランティア第4班 帰校
- 5月16日 月 ボランティア第6班 現地入り
- 5月17日 火 ボランティア第5班 帰校
- 5月19日 木 ボランティア第7班 現地入り
- 5月20日 金 ボランティア第6班 帰校
- 5月22日 日 ボランティア第8班 現地入り
- 5月23日 月 ボランティア第7班 帰校
- 5月25日 水 ボランティア第9班 現地入り
- 5月26日 木 ボランティア第8班 帰校
- 5月28日 土 ボランティア第10班 現地入り
- 5月29日 日 ボランティア第9班 帰校
- 6月1日 水 ボランティア第10班 帰校
- 6月2日 木 ボランティア第11班(学生消防隊)現地入り
- 6月3日 金 千葉キャンパスにて、雄勝ボランティア報告会
- 6月5日 日 ボランティア第11班(学生消防隊)帰還
- 6月7日 火 埼玉みずほ台キャンパス 雄勝ボランティア報告会





### <石巻市雄勝町 大須小学校避難所支援活動決定まで>

地域支援室では4月に入り、本格的な学生ボランティア活動開始のタイミングおよび対象地を絞り込むべく情報の収集にあたっていたが、甚大かつ広範囲の被災状況から徒手空拳の状態であった。さらに福島原発の収束が見られないこと、マグニチュード7に近い余震が未だ頻発していることから、大学が活動を主導する場合の学生に対する保護管理責任をどこまで果たし得るか、といった検討を重ねていた。

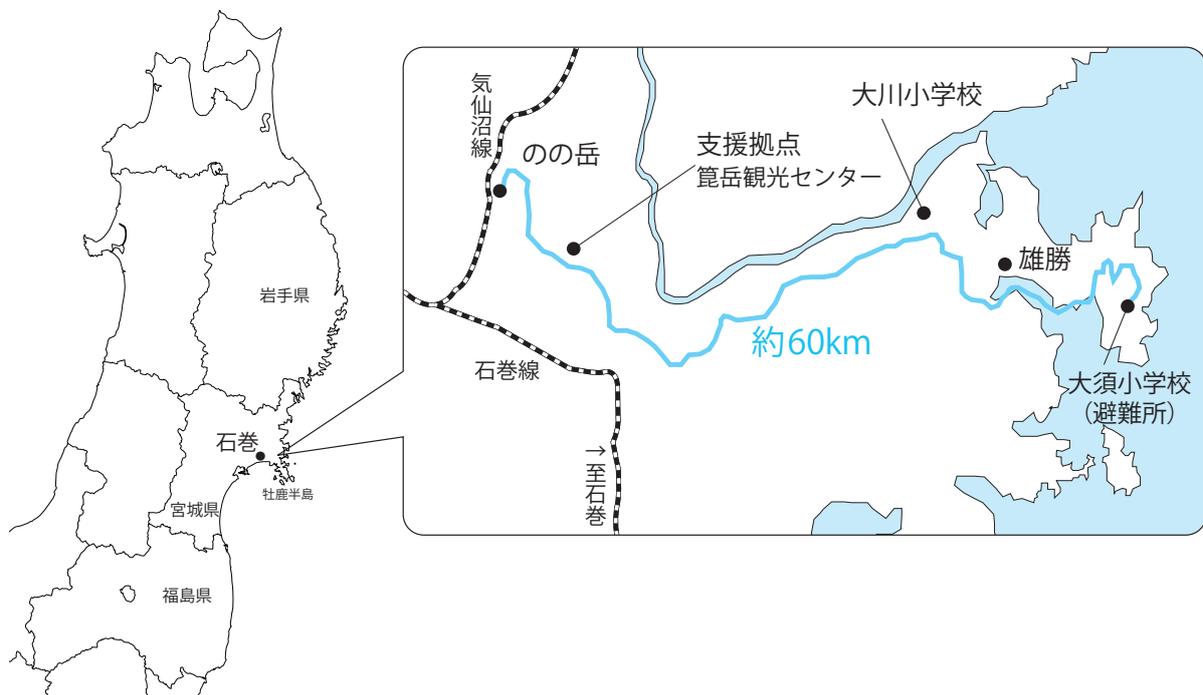
そのような中、4月7日付の細谷氏(第1期卒業生・元本学職員)からのメールを受け、石巻市雄勝地区で奮闘している岩佐氏(石巻市立大須中学校長、10期卒業生)の情報がもたらされた。

まず一度、現地へ行かなければ何も把握できないため、地域支援室長および室長補佐で、岩佐氏を頼りに雄勝町大須へ赴くこと事務局長に打診、承諾を得た。

この頃被災地入りする者の最低条件は「自己責任・自己完結」であり、くれぐれも向こうで迷惑にならぬよう、移動手段、宿泊地、現地での食料確保等「視察のための」下調べが必要であった。

最大の問題は宿泊で、大学出入りの旅行代理店では何処も確保できなかったため、地域支援室で手分けをして直接ホテル・旅館をあたった。石巻での宿泊は早々に望みを断たれ、仙台市内で営業を再開している宿の多くは工事関係者等によって長期で押さえられており、一杯であった。さらに秋保温泉に範囲を拡げたところ、ようやく3~4名で宿泊できる旅館を見つけ、取り急ぎ2泊を確保した。

ガソリン不足については平常に戻りつつあり、個人所有のワンボックスでの移動も検討したが、東北新幹線的那須塩原ー福島間が開通見込みとのニュースを受け、新幹線+レンタカーの旅程とした。レンタカーは各地から車両が集められているとのことで、車種さえ選ばなければ予約は比較的スムーズであった。



こうして4月13日から2泊3日で現地に入るようになった。

### <宮城県石巻市雄勝町・現地調査>

4月13日(水)、長谷川地域支援室長、松崎同室長補佐、岩手県出身でもある石川サービスラーニングセンター長の3名が、前日に福島まで開通した新幹線で東北へ向かう。福島駅よりレンタカーで仙台へ移動、東北自動車道はところどころ段差があるため速度規制が行われており、交通量が多かったほかは、比較的順調に通行していた。自衛隊車両、インフラ復旧のためと思われる工事車両が目立った。

仙台に入った頃はすでに陽は落ちており、沿道では特に全半壊したような建物は見受けられなかった。ただ秋保に入ると、営業しているホテルは少数で、窓にシート張りなどして電気も灯っていない建物が目についた。

宿に入り大広間で遅めの夕食をとるが、続々と工事関係の方々が戻って来ていた。他に行政関係者と思いきスーツ姿の方も半数近くいたが、皆一様に黙々と食事をとっていたのが印象的だった。食材は普通に調達できているようであった。

翌14日(木)、事前に途中の道が満潮時に水没し通行不可となる、という情報があったため、その時間帯を避け現地入りできるよう調整の上、宿舎を出発。仙台周辺の道路は特に大きな被害を受けている様子はないが、どこも渋滞がひどい。途中、昼食確保のため名取地区のコンビニに立ち寄るが、棚に並ぶ食料品は数えるばかりであった。その後、仙台東部道路経由で河北インター近くの道の駅「上品の里」に立ち寄ったところ野菜は近隣の農家の持込みもあるのか通常に流通しており、大量購入すると迷惑でないか念のため尋ねると、「どんどん買ってください」と言われ驚いた次第である。



河北から北上川に出て流域を走行して間もなく、堤防上の道路の路肩が崩れている箇所が目立ち始めた。川岸に目をやると小型の漁船が何隻か打ち上げられている。まだ河口から10キロ以上離れた場所なのに、である。今回の津波の威力を思うと同時に、この先待っているであろう凄惨な景色が脳裏に浮かび、身震いのする思いであった。



釜谷地区に入ると、30メートルはあろうかという橋げたの残骸が、ねじ曲がった鉄柱を突き出すようにして川の中ほどに沈んでおり、その先に橋梁の半分を失った新北上大橋が見えて来た。反対側の水田は一面の泥沼になり、流された船舶や底を上にした自家用車たちの間を、竹ざおを持ち一列に並んで遺体捜索をしている警察関係者の姿も

あった。雄勝方面に右折する交差点の向こうには何度も放映されていた大川小学校も見えた。近づくことはできず、手を合わせ黙祷しながらゆっくり通り過ぎた。次に学生を連れて来ることが出来れば、必ずここで祈りを捧げようと思った。



道は一旦峠に入り、停電のため真っ暗闇の長いトンネルを抜け、雄勝町に入った。絨毯爆撃をうけたかのような光景に皆言葉を失った。車から下りて様子を窺うことは、部外者に許されるはずがない。音がほとんど聞こえてこない町を静かに通り過ぎる途中、報告のため車内から写真を1枚撮影した。

雄勝湾口にある町の中心部から再び峠道を20分ほど進み、雄勝町4地区で唯一の避難所として機能していた大須小学校へ到着、本学同窓生である大須中学校長・岩佐勝氏と対面を果たした。仙台の宿舎を出てからすでに4時間半が経過していた。

大須小学校は、平成14年に2つの小学校を統合し新築したとても立派な校舎で、これまで大雨の度に途中の峠が寸断され孤立した経験から、校舎内に発電機を設置していたそうである。今回も陸の孤島となり、本格的な救援が入るまでの数日間、700人以上の方々がここに避難してきたそうで、発電設備を備えた拠点があったことと地域の人々の支え合いがあったことの両面で何とか耐え忍んでこられたという話であった。



発災時より避難所運営に尽力してこられた小学校長の相原勝春先生にも話を伺ったが、お二人の話から、この時点で次のようなことが判った。

- ①現在も540人の避難者がいる。インフラが遮断されているため、自宅で寝泊まりしながら炊き出し調達等で来られるケースもある。
- ②雄勝で電柱がすべて流されており大須地区への通電の見通しは立っていない。発電機による電力を時限的に使用している。
- ③水道管断裂によって断水が続いており復旧の見通しは立っていない。上水は自衛隊が山中の湧き水を汲み給水している。トイレはプールの水を汲んでいる。
- ④ガスはプロパンなので、安全確認されたものは使用している。
- ⑤衛星電話を本部用として使用している。NTTの移動基地局がもう少しで稼働すると聞いている。

- ⑥救援物資は届いているが、食料品に関しては缶詰やレトルト食品が当然ながら多い。米はある。野菜がほとんどない。栄養の偏りによる疾病多発を心配している。
- ⑦食事は一日2食で、給食室で作っている。地域のお母さんたちがシフトを組み、順番で作り続けているが、毎回数百人分作るので限界が近づいている。



⑧学生ボランティアが来られるなら一日でも早く来て欲しい。特に食事作り、配給に手が足りない。

⑨学生が避難所に宿泊することは難しい。大須中学校に校長宿舎があるが、長期間使用しておらず片付けが必要。また自炊でまかなうしかない。

⑩DMAT(災害派遣医療チーム)が小学校教室で医療活動をしている。



淑徳大学の卒業生であり同窓会宮城県支部役員としても活躍している岩佐氏が、身を粉にして奮闘されているのを目の当たりにした。支援先の選定に手を拱いていた大学当局にとって天の配剤であると感じ、可能な限り手を差し伸べさせていただき決意を伝え、大須を後にした。



宿への帰路、ボランティア集結の拠点である石巻専修大学に立ち寄り、石巻市内の泥かきや瓦礫片付けを終えテントに戻って来た数人のボランティアと話をさせていただいた。ほぼ全員がアウトドア熟達者と見られ、手早く夕飯の支度にとりかかっていた。被災地における自己完結型ボランティアの基本形を見た思いであった。そして併せて、大学主導での災害ボランティア活動は、このような形態を決して選択できないことを実感した。

宿舎にて、学生ボランティアを派遣する上での課題を話し合った。

岩佐氏の「作り手が足りない。栄養が足りていない」という言葉が耳から離れず、当面の食事支援の具体的方策も重要な課題であった。翌朝、福島駅まで車で走行し新幹線で帰途に着いた。また、事務局長に連絡を取り、東日本大震災ボランティアセンターの正式発足を確認した。

4月18日(月)、ボランティア派遣のための現地調査から戻り、課題の整理と具体的計画の策定作業に入る。検討課題は以下の通り。

- 目的、目標の明確化
  - ・活動の支援か、物資支援も含むか
  - ・栄養士等の派遣

## ○学生の安全確保

- ・適切なベースキャンプの選定
- ・現地への運行ルートの安全性担保
- ・ボランティア保険への加入
- ・保護者の承諾
- ・余震等に備えた危機管理体制

## ○活動の継続性の担保

- ・全体活動期間の決定
- ・支援チームによるリレー方式の検討
- ・スケジュール策定
- ・ノウハウ引き継ぎの方法
- ・ボランティア募集と選抜方法
- ・引率者の選定

## ○ボランティア活動をサポートするための方策

- ・公認欠席でなく授業保障とする
- ・交通費、宿泊費等の金銭的支援

## ○支援活動の予算化



4月21日、千葉キャンパスにて第1回東日本大震災支援ボランティアセンターを開催し、以下の方針を決定した。

## (1)被災地生活緊急支援ボランティア(短期集中)

4月下旬より1ヶ月程度を限度として、宮城県石巻市雄勝町大須地区避難所への生活支援ボランティア派遣を、すでに地域支援ボランティアセンターに登録している学生と、埼玉みずほ台キャンパスの希望学生とにより、淑徳大学同窓会岩手県支部、福島県支部、宮城県支部をはじめとした周辺同窓会支部との連携のもと、早急に派遣計画を策定、実施する。

## (2)生活復興の中・長期的支援ボランティア

6月以降、中・長期的な計画のもと、本学学生の学びや学修成果が活かせるボランティア活動を被災地の方々の生活復興支援のニーズに対応して実施していく。その際、各被災地に関わる市町村・社会福祉協議会・教育委員会・各同窓会支部と大学との連携協定を前提とする。

このほか、補講・追試等、学生への修学上の配慮に関することや、安全確保の徹底について意見が交わされ、過去蓄積されたノウハウに加えて万全のボランティアサポート体制を組むこととした。

4月23日、第二次調査隊（磯岡コミュニティ政策学部長、山口国際コミュニケーション学部長、松崎室長補佐、石川サービスラーニングセンター長）派遣。ここで男澤伸氏（宮城県遠田郡涌谷町）にお世話になった。男澤聡子さん（大学院18期生）の御尊父である。彼女は2008年8月の岩手・宮城内陸地震の際にボランティアとして支援活動に参加していた。同氏のお力添えにより箕岳観光センターを支援拠点として決定する。雄勝町から約65キロ離れているが、内陸で安全であり、食事等のサービスが整っていて心おきなく活動に専念できる願ってもない環境だった。このほか食糧、燃料などを調達する業者も紹介していただいた。

地域支援ボランティアセンター常任支援員は全員、そして全キャンパスから学生が集まった（延べ人数＝学生298名、教職員120名）。1班あたり学生4～6名、4泊5日とし、活動の継続性を担保するため、滞在日を1日重ねて引き継ぎを万全にする体制をとった。

### <現地にて>

4月28日、準備班（松崎室長補佐、本多コミュニティ政策学部助教、学生2名）が現地に入った。混乱する中でのやりとりだったため、到着予定に双方行き違いがあった。「必要ないと判断したら即座に帰ってもらう」。到着早々、岩佐氏から厳しい言葉をいただいた。身が引き締まる思いがした。まさに、学祖からの戒めに思えた。これがあったからこそ、6月5日まで、1ヶ月以上にわたる活動を心一つに取り組むことができたのではないだろうか。

まず私たちが担当したのは、避難所の食事づくりのお手伝いだった。避難所では1日2食。お母さん方が早朝から準備している。この負担を少しでも軽くするのが仕事だ。土地柄、忍耐強く控えめな方が多い。積極的に話かけ、打ち解けるように努めた。廊下やトイレなどの共用部分の清掃も進



んで申し出た。そうするうちに、だんだんと信頼を得て、仕事の依頼が増えるようになった。

マニュアルもない中、試行錯誤が続く。平時のボランティアではない。避難所という極限状態にある方々の生活支援である。私たちのプレッシャーは相当なものだった。そこで、結束を固める場となったのが、毎晩行われたミーティングだった。意気込みはあるもののあと一步思い切りが足りない学生の背中を押してあげる。課題を仲間とともに乗り越えた。担当班が交代する際の引き継ぎも入念に行われた。備品がどこにあるか、使っているものは何か。毎回同じことを聞くわけにいかない。注意や指示されたことを事細かくノートに書き記した。全体でのミーティングが終わった後、自主的に担当ごとに詳細な引き継ぎを行うグループも見られた。



活動スタイルが確立できたのは中盤頃だった。班の中で、リーダー、サブリーダーを日毎に交代で務めていく。責任感をいっそう自覚するとともに、リーダーの立場を理解することで、自分で考えて行動できるようになる。帰る頃には顔つきが変わっていく。残りたい、また来たいという学生たちが出てくる。現場で学生とともに練り上げ、淑徳らしいボランティアプログラムになっていった。

学祖ならどう行動するか。活動ではそれを常に考えた。関係性を築くにはどうすればいいか。まずは寄り添うことだ。支援では、モノ以上に気持ちが大切である。支援する、されるということではなく、フラットな関係があってはじめて信頼が生まれる。今回のような被災ではほとんどの人が、支援をされる、ボランティアを受け入れる、ということは皆、初めてだ。

ボランティアの本質がわかったという学生の感想が頼もしい。「夕飯、一緒に食べていけば」「よくやってくれたね」。お母さん方がかけてくださる温かい言葉が何よりうれしかった。

## <活動の概要>

### —活動の流れ—

1日目朝、東京駅を出発し東北新幹線にて古川駅へ。ここからマイクロバスで大須小学校へ向かう。現地到着2時半頃。トイレや廊下の掃除、避難所への夕食配膳などを行う。5時半頃、大須小学校出発。宿舎到着後、引き継ぎや振り返りを行う。

2～4日目は、朝7時朝食。8時宿舎出発。9時半頃、大須小学校到着。清掃など。2時頃から夕食作りの手伝い。4～5時頃、配膳。終了後お母さんたちと一緒に食事をとる。6時頃、大須小学校出発。7時半頃、宿舎到着。ミーティングを行う。最終日に次班と合流し、引き継ぎを行う。

前日に依頼される業務を確認してホワイトボードに記載。情報を共有し、分担やスケジュールを検討した。

### —大須小学校避難所の状況—

活動開始当初、大須小学校避難所には525名の方がいた。これらの方々が体育館を中心に、静養が必要な方は教室、保健室などに入っていた。この食事を雄勝、桑浜、船越、羽坂・熊沢の4地区のお母さん方が用意されていた。朝、夕の2食であった。朝はおにぎりとかップの味噌汁。菓子パンやかップ麺などの保存食が多かった。食材は自衛隊が補給してくれていたが限られたものだった。必要なものを要望すればある程度入手することができたが偏りがあり、私たちも独自で入手することになる。

電気は電源車の発電により、避難所をはじめ大須地区全体の80%ほどがカバーされていたが、電源車の保守等のため、夜9時から朝6時まで計画停電が実施されていた。ガスはプロパンガスによる供給。水道は回復しておらず、給水車の水と山からの沢水でまかなわれていた。これを補給す

ることも私たちの仕事となった。建物内の汚れが目立っており、清掃を率先して申し出て、私たちの責任において行うことになった。

そのほか、自衛隊の支援による入浴が週6日、物資の搬入等も自衛隊が担っていた。

### —印象に残ったこと・各活動の様子—

#### ・雄勝病院

各班が現地到着後、最初に黙禱に立ち寄る雄勝病院。宿舎と大須小学校との往復でも毎日ここを通った。30床を有し、慢性期の病院として機能。地域医療の中核的存在であった。震災当時は院内に患者さん40名、医師・看護師・スタッフ約30名がいた。このうち、入院患者全員を含め64名が犠牲に。3階に避難したが津波は建物をまるごと飲み込んだという。写真や書類、レントゲン、ナースシューズ、手袋がそのまま残されていた。ここで学生たちは決意を新たにして大須小学校へ向かった。

#### ・大川小学校

同じ石巻市には全校児童の約7割(74人)の死者・行方不明者を出した大川小学校がある。教職員11人と児童たちはいったん校庭に集まった後、学校から約200メートル離れたやや小高い新北上大橋へ逃げようとして津波に襲われた。校舎内は机や椅子、木、泥、教科書などが散乱していた。校舎は2階建てだったが、津波の高さはそれをはるかに越えるものだった。

#### ・淑徳ビーチ

第1班から始まった活動では、まず関係性を築くことが重要だった。信頼して仕事を任せて頂けるようになることである。夕食づくりや校舎内の清掃に取り組むうちに、お母さん方がだんだんと受け入れてくださるようになった。特に親しくなるきっかけを作ってくださったのが桑浜地区の方々だった。それから、午前中に浜(桑浜漁港周辺)の清掃を任されるようになった。ほうきや熊手などを自ら持参し、人工物(プラスチックや発泡スチロール、金属など)を拾っていく地道な作業である。海水で汚れてしまうため、手袋を二重にしなければならないほどだった。清掃活動では瓦や木材、お皿などの日常生活で使われる物品、写真やアルバムなどの思い出の品を目にすることがある。これを避難所の方に届けると、とても喜んでくださった。こうして、お母さん方や漁師さんが親しく話しかけてくださるようになった。

ふだんはとても穏やかできれいな海である。いつしかこの浜が交流の場となり、地元の方々が淑徳ビーチと名づけてくださった。



## ・清掃

特に学校内のトイレ清掃は責任をもって任されている仕事。徹底して行った。手袋、マスクを付け、長靴に履き替えて行く。トイレ用の水も補給しておかなければいけないため、プールに水を汲みに行くこともあった。そのほか玄関、廊下、階段など共用部分も担当。特に、後半では、小学校として利用できるよう復旧するため、入念に行った。

## ・食事づくり

まず徹底されたのは衛生管理である。エプロン、三角巾、マスクをつけて調理場に入り、消毒、床の清掃を行った。調理に不慣れな学生もいたが、お母さん方の指示を受け、見よう見真似で懸命に取り組んだ。配膳までフルセットで整った状態が完了。雄勝、桑浜、船越、羽坂・熊沢の各地区ごとに人数を確認し準備していった。中盤ではメニュー決定を任されたこともあった。

## ・子どもたちとの触れあい

夕食づくりや清掃などの合間には、子どもたちと触れ合う時間もあった。限られた中でいろいろなレクリエーションを行った。例えばスナッグゴルフである。景品として駄菓子を用意し、子どもたちばかりでなくお年寄りにも好評だった。このほか、陣取りゲーム、クロケットなど、新しい遊びを考案した。

また、聴覚障がいを持つ学生と手話通訳ができる学生が参加した班があり、この二人が中心となって児童に手話教室を開いたことがあった。手話での挨拶や、手話を交えて歌を歌ったり、聴覚障がいについての授業を行った。

## ・マッサージ

現地で活動する整体師の方から教えていただき、避難所で生活している方々や調理室で食事をつくるお母さん方に実施した。肩から腰、足まで、それぞれの場所に合わせて、ていねいにやり方の指導を受けた。マッサージ中に寝入ってしまう方も。大好評だった。



## ・感謝会

活動終了にあたり、大須小学校・中学校の児童生徒さんたちによる感謝会を開いていただいた。子どもたちと話したり、歌や遊戯で遊んだり、楽しい時間を過ごした。最後はエールで送ってもらった。逆に励ましていただいた、そんなひと時だった。

## ・学生消防隊の活動

約1ヶ月にわたる活動が終了した後、学生消防隊のメンバーが現地に入り、現地の消防団員の方々

とともに活動を行った。大須小学校の避難所に宿泊滞在し、自衛隊による仮設風呂を使わせていただくなど、避難所の方々とともに生活した。浜辺の清掃活動においては、木材の運搬などにも貢献し、今後の展開につながる堅い絆をむすぶことができた。

### —学んだこと—

初めて現地に降り立った時、学生たちはその光景を目にして「言葉にできない」と呆然とした。テレビの映像だけでは伝わってこない悲惨さに胸が痛む思いにかられた。肉親を失っている方も多い。言うまでもなく、ボランティアの中でも非常にむずかしい活動だった。平時ではない状況の中で、避難所の方々との関係性を結ばなくてはならなかった。学生たちは大きなプレッシャーを感じていただろう。学生たちが引き継ぎノートに記載した注意事項を振り返ってみる。

「あいさつ」「声の大きさ」「敬語」「私語を慎む」「メモをとる」「ひまをつくらない」「迅速に動く」「3人以上固まらない」「他人に甘えない(できないことはきちんと頼む)」「わからないことは必ず質問する」「物を借りる時は許可をとる」などが記されている。もちろんふだんでも当然のことであろう。しかし、極度に緊張した状況で、むしろそういう状況だからこそこれを実践しようと努めた。こうした基本的なことによって、心の鍵が開かれたのだった。他者との関係性において自分はどう振る舞えばいいのか。あらためて、生かされている自分、他者とのかかわりの中で生きている自分を認識することができた。同時に、勇気をもって他者に働きかけていかなければ関係性を築くことはできないことを学んだ。

チームワーク、リーダーシップを実践したことも貴重な経験だった。「仲間を信頼し、任せる。一人ですべてやろうとしない」「情報を共有する」といったようなことはもちろん、「引き継いだことだけをやってはよくない」「活動に自分たちの班らしさを求めたい」などのコメントがあった。自発的に協力して活動の質を高めようと努めていった。

すべて、自己満足ではない、ボランティア活動の本来の目的を身をもって理解した結果である。すなわち、Together with himの精神である。「常に関わっている現地の方々を背景を考え、発言や行動に注意する」「どんな小さなことでも意味のあることを忘れずに」「思いやりをこめて一つひとつ行動をすること」などのコメントが頼もしかった。

現地の方々に支えていただいたことも忘れてはならない。物資が乏しい中でお茶を出してくださったり、「お母さんを大切にいなさいね」と温かい言葉をかけてくださったり、住まいや家族を失っている状況の中で、被災地の方々は強く、明るく振舞おうとしていた。私たちも弱音なんて吐いていられない。逆に励まされた、勇気付けられたという学生の感想が多かった。

## 石巻市雄勝町大須地区ボランティア活動学生レポート（学年は活動当時のものです）

今回の大須小学校へのボランティア活動に参加し、改めて今回の震災の被害の大きさや怖さを感じました。ですが、その中であって避難所で生活している方々の頑張りを肌で感じ、地元のために尽くす方々に、自分たちもできる限りのことを手伝いたい、という気持ちをもって1週間のボランティア活動に励むことができました。

（準備班、第1班・コミュニティ政策学科2年 中村 亮佑）

宮城にボランティアへ行った方から「なんとも言えない」と聞いていましたが、実際に行ってみて初めてその言葉がわかりました。状況を見て津波の怖さを感じましたし、それ以上に、さらに津波の恐怖を知ることがありました。それは被災者の方が「波の音は聞きたくない」と言ったことです。長年、海の近くで暮らしてきた人が嫌いになるほど…と考えたら津波の恐ろしさを実感しました。1年生である私には難しいボランティアではありましたが、参加して良かったと思っています。

（準備班、第1班・コミュニティ政策学科1年 若狭 啓太）

「ボランティアをすること」の意味を改めて痛感しました。善意のみならず、事前の入念な情報収集と、現地入りしてからの自発的な行動力が重要です。これから宮城支援ボランティアに参加する方、参加しようか考えている方には、よく考えてほしいと思います。

（第1班・社会福祉学科4年 坂井田 圭二）

桑浜清掃での休憩中、漁師だというお父さんが話しかけてくれました。私たちが千葉から来たことを知ると、「俺もよく漁で銚子まで行くんだあ。千葉もいいところだなあ」と、嬉しそうに話してくれました。私が「この方が綺麗でしょう。」と返すと、「普段はもっと綺麗

だ。いつか元の海見せてやる。」と、誇らしげに笑ってくれました。家も、家族も友達も財産も奪い取って行った海を、まだこんなに愛しているんだという事実、に強く衝撃を受け、私たちにできることを、何年掛かってもやっていこうと決心することができました。

「元の海を見せてやる。」と言ってくれたお父さんの強い気持ちに、淑徳大学ボランティアの一員として、精一杯応えて行きたいです。私も、元の雄勝の海を見たいと思います。

（第1班・実践心理学科3年 倉持 裕子）

ボランティアセンターの仕事について、初めての仕事でした。大変でしたが、やりがいのある仕事でした。現実で見るよりも遥かに凄惨で、言葉を失いました。これから日常で会う人達にも、伝えていきたいと思いました。

（第1班・社会福祉学科1年 大木 達也）

今回初めて宮城県の支援ボランティアに行きました。まず、大須小学校に行くまでの間、車の中で地震と津波での被害状況を見ました。初めて被害状況を見て、まず、言葉を失いました。テレビのニュースで見るより、被害状況が凄まじく、すごく恐怖感を感じました。これからは、このことを知らない人たちに伝えていきたいと思います。

（第1班・社会福祉学科1年 近藤 大樹）

時間を忘れた五日間でした。あの中で、私は物理的な手助けしか出来なかったと思っています。しかし、一緒に作業したお母さんが笑顔で亡くなった旦那さんのことを語っているのに触れ、誠実に活動することが心理的な手助けに繋がっていくのだと感じました。死別の痛みを、まだ会って間もない私たちに伝えてく

れたことをとても嬉しく、そして悲しく思います。今もあの地に生きる方のために何が出来るのか、これからも探し行動していきたいです。

(第1班・社会福祉学科1年 嘉山 さゆり)



今回のボランティアに参加し現地へ向かって、見る世界というのが変わりました。今迄テレビ越しのみだった現地の悲惨な姿、特につい二ヶ月前まで機能していて人がいた雄勝病院の廃墟としか思えない姿や浜に流れ着いた元々家屋だった木の瓦礫や割れガラスを見て、そしてそうした直接の原因である海の今は穏やかな様子を見てその恐ろしさを、その上で避難地である小学校で会った人たちの生きる力強さをまさに「実感」しました。

(第2班・実践心理学科3年 四釜 脩)

今回のボランティア活動を通じて、貴重な経験を得ることができました。僕が一番思い出に残っているのは、炊き出しの時に一緒に料理を作った、地域のお母さん方との交流ができたことです。皆さん、とても笑顔で話やすく、優しく接してくれました。

この活動に参加する前までは、“見ているだけ、何もできない”自分をもどかしかったです。ボランティアに参加できて良かったです。また機会があれば、参加したいです。

(第2班・コミュニティ政策学科1年 大徳 諠之 学生消防隊所属)

宮城で見た事の中で最も印象に残った事は、雄勝の公園前に設けられていた仮墓地です。

ショベルカーで無造作に掘られた穴に土を被せた物の前に、名前もなく番号だけが書かれた棒が立っているだけの、本当に仮も仮の墓地でした。話によると、きちんとしたお墓が建てられるのに3~5年かかるという話を聞き、悲しい気持ちと共に、仮墓地の皆様が一刻も早くちゃんとした墓で安らかに眠れるよう願いました。

(第2班・社会福祉学科1年 泉 優介)

ボランティアに行っただけで自分が感じたのは子供たちの明るさ・心の強さでした。機会があつて仲良くなれたのです。自分の感じでは、普通の子供たちでした。現状に悲観してなくて元気でした。その姿をみて、僕が元気をもらいました。僕自身も4泊5日のボランティアで被災地の皆さんに少しだけかも知れませんが元気をプレゼントできたとおもいます。

(第2班・コミュニティ政策学科1年 石橋 宗一郎)

被災地の状況を自分の目で見て、その悲惨さに胸が痛みました。同時に自分に何が出来るのか?と考えた時に出来る事の少なさに無力感も感じました。そんな中、現地の方々の中には、帰るべき場所が無かったり、大切な人が居なかったりするのにも、私たちに言葉をかけてくださったり、人の強さと優しさを身をもって実感する事が出来ました。

人を助けたり、人の為に何かをするということの難しさと喜びを今回のボランティアを通して見つける事が出来ました。この体験は自分の財産になりました。ありがとうございました。

(第4班・実践心理学科2年 杉本 麻美)

宿舎から大須小学校へ車で移動する途中、のどかな田園風景が一変、被害の爪痕が広がっていきます。あたりまえの生活が奪われ、避難所での生活を強い

られている方々の不安、悲しみ。それは、経験した人でなければ本当はわからないでしょう。でも想像することで、少しでもその気持ちに近づこうと努力しました。活動中、お菓子をくれた幼い子どもの優しさ。この目を見たこと、心で感じたことは、これからも絶対に忘れません。

(第5班・コミュニティ政策学科2年 倉西 美友紀)

テレビや新聞で現状をわかったつもりで参加しましたが、実際に目にすると言葉にならず、ただ胸が痛むばかりでした。そんな中にあっても、避難所に夕食を持っていくと多くの人が笑顔で「ありがとう」と声をかけてくださいました。「遠くから来てくれてありがとう」って。日ごろ何気なく使っている「ありがとう」が、すごく大切な言葉だとあらためて感じました。短い期間だったのが残念ですが、1秒1秒が本当に貴重な体験でした。

(第5班・コミュニティ政策学科2年 篠 加奈子)



初めて現場に立った時、テレビの映像だけでは伝わってこない被災地の静けさや潮の匂いを肌で感じ、震災が現実であることを実感しました。3月11日のままだま時が止まっているようで、言葉にならないくらいショックだったことを覚えています。そんな中で、避難所の小学生たちに手話を教える機会をいただきました。とても好評で、2日間続けて実施することになりました。小学生たちに少しでも喜んでもらったのが嬉しかったです。

(第6班・社会福祉学科2年 関 瞬也)



現地に着いた時は想像以上の被害の大きさに驚きました。しかし活動を通して、たくさんの地域の方と触れあうことができ、地域の方の笑顔から私自身も元気をもらうことが出来ました。マッサージを教えて頂き、体育館で行い地域の方と触れ合えたことも嬉しく思います。お母さんたちが私の好きな食べ物を聞いて、後日夕食のメニューにしてくれたのも嬉しかったです。

桑浜の片付けもグループで協力し、ほんの少しの場所ですが綺麗になりました。片付けをする中で大切な品や生活用品を見つけ、生活があったことを改めて感じました。活動を通して、沢山のの人に支えられ今回の活動ができたことを嬉しく思います。

千葉に帰ってきてテレビニュースや新聞で石巻を始め、震災について今まで以上に耳を傾けるようになりました。震災の現状を伝える際に、大須を震災の町としてではなく、山や海の自然の溢れた良い町だということも伝えていきたいです。

(第7班・実践心理学科4年 佐久間 あゆみ)

初めて現地入りし、雄勝病院の前で黙とうをした時、自分の非力さを実感するとともに、それでも頑張ろうと思いを新たにしました。実際、現地ではやるべきことがたくさんあり、後ろ髪を引かれる思いで活動を終えました。東京に戻ってからも、時計を見るたびに「今ごろお母さんたちは何をしているのかな」とその姿を思い浮かべてしまいます。河北新報のホームページを毎日のようにチェックして、状況を把握するように努めています。

(第7班・文化コミュニケーション学科3年 神保 千波)



最初に石巻市に入ったときに、テレビでは感じられなかった現状を平常心では受け止められませんでした。自分の意志で来たのに、この状況で何ができるのか。今回のボランティアの前半はこのことについて悩みながらの活動でした。1日、2日と思う様な行動がとれず悩んでばかりいましたが、最終日までには情報の共有を提案し、全員の行動を全員で理解しようと考えました。このボランティアはここで終わりではないので、今回できなかったことは、これから自分で行動していけばいいと思います。

(第8班・文化コミュニケーション学科2年 田尻 琢也)

浜で見つけた写真を、引率の職員の方が避難所にいるお母さんに渡したことがありました。この場所にはもともと日々の暮らしがあったはず。家族の背景まで見えてきて、点と点が結ばれるってこういうことなのかと実感しました。僕たちの班は避難所を小学校として使える状態に戻す清掃がメインで、それまでの班と活動内容が異なりましたが、現地の方の役に立つことに徹しようと議論し、目標を共有することで有意義な活動ができました。

(第8班・人間環境学科4年 依田 一樹)

最終日に大須漁港に案内していただきました。灯台に登って見た美しい海の風景が今でも印象に残っています。夕暮れ時の穏やかな海。でも、この海が人々や家を飲みこんでしまった。今日この場を離れると思うと、とても心苦しく思いました。自分で足を踏み入れてみなければわからなかったことがたくさんありました。現地の復興が少しでも早く進むことを祈らずに

はいられません。それを確かめるため、またぜひお手伝いに行きたいです。

(第8班・人間環境学科3年 堀井 美穂)



大須で支援活動をさせていただき、人の温かさによって改めて気づかされました。避難所で生活をしている人達の負担を少しでも減らそうと活動していたのに、逆に気を使わせてしまっていて本当に自分がここにいていいのか悩んだときもありました。しかしマッサージや炊き出しで配膳をしたときなど「ありがとうございます」「ご苦労様」と一言声を掛けてもらえることが大変嬉しかったです。自分も少しは役に立っているのかなと思いました。

今回大須で、支援活動させていただいたことを忘れずに次に活かしていきたいです。

(第9班・社会福祉学科2年 岡本 幸恵)

石巻市での活動の中で、最も印象に残ったのは、雄勝病院に供えてあった写真です。雄勝病院では毎朝、黙祷を捧げて来ましたが、一番に印象深かったのは、この写真でした。

それを見たとき、どうしてなのか涙が出て来るのを感じました。ここにいた人達が確かにここにいたと、明らかに証明できるのは「この土に汚れて色あせた、ボロボロの写真しか無いのだ」と思うと、悲しくなりました。ボロボロの写真しか残されていないけれど、そこには確かにたくさんの方がいたのです。

4日目のミーティングで、その事を話すと先生方は「例え物が残らなくても、人の記憶にはちゃんと残る」

と言って下さいました。「けれども、人は忘れちゃうから、字に残しておくんだよ」ともおっしゃってくれました。ここで見た事の全てを、たくさんの方が確かにそこで生きていたということを、記録し、決して忘れず、ここから先へ歩んで行きたいと思います。

(第10班・社会福祉学科2年 鈴木 颯太)

毎朝立ち寄り、黙祷を捧げた雄勝病院は、入院患者が全員犠牲になりました。患者さんや職員の写真が残されていたり、処置に使われる手袋がぶら下がっていたり、悲しい光景を目にしました。患者さんは闘病生活を送ることだけでも辛い気持ちを抱えていたでしょう。そこに突然起きた地震、襲い掛かった津波の恐怖は、僕には想像することができません。

命の重さ、それに関わる看護師という仕事の責任の大きさをあらためて感じました。

(第10班・看護学科4年 山本 龍太)

地域消防団の方々と協力して、浜辺の清掃活動を行ったことが印象に残っています。同じ消防団員という立場で貢献できたことがとても嬉しかったです。力を合わせて、木材の運搬や清掃などをスピーディーに行うことができました。これからも自分たちだからこそできることを考え、ボランティア活動を続けていきたいと思います。

(社会福祉学科3年 阿部 陸 学生消防隊)



現地の被害を目の当たりにして、津波の威力に圧倒されました。浜辺の清掃を行っていても、次から次へと木材や発泡スチロールなどが打ち寄せてきました。とても2日間では足りず、ボランティア活動を継続していかなければならないと思いました。「淑徳ビーチ」が早く元通りの美しい浜に戻ることを祈っています。

(社会福祉学科2年 濱本 千尋 学生消防隊)

私たちは避難所である大須小学校に寝泊まりして、自衛隊の仮設掛湯風呂に入ったり、避難者の方々と生活をともにしました。救援物資は適切に送られているか。いま何が求められているのか。現場の目線で知ることができたと思います。今回の活動で僕たちが見たこと、感じたことを次の機会に活かしていきたいです。

(コミュニティ政策学科1年 筒井 義一 学生消防隊)



10班(最後のチーム)は、現地での活動最終日を迎えました。

台風と潮の影響で北上川沿いの鉄板道路が通行止めになり、大きく迂回しましたが、無事に大須小学校に着きました。

これでひとまず活動の第一局面が終わります。私たちの行ってきたことは、本当に小さなことだと思います。しかし私たちの大須への思いは、時間の経過とともにさらに大きくなることはあっても縮小することはないでしょう。

33日間にわたる活動に携わった学生の皆さん、今回希望していながら行けなかった方々、そして何よりも、活動する私たちに笑顔の美しさと生きてゆく強さを教えてくださった大須の皆様方に、心より御礼申し上げます。

We'll be back soon!

(大学公式サイト内、復興支援ブログより)

5月予定表

日・曜	記 事	月 予 定 表
1・日	物資運搬 倉庫整理 夕飯支援	16・月 夕食 団工室(支援物資の整理) 桑浜 <sup>23</sup>
2・月	夕飯支援 昼食炊出し支援	17・火 夕食 桑浜支援
3・火	夕飯支援 学校未校 桑浜下見(地域) <sup>00:00</sup>	18・水 夕食 昼食(炊出し手伝い)
4・水	桑浜支援	19・木 夕食 分譲会(借地) 桑浜支援
5・木	夕飯支援	20・金 弁当 桑浜支援(朝) マルサ(午後)
6・金	夕飯 中学校(10:00)	21・土 夕食 昼食(炊出し手伝い)
7・土	夕飯 桑浜(00:00)	22・日 夕食
8・日	昼食 夕食	23・月 夕食 IP環境整備
9・月	昼食 夕食	24・火 夕食 昼食(炊出し手伝い) 3階HL 水人 登り 降
10・火	夕飯 桑浜(10:00)	25・水 弁当 昼食(炊出し手伝い)
11・水	桑浜(10:00~)	26・木 夕食
12・木	夕飯 桑浜(10:00~)	27・金 弁当 昼食(炊出し手伝い) 桑浜支援
13・金	昼食(炊出し手伝い) 夕飯(炊出し手伝い) 客室科	28・土 夕食 復興寺(18時) 夕食(炊出し)
14・土	夕飯(炊出し手伝い) 昼食(炊出し手伝い) 客室科	29・日 夕食 復興寺(18時)
15・日	夕飯 桑浜(朝) 昼食(炊出し手伝い)	30・月 夕食 復興寺(18時)
		31・火 夕食 桑浜支援 昼食(炊出し手伝い)

## <広がる絆>

多くの方々に支えられた活動だった。例えばある時、宿舎へ帰る途中の道の駅で菓子問屋の車を見つけた。何か避難所に差し入れできるものはないかと考え、すぐさま声をかけた。これがきっかけで食材の仕入先などを紹介していただいたことがあった。マッサージも避難所にボランティアで来ていた整体の先生とのご縁で始めたものである。

関係性が深まるにつれ、浜の清掃、漁業のお手伝いと活動が広がっていった。最初に私たちを受け入れてくださったお母さん方が私たちの応援団になった。現在展開している活動も、すべて避難所で結んだ絆が出発点である。ここから交流が広がり、おがつ共生きハウスの開設にあたって、多大なお力添えをいただいた。震災から2年以上経った今も、学生が訪れるのを楽しみに待っていてくださる。

大須小学校避難所から始まった活動はその後さまざまな展開を見せている。学習支援ボランティア等を通じて子どもたちとの交流も続いている。また、学生の発案で石巻市内のお菓子屋さんとのコラボによる復興あげまんじゅう、絆ゆべしなどの名産品も生まれた。本学(地域支援ボランティアセンター)がコーディネートしている活動に加え、学生が自主的に取り組んでいる活動も多数あり、そのすべてを掲載することはできないが、大須小学校・中学校を拠点とする学習支援ボランティア活動について概要を紹介する。

各班が大須避難所を去るたびに「また来てね」と笑顔で見送ってくれた子どもたち。この声に応えたい。また、大須小学校・中学校では震災の影響により学習の遅れもあり、引き続き支援してもらいたいという要望もいただいた。

2011年、2012年の夏休みに学習支援ボランティアを派遣。2011年度は学生7名、教職員3名、2012年度は学生6名、教職員4名が参加した。中学校では学生が自分の得意科目を指導したり、受験勉強をお手伝いした。小学校ではドリルやプリント学習を一緒にやったり、レクリエーションを楽しんだり、児童の生活全般にわたってサポートした。先生方や保護者の方を交えて、校庭で流しソーメンやバーベキューなどで交流する機会も。すっかり地域の方々にとけ込んでいる様子だった。児童・生徒の支援という活動であるが、同時に教員をめざす学生にとっては自身の勉強の場でもある。ここでも同じ目線に立つ、共にあるtogether with himの精神を学ぶことになった。2012年度は、漁船に乗ってウニ漁を体験させていただいたり、大須浜産の無添加とろろ昆布の作業所を見学させていただいたりした。いまでも個人的に交流を続けている学生もいるという。学生の成長と共に、雄勝の方々も力強く歩み続けている。

未曾有の大震災にあたり、私たちの当然の使命としてスタートした被災地支援活動。開学以来の蓄積があっ



ではじめて成し得たボランティア活動であったと言える。他者とともに汗を流し、自己を高めていく。共生、実学の原点を忘れてはならない。そして、いつまでも雄勝の方々に寄り添い、これを継承していかなければならない。

学生たちも感想を述べているが、やはり現地に足を運ばないと状況や思いを肌で感じることはできない。ぜひ、何らかの機会に現地に赴き、震災という体験を共有してほしい。そして、感じたこと、学んだことを、日々の生活の中で実践してほしい。一人でも多くの学生が、それぞれの立場で、淑徳イムズを受け継いでくれることを望む。



## 雄勝地区でのボランティア活動に同行した教員からの報告

コミュニティ政策学部  
助教

## 本多 敏明

## 準備班から第2班としての活動

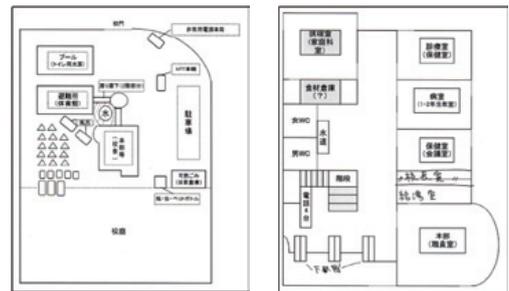
## —準備班 第1・2班—

私は準備班(2011年4月28日～5月2日)から第1・2班(5月1日～8日)に参加しました(第6・7・9班にも参加させていただきましたがここでは割愛します)。

準備班の目的は、第1班から第10班が活動を始めるための下準備でした。主に夕飯炊出しの手順や注意事項を自分たちが身につけて第1班の学生に伝えること、夕飯の炊出し支援以外に自分たちができることを探すことでした。

おおよそ1日のスケジュールは次の通りです。朝7時に宿で朝食、8時に宿を出発、途中の雄勝病院にて黙祷を捧げ、9時30分に大須小学校に到着。午前中は小学校の廊下の掃き掃除とモップがけをするのが日課で、その後は支援物資の仕分けをおこなうこともあれば、外部から来たバザー、県外から炊出しに来た人たちのお手伝いなどをおこないました。

午後は、昼食を食べ、少し休憩を挟んだ後に、14時からお母さんたちの夕飯炊出しのお手伝いの開始。この夕飯炊出し当番になっているお母さん方を支援することが、ひいては旦那さんや高齢者や子どもたちなど避難所の全員を支えることにつながるはずだという意気込みで、夕飯調理を真剣にお手伝いしながらもお母さん方との会話を楽しみ、お母さん方に少しでもリラックスしてもらえよう休憩時には率先してお茶を入れたりマッサージをしました(すべての学生の関わり方が真摯で素晴らしく、炊出し準備の時間が日に日にお母さん方にとって束の間の休息の時間になっていくことが各々の表情に表われていました)。16時に配膳、16時30分からお母さん方と一緒に夕飯をいただき、17時30分に小学校を出発し、19時に宿に戻り、19時から宿の夕食を食べたり入浴したり洗濯をおこない、21時から一日の反省会をしました。反省会は長いときで2時間近くかかりました。



(左:大須小学校敷地全景。右:小学校校舎内部(1階)。2011.4.30ごろ)

コミュニティ政策学部  
専任講師

## 矢尾板 俊平

## 被災地で学んだ「共生」と「感謝」の精神

## —第5班—

淑徳大学東日本大震災ボランティア活動の第5班として、2011年5月13日～17日の4泊5日で石巻市雄勝地区を訪れました。まだ余震なども続いており、学生5名の引率者として、学生を預かる責任の重大さとそれに伴う緊張感、プレッシャーを抱えながら、新幹線に乗車していたことを覚えております。

2011年3月11日。それまで当たり前であった生活が、その一瞬から大きく変わり、当たり前の幸せを奪ってしまったかもしれません。この4泊5日の中で、何か特別なこと、大きなことはできないかもしれないけれども、もしも私たちが被災地の方々と「共に生きる」とただけでも、被災地の方々に喜んでいただけるのであれば、それが今回のボランティア活動の意義なのではないかと思いました。

避難所でのボランティア活動は、主に夕食作りのお手伝い、避難所のトイレ掃除、浜の片づけなどでした。

浜の片づけでは、何度も何度も浜を掃除しても、午後には、翌日には漂流物が波打ち際に打ち寄せられます。それでも片づけ続けることが重要なのだと学びました。このとき、「目の前の現実」を直視し、まずは、その「現実」を変えること、そして、続けていくことの大切さを感じ、私自身の視点を変えました。

活動を通じて、私たち自身も支えていただいているのだと感じました。つまり、誰かが誰かを支えていたり、支えられていたりするのではなく、常に支え合っているのだ、それが社会の基盤になればならないのだ、ということを実感しました。

このボランティア活動を通じて、学生も私自身も大きな「気づき」を得て、学ぶことができました。そして学生たちは大きく成長することができたと思います。そして私自身は、「ソーシャルビジネス」という新たな研究の重要性を強く感じ、その後の研究につながっていています。最後になりましたが、石巻市雄勝地区の皆様から感謝を申し上げます。



## 第7班 活動所感

### —第7班—

千葉キャンパスの学生3名と埼玉キャンパスの学生2名の両キャンパス混成チームとなった第7班は、慌ただしい中でのチームメンバーの決定だった為、両キャンパスの学生の初顔合わせは活動初日の現地集合でという、引率者としてはちょっと心配なスタートだったと記憶しています。

国際コミュニケーション学部  
准教授  
藤森 雄介

迎いの車に乗った時点では、学生たちにはどこか真剣さに欠けていたような雰囲気がありました。山間の道を抜けて雄勝町の津波到達地点から広がるすさまじい被災の状況が目に入った途端、彼らは言葉を失い、それまでの「雰囲気」は吹き飛びました。そして、避難所で必死に活動を行っている第6班から引き継ぎを受ける頃には、「自分たちには何が出来るのだろう」ということを一人ひとりが真剣に考えていました。

さいわい第6班までの皆さんが十分な信頼関係を築いてくれたおかげで、スムーズに避難所の方々に受け入れて頂きました。更に、他のボランティアチームの方から簡単な腕や足腰のマッサージ方法を教えて頂き、それを避難所の方々に提供することを通じて、「生活の場(体育館のご家庭ごとに区切られた居住スペース)」にお邪魔させて頂いて直接お話を聞かせて頂くという貴重な体験もさせて頂くことが出来ました。

わずかな活動期間であったにも関わらず、帰路に向かう私達を見送りに避難所から駆け出して手を振ってくれた方々、またそれに応えようと落涙も拭わずに車中から精一杯手を振り返す学生たちの様子を見たとき、改めて「ボランティア活動」を通じて気づかせ、学ばせて頂いたのは私たちだったのだと理解しました。

今回の活動に参加した学生たちの進んだ道は様々ですが、この5日間の経験は間違いなく彼らの人生の糧となっていることと確信しています。

その意味でも、非常に困難な状況の中で私たちを受け入れて頂いた避難所の方々には、今も感謝の言葉しかありません。本当にありがとうございました。



総合福祉学部  
教授

## 土井 浩信

### 大須の海で

#### —第9班—

最も強い衝撃を受けたのは、だれもが同じであろうと思いますが、津波の惨状を360度の光景で見て、とても我が身一つで向き合えない、感じ切ることが出来ない深い畏れに包まれたことでした。

雄勝の病院の3階の窓に、ビニールの手袋がフラフラと風に揺れていました。病院の全ての生命を飲み込んだ津波のすさまじさと、そして今のこの静けさまでの時の流れの中で、手袋は窓にひっかたままゆれていたのでしょうか。そう想うと、いかに鈍感な私でも胸にこみあげるものを押さえることは出来ませんでした。

大須小学校の先生が、子ども達に「島人ぬ宝」を唄わせていました。歌詞の「島」のところを「大須」に変えて唄っていました。これも衝撃でした。多くの命を奪い破壊した津波のあとに、この海の歌を唄っていたのです。海を恨むような子どもには絶対にしないのだという先生たちの強い願いがあることを知りました。同時に深い尊敬の念を覚えたのです。

大須の漁港で、海に流れては困る発泡スチロールなどを拾い集める作業の時、小さな記念のメダルや海水に汚れた写真の切れっ端を数点拾いました。避難所に持ち帰ってお見せしたら、お年寄りが急に張りのある声になり「これはきっとあの人のじゃ!」などと目を輝かせて喜ばれたのです。何かとても大切な光景に出会ったような気がしました。人は思い出があるから前を向いて生きていけるのですね。

同行した学生達と共にそんな貴重な得がたい数々の体験をさせていただいて、本当に感謝の気持ちで一杯です。ありがとうございました。



コミュニティ政策学部  
教授

## 鏡 諭

### ぬくもりをとどけて ～雄勝小学校でのふれあい～

#### —第9班—

大震災の約2ヵ月後、私は市役所を辞めた。災害対策本部が立ち上がり、様々な支援が始まった時期であった。阪神・淡路大震災の際には、避難所支援をした経験から、自分が出来る事について自問しながら、公務員としての任期を終えようとしていた。

大学に着任後、大学としての復興支援組織が立ち上がり、学生と雄勝小学校の炊き出し、清掃等の支援に入った。自分としては、前職で果たせなかった思いを実現できる機会を得たことに喜びを感じていた。

しかし、現実を見て驚いた。阪神・淡路の際は地震の直接の被害や火災によって、地域が壊滅状態になってはいたが、残っていた建物は少なくは無かった。しかし、東日本大震災の猛威はそれをはるかに上回る規模であり、被災状況であった。

あわせて、今回は第9班の学生5人にかかる随行であったため、学生の安全と避難所運営支援という、2つの課題をこなさなければならなかったが、結果的には、多くの収穫があった。ちょっと頼りない学生が避難所にいる方々にとっ

て、自分の子どものように感じていただけたし、手取り足とり教えていただく事で、一方的に支援される立場ではない、give and take の関係を作り出していたのではなかったか。

また、学生と行ったマッサージは、さらに効果的なコミュニケーション手段となった。肩や背中にそっと触れると、パンパンに張っていた。避難所での長い生活の厳しさを感じさせた。肩や足に触れ、ぬくもりを感じると「気持ちいい」との声があった。家が流されたり、家族がまだ見つからない話をぼそぼそと、語ってくれた。少しの時間だが心が通った不思議な感覚を覚え心が温かくなった。

学生が出来る支援は、自衛隊や行政のように決して、大きな支援ではない。しかし、何よりも暖かい、こうしたぬくもりを届けられた事が、大きな意味ではなかったか。何かをやってあげる事ではない、そこにいる事の大切さを感じた。



看護栄養学部  
教授

渡邊 弘美

## 私のふるさと、福島・うつくしまと東日本大震災

### —第10班—

私は福島県いわき市(当時は平市)で生まれ、高校を卒業するまで穏やかな気候と魚が美味しいその地で育った。今回の東日本大震災で事故が起きた福島原発はいわき市の北に位置、1971年3月に1号機の営業が開始され、1979年末に6号機が完成した。

震災以来、東北を訪れて何かできることはないか、この目で確認したいという思いがどんどん大きくなっていった私は、微力ながら参加させていただいた。津波から2カ月以上たっていたが、あたりはまだ息をのむような悲惨な光景であった。

当時体育館を避難所にしておられた住民の方の食事の支度は、当番制によるお母さんたちの仕事であった。あちこちから食材はたくさん届いており、白菜は山積みになっていた。精神的に苦しい時にする家事がどんなに苦痛かも理解できる。食材と共に、調理する人手がもっと組織的に配置されたらどんなにか助けられるかと思った。「現地のお母さんたちは思ったより明るく元気ですね…。」そう言ったら、1カ月にわたって活動を支援していた石川センター長に、「元気そうにでもしなければやってられないですよ!」と言われ、表面的にしか物事を捉えていなかった自分が恥ずかしかった。

私たちが出来る支援を、ささやかながらでも継続すること、そして今回起こった出来事はまだまだ解決されず、苦しんでいる方々が沢山いることを心にとどめながら前に進めていかなければならないと実感した。「この事実が風化してしまうこと、震災で被害を受けた自分たちが忘れられてしまうことが最も怖い」と言っていた現地の皆さんの言葉を伝えなければと思った。

福島原発が廃炉になるのにはあと40年かかるという。しかし、私のふるさと福島・うつくしまが、一日も早く安心で安全なふるさとになることを願わずにはられない。

## 第四章

### 学生ボランティア活動をサポートしていただいた方々



雄勝地区は、全国の90%もの硯の生産を誇る伝統的工芸品をもっています。雄勝復興には、かき・ほたて等の養殖を中心とした漁業と雄勝硯の復興は欠かせません。この復興に向けた動きも始まっています。「雄勝地区震災復興まちづくり協議会」も結成されました。

## 石巻かほく商工会

旧雄勝総合支所前にオープンした仮設の「おがつ店こ屋商店街」のリーダー。

雄勝硯伝統産業会館は津波で破壊されたが、「おがつ店こ屋商店街」は、被災した地元の食料品店や海産物店、すし店、自動車整備販売会社、雄勝硯生産販売協同組合など11店舗が入居しており、壊滅的な津波被害を受けた雄勝地区にある唯一の商店街として、地元暮らし人々のライフラインを日々支え続けている。また雄勝町に訪れるボランティアの方々や観光客との交流の場としても親しまれている。



石巻かほく商工会 会長  
澤村 文雄さん  
澤村製硯 代表

## 雄勝まちづくり復興プロジェクト委員会

震災以前は雄勝地区では全国の90%もの硯の生産を誇る伝統的工芸品を10カ所の硯工場生産していたが、震災後は被災硯・スレートを使用した作品を生産するようになった。一つひとつの作品に故郷の豊かさを表現し続ける、「雄勝ものづくり」の代表的存在。

「雄勝地区震災復興まちづくり協議会」の仲間と自分たちで復興プランを考え、雄勝の復興に対して自分の考えをもって活動をしている。



雄勝まちづくり  
復興プロジェクト委員会  
委員長

高橋 頼雄さん

有限会社高橋頼母硯店  
代表取締役  
雄勝地区震災復興  
まちづくり協議会 副会長

## 仙北富士交通株式会社

震災後の人手不足、ガソリンなどの入手が困難な中で大学のボランティアプロジェクトに賛同してもらい宿泊所からボランティア活動を行う「雄勝地区」までの移動や、班交代時にもお世話になった。「雄勝地区」までの移動を主に協力してくれたドライバーの大森さんは地元の出身で、震災時は遠方の他の会社に勤務していたが震災をきっかけに以前努めていた仙北富士交通株式会社に戻り、学生・教職員の活動の手助けをしてくれた。



ドライバー  
大森 修さん

## 雄勝地区桑浜の漁業を営む

準備班が現地に入った時、最初に行ったのが、廊下やトイレなどの共用部分の清掃だった。活動が進むにつれて、大須小学校の教頭先生がボランティアへの要望事項を書く掲示板を用意してくださった。しかし、最初はなかなか要望がでない。震災直後で避難所の方々もどうしたらいいかわからなかったこともあるだろうし、東北の方々はもともと忍耐強いこともあっただろう。そんな時、桑浜の清掃をやってほしいと声をかけてくださったのが永沼さんだった。海岸の木材や発泡スチロールなどの清掃である。これまでの働き振りを認めてくださったのかもしれない。最初に学生たちに理解を示してくださったキーマンだった。そこから、他の地区からも依頼を頂くようになった。



漁師・清勝丸  
永沼 清徳さん

## ボランティア学生が全員お世話になりました

ご自宅が津波に襲われ大須小学校に避難されていた。また、お仕事は同小学校の職員であった。以上のことから、何をすればいいか、被災者の方々はどうな気持ちなのか、あらゆることについて細かいアドバイスを頂いた。最初に共用部分の清掃をさせて頂きたいと相談したのも阿部さんだった。食事担当のお母さん方は4地区が毎日交代で務めていたが、お立場から阿部さんは毎日調理場に姿を見せた。お母さん方と親しい関係性を築くことができたのも阿部さんのおかげである。まさに、学生たちの頼りになるお母さんの存在だった。折に触れ、何でも相談させて頂きながら活動を進めていった。的確なご指導を頂いたことで、活動の方向性が見えてきた。



大須小学校職員  
阿部 りえこさん

## ボランティア活動の後方支援

被災地支援ボランティア活動を始めるにあたり最大のネックは拠点（宿泊場所）の確保だった。時刻表巻末の宿泊施設に片端から連絡したり、インターネットで調べたりしても宿が見つからない。そんな時、担当者が男澤聡子さん（大学院18期生）のことを思い出した。岩手宮城内陸地震支援の際にボランティアとして参加し、石巻市に近い宮城県涌谷町の出身だった。藁をもすがる思いで連絡をとり、そこで紹介頂いたのがお父様の伸さんだった。幸運なことに同町の元助役であった。そのお力添えで、籠岳観光センターを紹介頂いた。さらに、食糧や燃料調達、医療機関などの情報も頂いた。そのおかげで、一定の安全を確保した上で活動を展開できる確信を得たと言える。



元涌谷市助役  
男澤 伸さん

## ののだけ 籠岳観光センター

仙北平野のほぼ中央にあり、JR石巻線と気仙沼線にはさまれた籠岳の中腹に位置する。街並みを眺望ことができ、石巻湾までも見渡すことができる。奥州三観音のひとつ籠峯観音が奉られる「籠峯寺」の参拝客に多く利用されている。

震災復興の工事での宿泊客で空きがなかったところ、大学のボランティアのために部屋を準備してくれた「籠岳観光センター」の支配人。

何かとボランティア学生について気にかけていただいた。



籠岳観光センター 支配人  
千田 栄二さん



## 石巻市立大須中学校

「自力」しか頼れるものはなかった。だから、必然的に「自立」してしまった。 行政当局からの支援や指示も皆無だった。ここは「平成の大合併」で、石巻市に編入された雄勝町の“吸収された”側の「埋没」させられてしまった地区だった。震災後の孤立地区「雄勝町」の大須中学校の校長に赴任した。本学、淑徳大学の10期卒業生。

震災後の3月下旬に、赴任先の中学校を訪れ、避難所になっている大須小学校の現状をみて、「いったいこれからどうすれば良いのか?」どうやって家に帰ったか覚えていない程の衝撃だった。震災直後の混乱した状況で、どこに支援を頼めばよいのか? 淑徳大学が脳裏に浮かんだという。



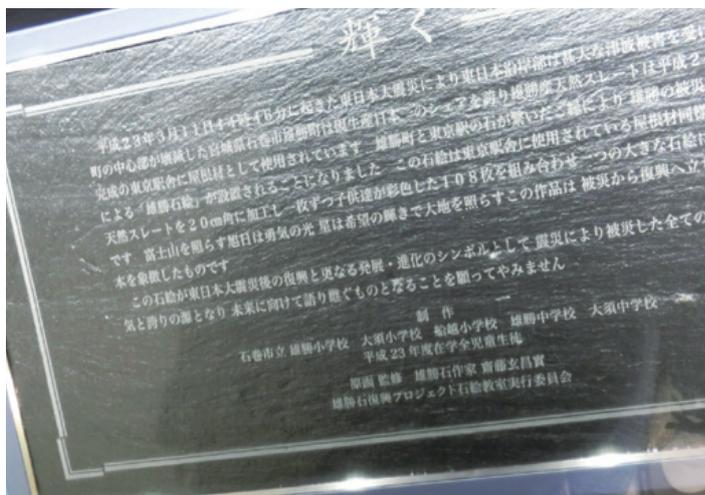
大須中学校校長  
岩佐 勝さん



2012年に完了する東京駅の復元工事に伴い雄勝をはじめ石巻市の天然スレート(粘板岩)が使用された。雄勝産のものは45万7,000枚のうち、被災をまぬがれた4万枚にあたる。



東京駅構内に飾られている雄勝石板の絵。雄勝地区の小中学校の児童生徒の手により制作された。



# 第五章

2011年夏～2013年初夏まで



復興支援活動の真価が問われるのはむしろこれからです。本学は、本当の意味で被災地の方々の一員となって、共に復興の道を歩んでいかなければなりません。それが、本学がめざす共生です。幸いにもご縁が広がり、さまざまな形で支援活動が継続・展開しています。

2011.7.16



### ボランティアセミナー

5月に行った雄勝での支援活動を学生が発表。また、避難所で好評だったハンドマッサージの講座も行い参加者もハンドマッサージの実技を体験した。

2011.7.29～8.12



### 孫の手ボランティア

7月29日から8月2日まで、学生消防隊に所属するコミュニティ政策学科1年の大徳諠之さんが石巻市大須地区で被災された方のお宅に滞在しボランティア活動として、ウニ漁のお手伝いや、おじい様の外出に付き添うなどの活動を行った。



### スペシャルナイター観戦&キャンパス見学

8月5日に行われた淑徳大学スペシャルナイターに石巻市立大須中学校の生徒たちを招待した。到着後、千葉ロッテマリーンズの選手の出迎えを受け、試合前のセレモニーから参加。生徒代表が両球団の監督に花束を贈呈しました。また始球式では、昨年の少年軟式野球世界大会出場メンバーの同中学阿部 雅さんが、見事な投球を見せた。

翌日、生徒たちは千葉キャンパスを見学し「大学生活のイメージがわいた」「進学に対する意欲が高まった」「淑徳の学生のように人の役に立てるようになりたい」と感想を述べていた。





### 大須小・中学校での学習支援ボランティア

淑徳大学スペシャルナイターの後、学生が帰路のバスに同行し現地入りしたことで、より親密な関係を築けた。小学校では全教科の学習からレクリエーションまで生活全般にわたり児童たちを支援。中学校では学生が各自の専門や得意科目を活かして学習のお手伝いを行った。また、生徒と先生方やPTAの方々も交えてのレクリエーションなどの活動を行った。8月8日から12日まで実施。学生7名、教員2名、職員1名が参加した。

### 学生ボランティア引率教員からの報告



総合福祉学部 教授

スーザン・  
ウィリアムズ

### Learning Together, Working Together

Our volunteer work at the Ohsu schools started on the 8th of August 2011 at Disneyland! Here we picked up the students of Ohsu Junior High School and their parents and went back to Ishinomaki with them by coach. They had been having some fun in Chiba at the Marine Stadium and going back together gave us a chance to get to know each other better. The real work started the next day at 8.00 a.m. We split into two groups; one to do cleaning and other chores and one to study with Ohsu Elementary school. The later part of the morning was just play! Our students made sure everyone had fun in the pool and told them some really scary ghost stories.

We spent the afternoons at the junior high school, helping out with summer homework but there was soccer, too afterwards. It was a valuable experience in learning to work together as a group and learning new skills both practical and communicative.

On our last day everybody decided we had worked hard enough and we were treated to Ohsu-style 'nagashi somen' (roof guttering not bamboo!) and a huge BBQ in the junior high school ground. Of course the combination of water and junior high students means fun! A huge water-fight ensued and everybody got soaked. Then we understood the blessing of running water. We realized that for the first time in three months nobody had to worry about the water supply.

## 2011.7.31

### 避難所へ夏服支援

千葉県鴨川市の「千葉県青年の家」に避難している福島県福祉事業協会(知的障がい児者施設)の利用者の方々用の夏用衣服の提供の支援要請が、この協会に勤務している比佐 陽一氏(28期卒業生)からあり、避難先へ届けた。夏服提供を呼びかけ4日間で約1500着が集まった。

## 2011.8.15～18



### 石巻市保育所支援ボランティア

8月15日から18日まで、5名の学生が石巻市の吉浜保育所、雄勝保育所、また8月9日から12日には3名が若草保育所に支援活動を行った。このうち、雄勝保育所は津波で建物が流され、飯野川保育所の一室を間借りして運営されており、そのような不便な状況にあっても、子どもたちのために懸命に頑張るお母さん方、保育士の方々が印象的であった。学生たちは、津波で被害を受けた施設を清掃したり、保育士の方々とともに子どもたちと遊んだり、各保育所のニーズに応じた支援活動をした。

### 学生ボランティア引率教員からの報告



総合福祉学部 教授

### 金子 保

### 石巻市立保育所の保育支援ボランティア

淑徳大学地域支援ボランティアセンターの紹介で、2011年8月10日から12日まで若草保育所の保育補助ボランティアに参加した。若草保育所は石巻市街の住宅地にあつて、津波被害は免れたが、5クラス100名余の園児の中には仮設住宅で生活しているケースも多いと聞く。ボランティア要請の事情は、「おかげさまでお盆休みが取れます」と感謝の言葉から推測することができた。

学生3名は前日の9日夜行バスで出発。10日8時20分に現地到着、朝の挨拶ではストリートダンスサークル・リガ・ミリティアで鍛えたダンスを披露。当時日本中大流行のマルモリダンスには子どもたちも一緒に盛り上がり、大歓迎を受けた。その後、学生は3クラスに分散配属、担当保育士の助手を務める。夕刻、近所のスーパーで夜食と朝食を購入し、宿舍「福一館」(素泊まり3500円)へ。全国で700人の熱中症が報道された日であった。翌日、8時20分に保育所到着。午前中、4・5・6歳児クラス40名がホールに集合、紙飛行機教室開催。マルモリダンスの後、女兒、男児の順に紙飛行機を飛ばして大賑わいであったが、子どもたちから「タモツ先生」と呼ばれてびっくり。午後は、子どもたちの昼寝の時間を利用して、思いがけず、被災地視察の機会を提供していただく。当日は被災から丁度5ヶ月目で、悲惨な被害状況ばかりか、惨禍の中から立ち上る線香の煙に胸の詰まる思いでいっぱいとなる。石巻市全体で死者3149名、行方不明900名余。各自忘れ難い三日間であった。



総合福祉学部 准教授  
仲本 美央

## 保育所におけるボランティア活動報告

### <活動報告>

2011年8月15日(月)夜間に東京駅に集合し、高速バスにて被災地である石巻市へ出発した。16日(火)早朝に古川市に到着し、現地案内者の車に乗り込み、被災地である北上市へ向かった。車中では、現地案内者からの被災地のこれまでの経緯と現地の現状説明を聞き、まずは津波によって流された石巻市役所の北上総合支所にて黙祷を捧げた。

8月16日(火)はお盆期間中であったため、吉浜保育所は休日子ども・職員ともに不在ではあったものの、所長に連絡を取り、許可を得て所庭内の清掃に取り組んだ。午前中には、所庭の遊具は津波によって土や泥まみれの状況であったが、子どもたちが日常遊べるように環境を整備した。さらに、昼間の休憩時には、隣接した高齢者福祉施設のご好意により、トイレ・休憩室をお借りした。その際に、被災した当日の周辺の様子や現在の生活の様子等を施設職員よりお聞きし、活動者それぞれが現状の厳しさと今後の復興への課題を認識した。午後は所庭の草むしりをした後、宿泊施設に戻った。

8月17日(水)は、吉浜保育所に3名、雄勝保育所に2名と分かれて、それぞれの場所での活動を行った。吉浜保育所では、所庭の排水溝の土や泥をすべて排除し、被災後はじめて排水できるようになったほど、環境を整備した。どちらの保育所でも、保育室の清掃、所外の清掃、草むしりを実施後、子どもたちの保育補助として子どもと関わり、絵本の読み聞かせ等を行った。保育時間終了後、再び、石巻市役所の北上総合支所にて黙祷を捧げ、宿泊施設に戻った。

8月18日(木)は、17日同様の活動を実施し、昼過ぎにボランティア活動を終了した。どちらの保育所でも職員と子どもたちから感謝の言葉をいただき、学生にとっても教員にとってもわずかながら自分たちの活動が現地の子どもたちと保育者に対して力が添えられたことを実感し、皆で振り返りの話し合いをながら、新幹線にて帰省した。



2011.8.14～18



### 陸前高田市でのボランティア活動

ソーシャルワーク教育団体連絡協議会の東日本大震災支援の一環として、本学学生5名(総合福祉学部2名、国際コミュニケーション学部3名)と教員1名が陸前高田市でボランティア活動を実施した。活動の内容は陸前高田市社会福祉協議会が実施している仮設住宅のサロン事業での、高齢者の話相手や児童のレクリエーションの担当である。

今回の活動には同窓会岩手県支部会員からたくさんの物品の援助や激励をいただいた。また被災した同窓生が宿舎を訪問して下さり、被災状況についてのお話は参加した学生達の心に強く刻まれた。被災地の復興には(特に陸前高田市では)長期の時間と支援が必要であることを認識した活動となった。



### パネルシアターの慰問活動

埼玉みずほ台キャンパスのパネルシアタークラブPITA PETA は、9月2日に福島県双葉町の避難先である加須市の旧・騎西高校に伺い、心のケアを目的にパネルシアターを行いました。避難生活を余儀なくされている子ども達に楽しいひと時を提供した。また9月13日から15日に千葉キャンパス・埼玉みずほ台キャンパスの学生と淑徳短期大学生で、3キャンパス合同パネルシアターキャラバンを企画。宮城県内の小学校や保育園、施設等で公演を行った。



## 学生ボランティア引率教員からの報告



淑徳短期大学  
こども学科講師  
淑徳大学兼任講師

藤田 佳子

## 合同パネルシアターキャラバン in石巻

「元気になってもらいたい!」「笑顔を届けたい!」と3キャンパス合同でパネルシアターキャラバンを立ち上げた。学生達にも自分の目で現地を見て、五感で心で感じてもらいたいと思う。

<第I期>

【実施日】：2011年9月13日(火)～15日(木)

【参加者】：学生13名 藤田ゼミ1名(短大2年)・児童文化研究会 5名(短期大学)、パネルシアターサークルでんでん虫 4名(千葉)、パネルシアタークラブ PITAPETA 4名(埼玉みずほ台)

【公演訪問先】：石巻市立雄勝保育所(こども15人と保育士)、市立大川保育所(こども12人と保育士)、石巻市立大須小学校(児童18人と先生)、幸泉学園(知的障害者更生施設・仙台市)(約30名)

<第III期>

【実施日】：2012年8月27日(月)～29日(水)

【参加者】：学生15名 児童文化研究会 5名(短期大学)、パネルシアターサークルでんでん虫 6名(千葉)、パネルシアタークラブ PITAPETA 4名(埼玉みずほ台)

【公演訪問先】：石巻市立飯野川保育所

※平成23年12月25日(日)～27日(火)、パネルシアター創始者 古宇田亮順先生・淑徳短大の学生と2回目の石巻パネルキャラバンを実施している

淑徳大学が継続して支援を続けている宮城県石巻市でパネルシアターを公演できる機会を得た。そもそも「東日本大震災で大変な思いをした方々に、私たちができることは何だろう」という思いがあり、大学の千葉・埼玉キャンパスの学生、短期大学の学生諸君とともに「元気になってもらいたい」「笑顔を届けたい」と3キャンパス合同のパネルシアターキャラバンを立ち上げた。

もちろん3キャンパスに分かれているため、学生同士の面識がなかったが「少しでもつらいと感じる時間をなくしてあげたい」と共通の思いがあり、前日の初顔合わせという状況にもかかわらず公演にこぎつけることができた。

学生たちも被災地を巡ることにより五感で現地を感じてもらいたいと思う。復興にまだまだ時間がかかるなか、この活動を継続していきたい。

保育所では、元気な子どもたちに圧倒された。みんなが夢中になって歌を歌っていたり、手遊びを楽しんでくれている姿を見て私も自然と笑みがこぼれた。子どもたちの目はとても輝いていてとてつもないパワーを感じた。私が思い切り楽しんで問いかければ、子どもたちが打ち解けていってくれることがとても嬉しかった。雄勝病院では、以前周りにあった車や瓦礫がすっかりなくなっていた。しかし、病院は変わらないまま残っていた。なんとも言えない思いでただ、病院を見つめるばかりだった。私には考えもつかない。屋上に逃げても助からなかった事実が信じられなかった。何とも言えない悲しい静けさが病院を包んでいた。

(社会福祉学科2年 石橋 涼子)

門脇小学校の周辺には津波で流されてしまい、もう基礎の部分しか残っていない家がたくさんありました。その周りには食器や靴などが落ちていて、一年半前まではこの場所で平穏な日常生活が営まれていたことをリアルに感じとれました。私はそれを見たとき胸が締め付けられるような思いになりました。けれど、その小学校の校舎に掲げられていた門小ガッツ僕らは負けないと書かれた横断幕からは力強さを感じました。

(淑徳短期大学 こども学科1年 齋藤 由香里)

## 2011.10.29 ～ 10.30

### 仙台での音楽ボランティア

10月29日から30日にかけて、埼玉みずほ台キャンパスのグリークラブとSMC（吹奏楽）の学生計18名は、顧問の高橋 多喜子教授とともに宮城県仙台市の特別養護老人ホーム「杜の里」にて音楽ボランティアを行った。震災から半年が経過し、一時でも癒しの時を過ごしていただければという思いで開催した催しは高齢者の皆様にとっても喜んでいただいた。



### 龍澤祭で東北支援物産展を開催

千葉キャンパス龍澤祭(10月29日、30日)で「買って応援。食べて応援。東北支援物産展」を開催した。

この物産展は、地域支援ボランティアセンターの学生スタッフが企画、運営にあたったもので、石巻市雄勝町大須地区の名産品「おぼろ昆布」をはじめ、宮城県、岩手県の物産20品目を取り寄せて販売した。雄勝町は全国的に有名な硯の原料である雄勝石の産地。現地ボランティア活動を通じてご縁のあった石材工房を営む高橋頼雄さんが、雄勝石で作った小皿や箸置きを手に現地から駆けつけ、盛り上がりには花を添えてくれた。

またこの物産展はNHKニュースの取材を受け、「ニュースを見て来ました」とたくさんの物産品をご購入いただいた方もおられました。なお、当日の売上金は、すべて東北復興支援に。

## 2011.11.5 ～ 11.7



### 女子卓球部、「東日本大震災復興卓球講習会」ボランティアを実施

卓球女子団体日本一に輝いた埼玉みずほ台キャンパス女子卓球部の5人の学生は、11月6日・7日に岩手県釜石市を訪問し、卓球交流と講習会を開催した。「日本一のプレーにふれて、学びたい!」という、釜石市卓球協会から招待された選手達は、模範試合や個別指導などを行った。最初は緊張していた参加者も皆全日本クラスの技術を吸収しようと熱心に取り組んでいた。翌日は、市から委託されて200軒ほどある仮設住宅に赴き、暮らしのガイドブックなどを各戸に配布する活動を行った。

その後、野田武則釜石市長を表敬訪問し、卓球ボランティアについて報告した。参加学生は、「卓球部は東北の高校出身が多く、被災された方々のために何かしたいと考えていました。今回の交流を通して、逆に応援してもらい、笑顔、元気、勇気をもらいました。これからも、自分達のできることを通して支援していきたいと思います。」と語っていた。

## 学生ボランティア引率教員からの報告



国際コミュニケーション  
学部 教授

## 高橋 多喜子

東日本大震災仙台海岸地域における  
音楽ボランティア活動

淑徳大学埼玉みずほ台キャンパスのグリークラブとSMC（吹奏楽）の有志18名が、震災で大きな被害を被った特別養護老人ホーム杜の里からの依頼により、平成23年10月29日～30日と平成24年11月30日～12月1日の2回音楽ボランティアに出かけました。

特別養護老人ホーム杜の里は仙台空港の北、東部道路より海岸側にあり、津波時1階の扉を全開にしたため、コンクリート建ての建物は流されこそしなかったものの相当なダメージを受けました。入居者は職員のいち早い避難誘導のおかげで全員が無事でした。現在、特養に120名、ケアハウスに40名が生活をしています。

施設では全員が集合できる場所がない、エレベータが破壊され利用できないなどの理由で、3か所に分けての音楽ボランティアが要請されました。

特別養護老人ホーム入居者を2グループに分けて、各1時間、ケアハウスでは1グループ1時間の音楽ボランティアを行いました。プログラムは特別養護老人ホームの対象者のためのものとケアハウス対象者のためのものに分け、グリー、SMC共に必死に練習に励みました。

実際の本番では、グリーの発表から始まり、SMC演奏。ここから高齢者の方にも参加していただき打楽器演奏や歌唱を一緒に行いました。後半では、演奏自体を高齢者主体に変更し、学生がその補助を行うというパターンも展開し、ご自身の気持ちを表すことを目的としました。

2011年は震災から半年経過し食べるものも着るものも充足したけれど、いろいろな思いが詰まった「こころ」や気持ちを一時的でも解放できたら、「こころ」に何かを届けることができたらという思いで出かけて行きました。高齢者の皆様はとても喜んでくださって、一緒に歌い、踊り、抱き合い、泣き、再会を約束して別れました。

2012年は学生たちからの「またどうしても仙台に行きたい」という強い思いが主体になって実現したボランティアでしたが、昨年できた絆をもとにお互いが充実した時間を過ごすことができました。一昨年と殆ど変らずの状況で生活している高齢者の皆さまは大喜びをして積極的に歌い、演奏してくださいました。高齢者から出てきたリクエストが「麦と兵隊」「ラバウル小唄」と軍歌で、今の状況と戦争時を比べているようでした。音楽はすぐに回想に繋がります。学生は丁寧に高齢者の「こころ」に寄り添っていくことができ、学生自身も成長したように思われました。

2011.11.6 ～ 11.19



### おがつ仮設商店街オープン記念「おがつ復興市」支援ボランティア

石巻市雄勝町で継続的な支援の一環として、地元住民が元の生活に戻り安心して暮らせる街づくりと地域産業の復興を図ることを目的として、復興への第一歩となる「プレハブ2階建ての仮設商店街」が11月19日に開店した。このオープン記念「おがつ復興市」の支援ボランティアに千葉キャンパスから6名の学生が参加した。

当日は多くの住民が駆けつけ、住民が商店街に寄せている期待の大きさを伺えた。学生は復興祭の準備・運営・片付けを担当し、人々とのつながりを得るコミュニティが心の支えになることを感じる活動となった。

2012.2.6



### コミュニティ政策学部 コミュニティフォーラム vol.2

遠野市長 本田 敏秋氏を招き、「震災とコミュニティを考える」と題したフォーラムを開催した。遠野市は岩手県沿岸部への支援拠点となった場所で国の機関や研究機関などさまざまな支援組織の活動を支えた。

また、本田遠野市長と熊谷千葉市長(本学特別招聘教授)、矢尾板 俊平コミュニティ政策学部専任講師による、「行政の役割」「地域のネットワーク」についての対談が行われた。



### 車をお届け隊

被災した方々は、家屋も流されているが、その他の財産としての「日常の交通手段」である自家用車を失った方も多くいる。そこで募金を集め、中古車を購入し雄勝地区に贈るプロジェクトを開始。第一次としてピカピカに磨き上げた3台の軽自動車をボランティアセンター支援学生と教職員が千葉キャンパスより運転して届けることができた。



2012. 3.25～26



### 石巻市 専門家相談会でアシスタント

石巻市の仮設住宅で、弁護士、司法書士、心理カウンセラーとともに、相談会の運営アシスタントを行った。

相談会の主催は「震災お助け専門家相談隊」というボランティア団体で、避難している住民がそれぞれ置かれている状況に応じて個別に相談をした。学生1名のみ参加。

宮城県石巻市での2日間に渡るボランティア活動を経て、まず大きく感じたのは、3月11日から約1年が経過した今でも、完全復興は遠いということ。なんとなく、離れた地域で暮らす私達には、とりあえず街の片付けは済み、最低限住民の皆さんが生活を送ることが出来ているというイメージを抱きがちですが、廃墟となった建物はまだまだ残っており、全壊判定を受けた住宅に、大した修繕もできずそれでも住み続けている人々が多くいました。また、仮設住宅に入居できたり、直接の目に見える被害を受けなかった地域の人々も、地震に付随しておきた雇用やお金の問題、近親者を亡くしてしまったショックなど、石巻の人々は、多岐に渡る悩みを抱えていました。

復興はまだまだですが、しかしながら同時に感じたのは、昨年の3月とは明らかに違う環境に変化し、前進しているということ。勿論昨年の時点で私は一度も東北に向かったことがなかったですが、住民の方々から、多くの困難な問題を抱えながらも、ただ打ちひしがれているだけではなく、現状を打破しようというメンタリティが感じられました。ご相談の後、目立った解決策、強力な打開策を提示できなかった場合も残念ながら少なからずありましたが、それでも少しでも問題を抱えたことによる悩みを共感するだけで、話をしに来て良かった、と言って頂いた方々がいたことには、こちらが救われました。今回ひとつのテーマでもあった「傾聴」がどれだけ大切かということを実感しました。

「ボランティアに参加して良かった」という表現は、私は行き過ぎていると思っています。あくまで最高は、災害など起きず、平穏無事な毎日を住民の方々を送ることです。しかし、それが既に起こってしまった今、せめて自分は、災害によってボランティアに参加することとなり、そこから学んだ諸々、先生方にして頂いた様々なお話を財産に、今後に活かさなければと思います。今回の経験を、単なる経験ではなく、改めて被災地に、或いは社会や世界に少しでも還元していかなくては。そう感じた2日間でした。

(実践心理学科4年 藤井 慧太)

2012.3.11



### 千葉市震災支援イベント

千葉市中央公園と文化センターにて「3.11を忘れない! "復興と防災"」と題した催しが行われた。被災地の名産品・応援グッズの販売、被災地の状況やボランティア活動の様子を写したパネルの展示、また、石川紀文サービスラーニングセンター長がパネリストとして出席されたシンポジウムの運営補助等、20名近い学生が参加した。

シンポジウムでは白澤さんの講演にとっても衝撃を受け、感動しました。

実際に被災された白澤さんの言葉は一言ひとことが重く、テレビなどの情報では伝わらなかったリアルな話には、私の想像では追いつかないような被災者の方の恐怖や、悲しみを感じました。家族と会えた時の喜びや、極限の状態の中で気づけた夫婦の愛や、人の思いやりにとっても感動しました。白澤さんは「自分は生かされた」とおっしゃっていました。被災しなかった私も生かされている存在であるならば、もっともっと自分にできる事をやりたいたらためて思いました。

(実践心理学科2年 大野 咲子)

1年経っても当時のことを忘れずにより震災に対する気持ちを深めている方が多くいることを感じました。支援するにはやはりお金がものすごく掛かり、完全復興は遅いかもかもしれませんが、今日のボランティアで多くの方が、がんばろう日本という気持ちを持っていることがわかり、何年経っても、この気持ちを大切にしようと思いました。

(社会福祉学科1年 熊谷 萌香)

物産展の販売、パネルコーナーどちらにもたくさんの方が来て、物品の購入や、募金をしてくれました。いまだに絶えることなく続く人々の思いやりの心を感じられました。またボランティアの私達にも励ましの言葉をたくさん頂けて嬉しく思いました。

(実践心理学科1年 清水 葵)

震災直後「自分がなにかしたい」という思いがあってもなかなか行動に移せなかったことがずっと心残りでしたが、行動に移そうと思い参加しました。

当日、支援物産展の会場にいて、いろんな所から様々な人が集まっているのを見て、人の思いやりや、つながりがいかに大切なのか実感し、震災に対するいろいろな思いが会話の中などから少し聞きとれたこと、共有できたことが自分にとってよかった点だと思いました。

(社会福祉学科1年 山崎 麻柚子)

2012.4.28～5.7



### 被災地の空に鯉のぼりを

旧石巻市雄勝総合支所庁舎の前に、本学学生ボランティア8人が4月28日に鯉のぼりを掲げた。これは、現地仮設住宅などで法律家らと無料生活相談を行うボランティア団体「震災お助け専門家相談隊」と合同企画したもので、3月に大学のホームページなどで鯉のぼりを募集し、学生の保護者などから60匹が送られた。中には「我が家の鯉のぼりが被災地で元気よく泳いでくれることを願います」との手紙と共に長野県から届いたものもあった。

最長10メートルの鯉のぼりもあり、大小さまざまな鯉のぼりをつなげるロープは、地元の漁師さんが漁で使用する丈夫なものを提供してくれた。

2012. 6.16～17



### おがつ店こ屋(仮設商店街)でのイベント「うにまつり」支援

2011年秋にオープンした「おがつ店こ屋」にて行われる「うにまつり」に学生3名が参加支援を行った。

当日、用意された2000箱、約2トンのウニであったが、お昼前には完売し、買えなかったお客さんには、後日宅配することになった。

現在の雄勝町は、人口が震災前の約四分の一になっており、今回のお祭りには、観光客だけでなく、事情があって雄勝を離れている住民の方々も大勢参加しており、久しぶりの再会を喜ぶ光景があちこちで見受けられた。

2012. 8.21～25



### 岩手県遠野他「ソーシャルワーカーの声プロジェクト」

福祉系大学経営者協議会 復興支援部会主催による本取り組みでは、被災した現場で活動するソーシャルワーカーの現実を記録し、発信するための調査を行った。

2012. 8. 6～10



### ボランティア学生が大須小・中学校で学習支援

前年に引き続き、夏休みの期間に学習支援ボランティアを開催した。今回の参加学生は6名、引率教職員は4名となった。

2012. 9. 28～30



### 仮設住宅 ハンドタッチケア体験会Ⅰアシスタント

講師うすき友美さんとボランティア学生3名がハンドケアマッサージ体験会を行った。

仮設住宅を訪問し、手を中心にマッサージを行うボランティアは、日常に会話などのコミュニケーションよりも、人と人が接触する「タッチ」の効果を活かして、仮設に住む人々に、よりリラックスしてもらうことを目的として行われた。

2012.10.26～28



### 仮設住宅 ハンドタッチケア体験会Ⅱアシスタント

講師うすき友美さんとボランティア学生7名がハンドマッサージケア体験会を行った。

### 石巻市 専門家相談会でのアシスタント

仮設住宅での悩み、行政手続きなどの相談を専門家が受け付ける。参加学生は2名で、仮設住宅での課題を改めて知ることになった。



震災復興支援の学食メニュー2012年3月より千葉キャンパス11館食堂で提供されている。(売上げの一部は寄付されます。)



## 学生ボランティア引率教員からの報告



総合福祉学部 准教授

### 松山 恵美子

## 2012年度学習支援ボランティア活動を通して

2012年8月6日～10日の5日間、学習支援ボランティアに参加した。宮城県石巻市立大須小学校と大須中学校の生徒さん達に夏休みの宿題のドリルやプリント学習のサポートをする(教員は見守る)のが主な活動である。参加メンバーは千葉キャンパスの学生4名(教育福祉学科とコミュニティ政策学科から各2名)、埼玉みずほ台キャンパスの学生1名(女子)、卒業生1名、教職員4名である。千葉キャンパスの学生を除いたメンバーは、東日本大震災から間もない頃にボランティアとして雄勝町を訪れている。

#### ◆大須小学校での学習ボランティア

午前中の大須小では学習サポートの他に、プール活動への参加、コンピュータ室をお借りして作曲ソフトを使ったパソコン体験学習、また牛乳パックを使ったラケットと一緒に作り、風船を使ったゲーム大会などの活動をした。

#### ◆大須中学校での学習ボランティア

大須中では、校長先生の開講のご挨拶のあと、学生と教職員がそれぞれ自己紹介、続いて中学生代表から立派な挨拶があり、一同身の引き締まる思いで学習サポートが開始された。「学習だけではなく、大学の雰囲気、将来の話やアルバイトの事など、色々な話を生徒にしてほしい。支援するとか支援されるとか、そういうものではない。生徒たちがここから旅立っていく先には、まだ知らない世界がたくさんあることを伝えてほしい。」という言葉が心に刻み込まれた。

そうめんと一緒に流れてきた大須の“わかめ”、手作りのお漬物、煮物や味噌汁、また保護者の漁師さんからの“ヒラメのお刺身”など、心温まる歓迎に感謝の気持ちでいっぱいになった。

#### ◆ミーティング

夕食後にミーティングがあり、その日の活動をふり返った。いくつか学生の言葉を紹介する。全体ミーティングのあとも自主的な学生同士のミーティングが続いた。

- ・大須小学校では在校児童以外に夏休みの里帰りで来ていた小学生も参加していた。座席配置や、時間配分など、小学生が楽しみながら学習に取り組める工夫が大事。
- ・プールでは水が苦手な子もいた。また安全性への配慮など、お互いの情報を共有しないと良い活動はできない。
- ・何人かの子ども達から名前と呼ばれ、嬉しかった。自分も全員の名前を覚える。まずはそこからだと思う。
- ・親に勧められて参加した。どうしたらよいかわからないが時間がない。とにかく声をかけ、みんなと話すことを目標とする。

#### ◆雄勝町を知ろうとする気持ち・感謝

“少し雄勝の町を歩いてみよう。どんな物が売られているか、畑では何が育っているか、雄勝で生活している人と話しをしてみよう”そんな気持ちで、自由時間を過ごした。地元の方のご配慮で“うに漁”や“わかめ詰め”を経験した。また、“とろろこぶ”を無添加手引きで製造している阿部傳吾さんの仕事場を見学させてもらう。私たちが知っている“うに”や“とろろこぶ”は、多くの手間と時間がかかっていることを改めて思う。阿部さんの信条は「お陰様という心」「感謝の心」「人を喜ばせる心」。

数日間の活動であったが、校長先生を初めとする先生方の話、地元の方の話、漁師さんの話、阿部さんの話、そして生徒さん達との話、大変貴重な時間であった。帰りのホームに立った時、学生が言った。「またいつか、ここに来る」。その思いを友だちにつなげ、ひとりでも多くの学生が参加してくれることを祈る。

2012.11.3



### 龍澤祭で東北支援物産展 第2弾

千葉キャンパス龍澤祭で「買って応援。食べて応援。東北支援物産展」を昨年に引き続き開催した。

海産物をはじめ、おがつ石を使用した硯などの販売も行った。

なかでも、雄勝産ホタテの浜焼きの販売が好調で、午前中で完売するほど盛況であった。

2012.11.25～11.26



### 石巻市雄勝地区音楽ボランティア

ボランティアセンターより出張音楽鑑賞ボランティアの企画をいくつかの施設や仮設住宅に打診した。高橋恵美さん(17期卒業生)の手配によって「淑徳大学ピアノコンサートin石巻」が実現することができた。

コンサートでは、淑徳大学・短期大学 兼任講師 篠塚恭子が単独でピアノ演奏を行った。

2012.12.14～16



### 活動拠点「おがつともいきハウス」開設準備

おがつ店こ屋(仮設商店街)でのイベント「一周年記念まつり」支援。仮設商店街1周年を記念したイベントにボランティア学生3名が参加した。

2013.3.3～7



### 「ソーシャルワーカーの声プロジェクト」

本プロジェクトは、被災地で支援を行っているソーシャルワーカーの声を学生が聴き取り、記録を残すことを目的に始まった。社会資源のないところに入り、支援を作り出していくという“ソーシャル”ワーカーの姿を目の当たりにした学生たちが「ソーシャルワーカーが向き合う現実」を伝えていく。今後、社会福祉学科の学生を中心にプロジェクトを継続し気づきと学びを深めていきたい。



淑徳大学兼任講師  
淑徳短期大学  
兼任講師

## 篠塚 恭子

### 音楽ボランティア活動 in 石巻

昨年11月25～26日、「淑徳大学ピアノコンサートin石巻」と名づけて、ピアノ演奏のボランティアをさせていただきました。

東日本大震災後、私の専門であるピアノで何か被災地の役に立てることはないものかと考えていました。広報・地域支援室に伺ったところ、石巻市の老人ホーム「雄心苑」と「一心苑」でのコンサートを、友人でピアニストの宮内波子さんとともにやる機会をいただきました。

現地では、淑徳大学出身で社会福祉士として訪問医療や地域の福祉に活躍の高橋恵美（17期卒業生）さんが協力くださいました。被災地のピアノですからどんな状態でも演奏しようと思っとうかがったのですが、両ホームのピアノの調律を手配してくださり、高い天井のホールに美しい音色で良く響き、大変すばらしい状態でした。

第1部での演奏曲目は、「エリーゼのために、ウインターワンダーランド、枯れ葉、星に願いを、川の流れるように、マイウエイ、風の丘」など、クラシックからジャズ、ポップス、日本の曲といろいろなジャンルから皆さんがどこかで聴いたことのあるメロディーの曲を選曲しました。また、第2部では日本の唱歌、童謡のピアノ曲を聴いていただくだけでなく、演奏に合わせて一緒に歌っていただきました。「みかんの花咲く丘、夏の思い出、もみじ、たき火、故郷」のほか、皆さんから曲のリクエストをいただきながらすすめました。

コンサートは40分程度を予定していましたが瞬間に1時間が過ぎました。コンサート後お一人おひとりが、私達の手をとり、「感動しました、子供の頃を思い出して幸せだった、もっと聴きたい、また来てください。ありがとう」と沢山のお礼の言葉をいただきました。皆さんが素敵な笑顔になられ、また涙ぐみながらの方もおられ、音楽が皆さんの心に届き、安らぎの時間を過ごされたことが大変うれしく、私の方こそ「聴いてくださり、ありがとうございます、また来ます。」とお伝えしました。

コンサート終了後、施設長先生から震災当時の様子や、家族を亡くされた方、独りになってしまっただけで震災直後に受け入れた方など辛い思いをなさった方々がいらっしゃるという話をうかがいました。そして、「本当は毎日でも、来ていただきたいくらいです。」との言葉をいただきました。

被災地の街の復興を心より願い、これからも少しでも被災地の皆様の役にたてればと思い、次は学生の合奏と一緒にうかがいたいと考えています。

最後に、今回の貴重な機会をくださいました長谷川俊哉先生と松崎滋氏に感謝申し上げます。



旧雄勝総合支所前にオープンした「おがつ店こ屋商店街」

商店街といってもプレハブ2階の2棟の建物です。被災した地元の食料品店や海産物店、など11店舗が入居しており、津波被害を受けた雄勝地区にある唯一の商店街として、地元で暮らす人々のライフラインを支えながら、震災から2年、オープンから1年以上が経ち、活気ある雄勝地区の復興を繋げるよう、毎月工夫を凝らしたイベントも展開しています。



## ボランティア活動参加学生座談会



大学広報誌『Together』第193号に掲載された記事の再掲です。本文中の学年は掲載当時(2012年10月)のものです。

**大木 達也** 社会福祉学科2年

2011年5月に石巻市大須小学校避難所での活動(2班)に参加。2012年8月には、全国の福祉系大学による合同プロジェクト「ソーシャルワーカーの声を届けよう」の一環として、岩手県に調査に赴く

**宮下 玲** 実践心理学科4年

地域支援ボランティアセンター学生代表(2011年当時)

震災発生直後の4月に日本赤十字社を通じてボランティア活動(10班)に参加。5月には石巻市大須小学校避難所での活動に参加以後、地域支援ボランティアセンター常任支援員として、支援活動のコーディネートに従事

**澤口 有紗** 人間環境学科4年

2011年5月に石巻市大須小学校避難所での活動(8班)に参加以降は、個人的にフリーマーケットを開きクリスマスプレゼントを贈るなど、活動を継続。2012年8月には大須小中学校での第2回学習支援ボランティアに参加

**松島 沙羅** 人間環境学科3年

埼玉みずほ台キャンパスのパネルシアターサークル「PITA PETA」所属

2011年と2012年の2回、千葉キャンパス「でんでん虫」、淑徳短期大学「児童文化研究会」と合同で「パネルシアター合同キャラバン」を実施

**志氣 龍太郎** 社会福祉学科4年

2011年8月に大須小中学校での第1回学習支援ボランティアに参加以後は、復興祈念文化祭、個人的に河北・雄勝・北上町三町合同復興市、仮設住宅相談会などにボランティアとして参加

### 被災地に行ったからこそ、 わかったこと



宮下 玲  
実践心理学科4年

—まず、震災支援ボランティアに参加したきっかけや思いを聞かせてください。

宮下 震災が起きて、「何かしなければいけない」とはやる気持ちを抑えきれませんでした。4月に日赤のボランティ

アに参加した時は、まだ大きな余震が続く状態。物資も乏しく、厚手の軍手や安全靴を自分で用意するよう言われました。不安はありましたが、ここで踏みとどまてはいけないと自分に言い聞かせて、被災地に向かいました。

大木 僕たちは、震災のため入学式が中止になったんです。春休みに震災のニュースを見ていて、入学すると迷わず地域支援ボランティアセンターに入りました。そこで大須小学校避難所での活動に誘われ、「ぜひ参加したい」と志願しました。活動内容は、避難

所の食事の準備のお手伝いや浜の清掃などです。この浜は、後に地元の方によって淑徳ビーチと名づけていただきました。

**松島** できることがあればやりたい、好きなパネルシアターでボランティアができればいいね、とメンバーで話し合っていました。そんな時に、埼玉みずほ台キャンパス「PITA PETA」、千葉キャンパス「でんでん虫」、淑徳短期大学「児童文化研究会」が協力して、被災地の小学校、保育園、施設等を巡るパネルシアター合同キャラバンの企画が決まったんです。志願者が多く、選考で参加者を絞り込んだほどでした。

**澤口** 私は、被災地を自分の目で見てみたいという気持ちが強かったです。テレビで見ているだけでも現実感がわからない。行ってみないと震災のことを忘れてしまうという思いに駆られて大須小学校避難所でのボランティアに参加しました。今年の夏休みの学習支援ボランティアでは、午前は小学校、午後は中学で勉強のお手伝いをさせていただきました。プールで泳いだり、バドミントンをしたり、一緒に遊ぶことができて楽しかったですね。

**志氣** 僕が被災地に初めて行ったのは、去年の8月の学習支援ボランティアの時でした。夏休みに予定されていたソーシャルワーカー実習が中止になり、震災のニュースを見ていて急に関心を持ったのです。今ではもっと早く参加していればよかったと後悔しています。始めは明るく元気に頑張る来ようと思っていましたが、被災地に近づくにつれ景色が一変し、だんだん不安になってきたことを覚えています。

#### 一活動中にはいろいろと苦労があったと思いますが。

**宮下** 被災地の方にどう声をかけたらいいかというこ



松島 沙羅  
人間環境学科3年

とが一番悩みました。皆さん、黙々と作業していて、正直、近寄り難い雰囲気でした。とにかく行動で示すしかないと思って活動していると「ありがどねえ」と言って、物資が乏しい中でお茶を出してくださり、緊張が一気に解け、思わず涙が出ました。

**大木** 僕も先輩から「ボランティアの中でもこれはトップクラスの難しさだよ」と言われていて、失礼がないように、言動や行動にとっても気を遣いました。でも、皆さんふだん通りとても温かく迎えてくださって、まったく垣根は感じませんでした。

**志氣** 「お母さんが見つかってないんだよ」と言いながら明るくふるまう子どもがいて、どう接してあげればよかったのか、正直なところ今でも答えが見つかっていません。ただ、僕が教えてあげた遊びが1年以上たった今でも流行っていると聞いて、すごく嬉しいですね。子どもたちから元気ももらいました。

#### 一被災地で感じたこと、印象に残ったことはなんでしょう。

**澤口** 子どもたちもそうですが、皆さんとても明るく振舞っていました。「お母さんを大切にしてください」と言葉をかけてくれたり。すごいな、強いなと思いました。それに比べたら、私たちは弱音なんて吐いていられません。初めて被災地に立った時、散乱している瓦礫を見て、これが現実なのかと信じられない気持ちでした。でも、避難所の方々とかわることで、目の前の光景とそこにあった人々の暮らしがつながり、実感をともなって受け入れられるようになりました。震災を忘れてはいけないという気持ちが強くなりましたね。

**松島** やはり、言葉にならないというのが正直な感想です。雄勝保育所は新しい建物が津波に襲われ、天井がすっぽり抜けた状態。園児たちのことを思うと、とても瓦礫とは呼べないと悲しくなりました。今年は、大川小学校を訪れ、花を手向ける機会もありました。幼稚園教諭を目指す者として、身が引き締まる思いが

しました。

**大木** ニュースでコンクリートの土台だけが残った家が映りますが、被災地に立つと、時計やランドセルが落ちていたりして、人々の暮らしを感じ取ることができます。決して「跡形もない」のではないのです。その傍らでは、自衛隊員の方が遺体を搜索しています。テレビではわからない厳しい現実を直視して、ただ絶句するばかりでした。今年の夏は陸前高田市で、奇跡の一本松を見る機会がありました。周囲にはなにもなく、遠くからでもその姿がはっきりわかります。震災を起こした自然の恐ろしさと同時にその強さを目の当たりにし、言葉にならない感動がありましたね。

## ボランティアってなんだろう？

### —震災支援ボランティアを通して学んだことはなんでしょう？

**澤口** 去年、大須小学校避難所支援ボランティア8班に参加しましたが、7班から引き継ぎを受けた時のことが今でも忘れられません。7班が被災地を離れる際、メンバーも避難所の方々も泣きながら別れを惜んでいました。私たちにそこまでの活動ができるのか。焦りが先に立ち、避難所の方々と関わる機会が多いマッサージにメンバーが偏って、最初活動が空回りしてしまいました。これではいけないと、夜にメンバーで意見をぶつけ合いました。8班には避難所を清掃し、小学校本来の姿に戻して使えるようにする大事な仕事があ

ったのです。私たちは涙ながらに見送られるために来たわけではない。避難所の方々と関わるができなくても、できることをやろう。自己満足ではいけないと思いました。そして、窓や廊下をピカピカになるまで磨いて、「見



澤口 有紗  
人間環境学科4年



違えるほどきれいになって小学生も喜ぶね」と言っていただくことができました。

**大木** そうですね。誰かのためにやるんだと力む必要はないと思います。活動を通して自分も成長させていただく。ボランティアとは相手に寄り添いながら共に幸せになっていく相乗効果のようなものではないでしょうか。僕も失礼があっちはいけないと最初は身構えていましたが、できることを一生懸命やっていたら、被災地の方々は温かく受け入れてくださいます。悩むより行動することが大切です。今もさまざまなボランティア活動に参加していますが、臆せず、感じたことを素直に伝えたり、行動したりすることができるようになりました。ごく自然に、ボランティアと共にあるような生活を過ごせていることが成長だと思っています。

**松島** 去年、私もすごく悩みました。パネルシアターは演じる側も楽しまなければ、見ている人を楽しませることはできません。初日に震災の爪痕を見て、「楽しい」という言葉を口にしているのか、複雑な気持ちになりました。子どもたちが本当に笑顔で見てくれるのかという不安もありました。しかし、それはすぐに払拭されました。飛び上がって喜んでくれる子どもたち。一緒に楽しく過ごすことも立派なボランティアなんです。そして、1年間、どうしたら石巻のこどもたちの心に響く公演ができるかずっと考えてきました。今年、



先生から「いつも行事に参加しない子が今日は最初から最後まで一生懸命見ていました」と言われた時は、少しでも心を開くことができたと思い、すごく嬉しかったです。

#### —これからボランティア活動に参加しようと思っている人にアドバイスをお願いします。

**志氣** やはり、人とのつながりの素晴らしさを実感できるのがボランティアのやりがいだと思います。初めて参加した学習支援ボランティアの最終日に、子どもたちに「また会いに来てよ」と言われた時、これからもずっと活動を続けたいと純粋に思いました。その後、大学から復興祈念文化祭ボランティア募集のメールをもらった時には、アルバイト先に無理を言って休みをもらって参加しました。子どもたちが僕の名前を覚えていてくれて本当に嬉しかったですね。また、今年の三町合同復興市の際には、復興への願いを込めてたくさんの風船を飛ばすイベントがありました。僕も「淑徳大学から来ました。これからも継続的に支援していきます」と風船に書いて飛ばしました。被災地の方々とボランティアが一体となって乗り越えようとしている姿は、見ていてとても感動的でした。

**宮下** 震災直後に「がんば



**志氣 龍太郎**  
社会福祉学科4年

ろう日本」というキャッチフレーズが盛んに使われましたが、必死で頑張っている被災地の方々に頑張ろうというのは違うのではないかと感じていました。頑張るべきなのは私たちなのです。被災地の方々は笑顔を忘れず、力強く復興に取り組んでいます。人間はこんなに頑張ることができるんだ、自分で限界を決めてはいけない、もっと高いところを目指して頑張らなければいけないと、気持ちを新たにしています。社会に出ると、さまざまな困難に出会います。ボランティアの経験が必ず糧になるはずで

## これからも支援を続けていきたい

—皆さん、それぞれの立場で継続的に支援活動に取り組んでいますね。

**宮下** 僕は、震災直後に被災地で活動した以降は、できるだけ多くの学生に被災地に行ってもらいたいと思って、地域支援ボランティアセンターの常任支援員として、コーディネートや後方支援に専念してきました。去年はまず物資が足りないことが最大の課題であり、大学に戻ってから、水やレトルト食品などを集めて被災地に送る活動に力を入れました。その後、着のみ着のまま避難した方々のために夏服を送ったり、移動のための中古車を送ったり、大須と緊密に連絡をとりながら、ニーズに応じた活動を行ってきました。今年は被災地の方々に元気になってもらおうと、バレンタインデーに学生手作りのメッセージカードを送ったり、鯉のぼりを集めて送ったり、学生ならではのアイデアで支援を続けています。これからも皆さんの協力をお願いします。

**大木** 今年は、全国の福祉系大学による合同プロジェクト「ソーシャルワーカーの声を届けよう」の一環として、淑徳大学を代表して岩手県に調査に行きました。被災地のソーシャルワーカーの方からお聞きした話を、学生たちに伝える活動です。やはり、被災地の



方々は、震災の記憶が薄れてしまうことを何よりも心配していました。ボランティア活動を通して見聞きしたことを、仲間や後輩たちに伝えていかなければいけないとあらためて思いました。

**松島** そうですね。それができるのが淑徳の伝統だと思います。去年、今年と続けているパネルシアター合同キャラバンは、キャンパスが別で、ふだん独自に活動している3団体の合同企画。前日に初めて顔を合わせて、夜遅くまでリハーサルして公演に臨みます。急遽プログラムを変更したこともありましたが、それにもかかわらず、公演先の先生から「一か月ぐらい練習したの?」「一つのサークルだと思った」と言ってもらえました。みんな気持ちは一つなんですね。今後も合同キャラバンを続けていきたいと思ひますし、パネルシアター以外にもできることに取り組んでいきたいです。

**澤口** 私も皆さんと同じように伝えることの大切さを強く感じています。大須小学校避難所支援ボランティア、学習支援ボランティアのほかに、個人的にフリーマーケットを開いてクリスマスプレゼントを送ったり、他団体の方と雄勝庁舎の整備に行ったのも、一つには被災地の今を見て、感じていないと伝える際に説得力がないと思ったからです。フリーマーケットでは、高校時代の友達やアルバイト先の人など、個人的なつながりだけで衣類を集め、新宿のフリーマーケット会場に申し込み、その売上で湯たんぽとホッカイロを贈

りました。こうした経験をもとに、学部や短大の学生、卒業生を対象に何回か報告会を開かせていただいています。夜遅くまで大学に残って、パワーポイントを作ったり、原稿を書いたり準備は大変ですが、ムービーを見て涙ぐむ人がいたり、私も行きたいと言う人がいると、すごく嬉しいです。

**志氣** 僕も入学式で活動報告をさせていただいた際に、行ってみたい、ボランティアセンターを紹介してと言われて、この活動をして本当に良かったと思ひました。三町合同復興市では、他のボランティア団体の方と知り合い、子どもたちはもちろん、もっといろいろな人たちと関わっていきたく思うようになりました。今年、弁護士、司法書士、心理カウンセラーの方々と一緒に、仮設住宅相談会のお手伝いに行ったのもそのためです。経験豊富な方々からさまざまなお話を聞くことができたり、仮設住宅の課題を知ったり、貴重な勉強ができました。

#### —最後に、被災地の方々や学生に向けてメッセージをお願いします。

**宮下** 来春、社会人になりますが、震災のことを決して忘れません。社会に出ると活動の場が広がり、情報発信する機会も増えてくると思ひます。地域の人々、これから出会う人々にこの経験をしっかりと伝えていきます。同時に、防災や支援について正しい知識を身につけ、広めていきたいですね。

**大木** 雄勝公民館の屋上にバスが乗り上げている光

景を見た時、体が震える思いがしたことを今でも覚えています。そんな状況の中で、僕たちを受け入れてくれた方々に、本当に感謝の気持ちでいっぱいです。僕たちが成長することがせめてもの恩返しと考え、勉強やボラン



**大木 達也**  
社会福祉学科2年

ティア活動に頑張ります。淑徳の学生は皆さんと共にあります。また必ず行きます！

**松島** 東京にいたら、ここまで震災に関心を持つことはなかったと思います。被災地に立ち、同じ空気を吸い、人のつながり、命の大切さをあらためて感じました。幼稚園教諭になれば、震災を知らない子どもたちに、活動で学んだことを伝えていきたいと思います。

**澤口** 食べ物がおいしい、人が温かい。そんな宮城が大好きになりました。漁船でウニ漁に連れて行ってくださったことも思い出です。「震災がなかったら、みんなと出会うこともなかった」とさえ言うてくださる地元の方もいました。私は活動報告会では、被害状況だけでなく、地元の方々の人柄、暮らしぶりも伝えるようにしています。行ってみたいと思うような報告を続けていきたいし、観光でもいいので多くの学生に訪れて欲しいと思います。

**志氣** 被災地の方々や他のボランティアの方々に関わり、僕は大きく変わりました。復興や原発のことなど、社会問題についても関心が深まりました。あの時ボランティアに行っていなかったら…。適当に大学生活を過ごしていたのでないか。振り返るとあの頃の自分が恥ずかしくなります。今を精一杯生きるようになりました。出会ったの方々、一人ひとりに感謝の気持ちでいっぱいです。



## 第六章 他団体との連携

---



全国のソーシャルワーカーや福祉系大学、また千葉県社会福祉協議会との連携により、さらに活動の輪が広がっています。本学学生はその活動において主体的に役割を果たしています。学外の多くの人々と出会い、意見を交わし、協働する経験は、まさに実学です。



## ソーシャルワーク教育団体連絡協議会

### 陸前高田市仮設住宅サロン活動へのボランティア

総合福祉学部 准教授 渋谷 哲

陸前高田市社会福祉協議会の依頼により、「ソーシャルワーク学生ボランティア派遣プロジェクト」に参加した。主催は本学が加盟している「ソーシャルワーク教育団体連絡協議会」である。高田高校および竹駒小学校のグラウンドに設置されている仮設住宅には社会福祉協議会が設置している「サロン」があり、高田高校の仮設住宅ではその一室に「サロン」が、竹駒小学校の仮設住宅ではグラウンドにテントを建てた「青空サロン」にて、仮設住宅に居住する子どもや高齢者、主婦への日中活動の支援を実施した。

夏休み期間中のため、子どもたちへは主に遊びの提供（スイカ割り・紙飛行機作り等）をし、高齢者や主婦へは話し相手となった。

【実施日】：2011年8月15日(月)～18日(木)

【参加者】：学生4名

この派遣にあたっての宿泊先だが、陸前高田市の隣市、大船渡市在住の柏貴美さん（社会福祉法人典人会理事長 33期卒業生）に相談したところ、法人の同敷地内にある「医療法人勝久会」の研修棟をお借りすることができ、医療法人勝久会理事長である木川田典彌氏のご理解とご協力により宿泊費は無料であった。

宿泊先では夕食後毎晩のように木川田典彌氏と、大船渡市周辺の卒業生3名の方から大震災発生時の状況と対応についての話を聞くことができた。また、学生がボランティア活動に行くことを知った「同窓会岩手県支部」12名の方から米や食料品を提供頂き、あらためて同窓会組織のありがたさを感じた。

今回、陸前高田市にボランティアへ行かせていただいたことで、今後自分に何が出来るのか考えた。実際にサロンへ行き、震災によって家族や家を無くしたという話を伺い、震災によって受けた心理的支援は重要



だと改めて感じた。また、自分に出来ることはボランティアに行かせていただいた経験を周囲の人に伝えることではないかと感じた。震災から5ヶ月経ち、震災に関する報道も少なくなったが、復興するにはまだまだ時間を要すると思う。そのため、被災地の人々の現状について家族や友人などに少しでも伝えて、ひとりひとりが出来ることを考えていければと思う。

(社会福祉学科4年 岸 みなみ)

## 福祉系大学経営者協議会 復興支援部会



### ソーシャルワーカーの“声”プロジェクト

総合福祉学部 専任講師 伊藤 千尋 (第Ⅱ期) ・ 准教授 米村 美奈 (第Ⅲ期)

本プロジェクトは、社会福祉専門職の社会的地位や社会福祉の社会認知の向上、社会福祉人材育成教育の発展等を推進目的に福祉系大学の経営責任者の組織である福祉系大学経営者協議会「復興支援委員会」の企画により実施されたものである。プロジェクトは、災害支援におけるソーシャルワーカーに焦点を当てたものであり、実際に東日本大震災において、災害支援に従事したソーシャルワーカーに対し、学内で一定のトレーニングを受けた4名の学生がその活動内容等の聴き取りを行うものである。その後聴き取りを実施した学生がその内容を整理し、学内外に講演や出版物として発信することを目指す。

<第Ⅱ期プロジェクト：日本社会事業大学・中部学院大学・文京学院大学・日本福祉大学・関西福祉大学・淑徳大学>

【実施日】： 2012年8月21日(月)～25日(土)

【参加者】： 学生4名、教職員1名

<第Ⅲ期プロジェクト：中部学院大学・関西福祉科学大学・淑徳大学>

【実施日】： 2013年3月3日(日)～7日(木)

【参加者】： 学生4名、教職員2名

1日目 講義：宮城県サポートセンター支援事務所長 鈴木守幸氏 「宮城県社会福祉士会の取り組み」、学習会

2～4日目 インタビュー、反省会

5日目 「インタビューからみえるソーシャルワーカーの機能」グループ討議

石巻市の雄勝町に向い、車を沿岸部の方へ走らせていくと、いまだ津波の爪痕が生々しく残されたままであった。さらに進むと、徐々に視界を遮るものが減り、目の前に現れたのは広大な更地であった。津波の影響を受けた家屋や病院、学校が点在する中、空き地とも受け取れるその場所は震災以前には住宅地であったというが、以前の面影は残っていない。そこにあるのは僅かに残る家の土台のみで、視界を遮るものはほとんどなく、遠くの遠くまで見渡すことの出来てしまう光景を目の前に私は言葉を失った。

大切な家族が、大切に築き上げてきたものが、自然という力により一瞬にして奪われてしまったらどうやって気持ちを保てばいいだろう、どこに気持ちをぶつけたらいいだろう。改めて震災がもたらしたものは計り知れないと感じた。

いずれは流されずに残った建物も取り壊されてしまうという。取り壊されるということは、今まで自分たちがそこで生活してきたという目に見える証がなくなり、全てが人々の記憶の中だけになるということだ。私は、“忘れてはいけない”と叫ばれている意味をこの時改めて噛み締めた。

(社会福祉学科1年 大内 育恵)

## 千葉県社会福祉協議会



### 東日本大震災に係る大学生ボランティアバス

千葉県社会福祉協議会主催のもと、県内福祉系大学の学生を対象に、被災地福島県相馬市へボランティアバスを派遣した。ボランティア活動を通して災害支援を行うとともに、被災地の現状や支援の実際などを学ぶことを目的とし、泥かき、掃除や片づけの手伝い、写真の洗浄などを行った。

【実施日】：第1回 2011年6月10日(金)～12日(日)、第2回 6月17日(金)～19日(日)、  
第3回 6月24日(金)～26日(日)

【参加者】：学生4名(第1、2回各1名、第3回2名)

【活動内容】：泥かき、掃除や片づけの手伝い、泥で汚れた写真の洗浄など

このボランティアを通して、相手のことを考える、みんなと協力しあうこと、聞く耳を持つことの大切さを改めて感じることができました。どれもあたりまえのことですが大学で社会福祉の勉強をしているので、この経験を活かしていきたいと思います。

今回の反省点は、事前にリーダーを決める段階で自信をもてず辞退してしまったこと、現地で臨機応変な対応ができなかったことです。リーダーの件も、出来ないからやらないのではなく、初めから諦めず勇気をだしてみようと思います。

(社会福祉学科1年 岩瀬 昌子)

## 同窓会の動き

宮城県石巻、あるいは原発の被害甚大な福島で、本学の同窓生が先頭に立って住民のために活動を続けています。それを、全国の同窓生が緊密な連携で支援しています。私たちは、これを誇りに思うと同時に、学祖の志をこれからも伝承していく決意です。

- 2011年3月14日(月) 各県支部・本部事務局より現状把握及び今後の支援策構築に向けた情報収集安否確認のため、電話による各県支部窓口への連絡確認、情報収集を始める。  
また、安否情報収集のため、学校ホームページ上の安否情報確認サイト窓口として情報収集を行う。
- 3月18日(金) 本部事務局より各県支部・評議員・役員への情報提供依頼の文書を発送する。
- 3月29日(火) 山口光治学部長より学生ボランティアの派遣・引率の検討にあたり、卒業生からの支援協力依頼の有無について問合せを受ける。原発事故により埼玉県加須市旧騎西高校へ避難中の双葉町社会福祉協議会職員として卒業生2名が勤務していることが判明し、同窓会副会長・東北地区連合会長・細谷昭夫氏(1期生)、大学へ支援の検討を依頼する。
- 4月5(火)・6日(水) 細谷副会長の元へ騎西高校へ避難中の双葉町社協職員・北村雅氏(10期生)より支援を希望する旨の情報があり、埼玉みずほ台キャンパスと調整、「おかゆの炊ける炊飯器」他支援物資の手配を依頼する。  
宮城県石巻市大須中学校校長・岩佐勝氏(10期生)より支援要請を受け、細谷副会長より同窓会を通じ、大学へボランティアの派遣など支援要請情報を伝達する。
- 4月7日(木) 山口学部長より、埼玉みずほ台卒業生の情報収集を行った際、福島県在住の卒業生、笹田丞氏(3期生)が双葉地方広域市町村圏組合消防本部職員として救援活動に従事している旨が判明する。(震災発生当初からの苦難や離れて暮らすことを余儀なくされたご家族との絆は、その後「河北新報」で連載となる)
- 4月14日(木) 大学教職員との「情報共有の会」を開催する。細谷副会長が、雄勝支援の新鮮野菜の調達のために千葉を訪れるとの情報を受け、川眞田喜代子先生、小林秀樹先生の両名が中心となり、大学教職員に声をかけ、千葉キャンパス淑水記念館多目的室にて「被災地からの報告と支援を考える集い」として、生の現地の様子を伺う。

- 4月14日(木)・15日(金) 1期生有志(細谷副会長・齋藤哲郎氏)で声を掛け合い、宮城県避難所(大須小学校)へ新鮮野菜の他、卵や納豆を調達し、レンタカーで届ける。
- 4月14日(木) 会長が「淑徳大学東日本大震災支援ボランティアセンター」に委員として委嘱を受ける。
- 4月15日(金) 本部事務局がHPで震災発生より1ヵ月間の同窓会並びに大学の支援状況の報告と同時に、情報提供依頼を更新する。
- 4月16日(土) 岩手県支部長・石川紀文氏(4期生)が県内卒業生の情報収集を行っていた際に、ご親戚の連絡により菊地よし子さん(3期生・岩手)が行方不明、新聞記事より箱石進一さん(17期生・岩手)が犠牲となられたことが判明する。
- 4月20日(水) 1期生有志(細谷副会長・井上氏)より、新鮮野菜他の支援物資を避難所へ届ける。
- 4月21日(木) 第1回淑徳大学東日本大震災支援ボランティアセンター会議へ参加。各部署からの報告並びに今後の方向性を確認し、具体的な支援策の検討を行う。  
宮城県支部副会長・熊谷修一氏が地元で集めた義捐金を大須地区岩佐氏の元へ届ける。
- 5月3日(火)・4日(水) 長谷川匡俊学長の被災地慰問に伴い、石川支部長のコーディネートにより、同窓会岩手県・宮城県両支部役員との情報交換会を開催する。
- 5月12日(木) 「淑徳大学東日本大震災支援ボランティアセンター会議」へ参加し、各部署からの報告並びに今後の方向性を確認、具体的な支援策の検討を行う。
- 5月13日(金) 細谷副会長が福島県の社会福祉施設からの避難者を受け入れている「鴨川青年の家」で職務に当たっている福島県支部役員・比佐陽一氏(28期生)、他卒業生を慰問し、状況の把握と共に必要支援等について情報収集を行う。
- 5月20日(金) 宮城県支部役員・近藤通子氏が大須小学校で学生ボランティアへ激励訪問を行い、また支部広報で在学生のボランティア活動を紹介する。
- 6月4日(土) 評議員会を開催する。また、埼玉県加須市旧騎西高校での避難生活や震災当時の状況について報告会を開催する。東日本大震災支援募金への協力を確認し、活動費に余裕のある支部については別途寄付金を依頼。同窓会としても活動資金として予算計上することを決定するなど被災地への支援を検討する。
- 6月6日(月) 長野県支部が支部広報を発行し、支部会員へ大学の震災支援活動を報告、情報の共有を図る。
- 6月中旬～ 全会員へ向け、臨時広報「総会案内」を発送し、これまでの同窓生の被災状況並びに、大学・同窓会の支援内容等を紹介する。また「東日本大震災同窓生支援募金」の受付開始を案内する。

- 6月12日(日) 福島県支部役員が「鴨川青年の家」を慰問し、必要な支援などについて情報収集を行う。
- 6月23日(木) 細谷副会長が「鴨川青年の家」の慰問を重ね、夏服が不足しているとの情報得て、大学へ夏服提供の支援を依頼する。
- 7月14日(木) 「淑徳大学東日本大震災支援ボランティアセンター会議」へ参加。各部署から報告並びに今後の方向性を確認、具体的な支援策の検討を行う。
- 7月24日(金) 同窓会総会を開催。埼玉みずほ台ホームカミングデー「ボランティア参加学生による震災活動報告会」へ参加する。  
長野県支部が「同窓会支援募金」への寄付を行う。  
臨時役員会を開催し、同窓会支援募金について、支援の対象者・見舞金及び弔慰の額・支給方法・申請方法等を検討する。
- 8月6日(土) 福島県支部が「会員集会」を開催し、北村氏・岩佐氏による「震災報告会」、長谷川学長による「講演会」を開催、また情報の共有を図る。
- 8月15日(月) 福島県支部が「在学生震災ボランティア」、「同窓会支援募金」へそれぞれ寄付を行う。
- 9月1日(木) 静岡県支部が「在学生震災支援ボランティア」へ活動費を寄付する。
- 10月1日(土) 広報「同窓会だより」を発行し、卒業生の被災状況や同窓会・大学の支援活動等についての報告と共に、支援募金の経過報告、継続支援を呼びかける。
- 10月13(木)・14日(金) 石川支部長が長谷川学長と共に岩手県を訪問し、被災された卒業生・在学生を見舞うと共に、犠牲となられた卒業生のお墓にお参りし、ご遺族へ弔慰金をお届けする。
- 10月20日(木) 千葉県・東京都の両支部より石巻市雄勝町桑浜地区へテントを寄贈。
- 10月22(土)・23(日)・29(土)・30日(日) 千葉・埼玉みずほ台の両キャンパス学園祭時に開催している地方物産展にて「大須とろろ昆布」を販売し、売上(義捐金を含む)を寄付する。
- 10月27日(木) 「淑徳大学東日本大震災支援ボランティアセンター会議」へ参加し、各部署からの報告並びに今後の方向性を確認、具体的な支援策を検討する。
- 10月29日(土) 千葉県支部他により学園祭・ホームカミングデーにて震災シンポジウム「被災地で生きる淑徳魂～現場での実践に学ぶ～」を開催する。コーディネーター：石川紀文氏(岩手県支部長・4期生/淑徳大学サービスラーニングセンター長)、パネラー：足立叡副学長、細谷昭夫氏(副会長兼東北地区連合会会長・1期生)、岩佐勝氏(石巻市立大須中学校校長・10期生)、北村勝氏(双葉町社会福祉協議会・10期生)が参加する。

- 1期生が「淑徳大学一期生だより」を発刊し、これまでの震災支援活動等の報告や大学からの報告、支援に対する感謝を伝えると共に、情報共有を図る。
- 11月5日(土) 東北各県支部が東北地区連合会会議を開催する。東日本大震災の支援活動の報告(岩佐氏他)、各県からの報告を交え情報共有を図り、平成25年度宮城県で開催する「淑徳大学フェア」への支援協力を確認し、内容の検討と共に、フェア翌日は「被災者への哀悼」をテーマに被災地の見分とすることで本部・大学へ報告する。
- 2012年
- 4月26日(木) 「淑徳大学東日本大震災支援ボランティアセンター会議」へ参加し、各部署からの報告並びに今後の方向性を確認、具体的な支援策を検討する。
- 5月30日(水) 被災情報より震災支援募金から卒業生へ見舞金を交付する(千葉県1名)
- 6月7日(木) 役員会を開催し、募金並びに支援報告等、情報の共有を図ると共に、今後の支援方針を検討する。また平成25年度開催の「淑徳大学フェア」についての支援確認並びに、翌日の市内観光を「被災者への哀悼」をテーマとした被災地の見聞とすることを決定する。
- 8月22日(水) 広報「同窓会だより」を発行し、卒業生の被災状況や同窓会・大学の支援活動等についての報告と共に、支援募金の経過報告、継続支援を依頼する。
- 10月27(土)・28日(日)、11月3(土)・4日(日) 千葉・埼玉みずほ台両キャンパス学園祭時に開催している地方物産展にて「大須のとろろ昆布」を販売し、売上(義捐金を含む)を寄付する。
- 2013年2月21日(木) 「淑徳大学東日本大震災支援ボランティアセンター会議」へ参加し、各部署からの報告並びに今後の方向性を確認する。東日本大震災支援ボランティア報告書作成について打ち合わせを行う。

## 第七章

### 資料、新聞記事、学生報告会資料など



支援活動を行う中、本学の活動がメディアで紹介された一覧です。  
紹介されたものは支援活動のほんの一部ですが、メディアに掲出されることで  
支援の輪も広がっていきました。

メディア掲出一覧

2011. 3.24	産経新聞	若い力結集 被災者支援
2011. 4.6	教育学術新聞	がんばろう日本 大学ができること
2011. 4.15	毎日新聞	震災と介護問題 - 淑徳大学 (結城康博)
2011. 6.1	河北新報	淑徳大ボランティア隊現地責任者 松崎 滋さん
2011. 6.5	朝日新聞	がれき撤去など淑徳大生報告会
2011. 6.7	千葉日報	淑徳大生宮城でボランティア活動
2011. 6.26	毎日新聞	みずほ学生が被災地での活動
2011. 7.20	千葉日報	被災地での活動紹介
2011. 10.16	千葉日報	モノレール祭り被災地支援訴え
2011. 10.29	首都圏ニュース (テレビ)	学園祭で東北地方の物産展
2011. 10.31	千葉日報	宮城の硯職人高橋さん龍澤祭に参加
2011. 11.9	復興釜石新聞	みずほ卓球部が釜石で講習会
2012. 2.7	読売新聞	震災とコミュニティを考える遠野市長と千葉市長フォーラム
2012. 2.7	千葉日報	震災とコミュニティを考える遠野市長と千葉市長フォーラム
2012. 3.4	朝日新聞	車椅子バスケットボール開幕
2012. 3.6	J C N千葉 (テレビ)	震災復興雄勝ボランティア活動取り組み
2012. 3.9	読売新聞	結城 康博准教授 孤独死仮設住宅
2012. 3.12	千葉日報	3.11 震災シンポジウム石川紀文パネリスト
2012. 3.20	千葉日報	宮下 玲さん就職しても被災地に
2012. 3.30	河北新報	柏女 霊峰教授 仙台で震災孤児フォーラム講演
2012. 7.4	中日新聞 (松坂/紀勢版)	雄勝こんぶ
2012. 8.5	千葉日報	東北支援復興少年サッカー大会
2012. 11.4	千葉日報	淑徳大「龍澤祭」で物産展



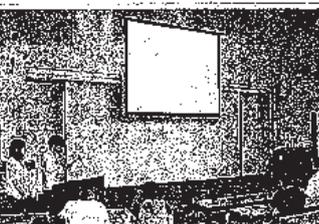
2011.6.26 毎日新聞 みずほ学生が被災地での活動

毎日新聞 2011.6.26 (日) 朝刊

### 淑徳大生が活動報告

被災地を回り、活動報告をする

被災地を回り、活動報告をする。淑徳大学は、6月25日、みずほ学生が被災地での活動を報告した。学生たちは、被災地の現状や、被災者の生活の様子を報告し、今後の活動の方向性を話し合った。



淑徳大学は、6月25日、みずほ学生が被災地での活動を報告した。学生たちは、被災地の現状や、被災者の生活の様子を報告し、今後の活動の方向性を話し合った。

2011.11.9 復興釜石新聞 みずほ卓球部が釜石で講習会

復興釜石新聞

### トップレベルの技術に触れる 淑徳大卓球部が講習会

国内最優秀の練習試合、卓球愛好者や中学生はくぎ付

女子卓球の名門、淑徳大の卓球部が、復興釜石新聞の協賛で、11月9日、釜石市で卓球講習会を開催した。講習会には、淑徳大の卓球部員6人が参加し、市内の卓球愛好者や中学生ら約40人が参加した。講習会では、淑徳大の卓球部員が、卓球の技術や戦術について、講習会参加者に指導した。また、淑徳大の卓球部員と市内の卓球愛好者や中学生との練習試合も行われた。講習会は大成功を収め、参加者からは好評を博した。



女子卓球の名門、淑徳大の卓球部が、復興釜石新聞の協賛で、11月9日、釜石市で卓球講習会を開催した。講習会には、淑徳大の卓球部員6人が参加し、市内の卓球愛好者や中学生ら約40人が参加した。講習会では、淑徳大の卓球部員が、卓球の技術や戦術について、講習会参加者に指導した。また、淑徳大の卓球部員と市内の卓球愛好者や中学生との練習試合も行われた。講習会は大成功を収め、参加者からは好評を博した。

2011.10.3 千葉日報 宮城の視職人高橋さん龍澤祭に参加

千葉日報

### 「一緒に立て直そう」 県内被災者にエール

宮城の視職人高橋さん 淑徳大学園祭に参加

宮城の視職人高橋さんが、淑徳大学の園祭に参加し、被災者にエールを送った。高橋さんは、園祭で被災者の現状や、被災者の生活の様子を報告し、今後の活動の方向性を話し合った。高橋さんは、被災者に「一緒に立て直そう」とエールを送った。高橋さんは、被災者の現状や、被災者の生活の様子を報告し、今後の活動の方向性を話し合った。



宮城の視職人高橋さんが、淑徳大学の園祭に参加し、被災者にエールを送った。高橋さんは、園祭で被災者の現状や、被災者の生活の様子を報告し、今後の活動の方向性を話し合った。高橋さんは、被災者に「一緒に立て直そう」とエールを送った。高橋さんは、被災者の現状や、被災者の生活の様子を報告し、今後の活動の方向性を話し合った。

2012.2.7 読売新聞 震災とコミュニティを考える 遠野市長と千葉市長フォーラム

2012.2.7 千葉日報 震災とコミュニティを考える遠野市長と千葉市長フォーラム

2012年(平成24年)2月7日(火曜日)

### 全国と連携し後方支援

千葉市長と心手、遠野市長

被災自治体支援で議論

千葉市長と心手、遠野市長。被災自治体支援で議論。千葉市長と遠野市長が、被災自治体の支援について議論した。両市長は、被災自治体の現状や、被災者の生活の様子を報告し、今後の活動の方向性を話し合った。両市長は、被災者に「一緒に立て直そう」とエールを送った。両市長は、被災者の現状や、被災者の生活の様子を報告し、今後の活動の方向性を話し合った。



被災自治体支援で議論。千葉市長と遠野市長が、被災自治体の支援について議論した。両市長は、被災自治体の現状や、被災者の生活の様子を報告し、今後の活動の方向性を話し合った。両市長は、被災者に「一緒に立て直そう」とエールを送った。両市長は、被災者の現状や、被災者の生活の様子を報告し、今後の活動の方向性を話し合った。



## 2011.7.16 学生主催ボランティアセミナー 配布資料

この資料は当日学生が発表したスライドの内容を掲載したものです。

**東日本大震災ボランティア  
～宮城県石巻市～**

淑徳大学



1

**II 東日本大震災**

概要

- 発生: 平成23年3月11日(金) 午後2時46分
- 震源地: 宮城県牡鹿半島沖
- マグニチュード: 9.0
- 被害地: 1都1道16県
- 被害者: 6月10日の時点

死亡	行方不明者	負傷者
15,405人	8,095人	5,365人

(Wikipediaより)

6

**建物に家が乗っています**

11

**はじめに**

- ・ 今回、宮城県石巻市のボランティアを通して、石巻市の現状や課題を知ることができた。
- ・ 現地の方々と触れ合うことを通して、様々なことを感じたり、大切なことを学ぶことができた。
- ・ そして、今後どのような活動が必要になってくるのかを考えるきっかけとなった。

↓

少しでも多くの人に、ボランティア報告を行い、情報共有を通して、支援の在り方考える機会とする。



2

**宮城県石巻市の被害状況**

6月10日の時点

都道府県	死亡	行方不明者	負傷者
岩手	4,532	2,809	167
宮城	9,214	4,913	3,459
福島	1,594	369	236

(Wikipediaより)

宮城県は沿岸部を中心に甚大な被害を受けた。  
仙台市・石巻市・気仙沼市・名取市・東松島・山元町・女川町・南三陸町での被害が顕著であった。  
■石巻市: 5,000人以上の死者、行方不明者を出している。  
■東松島市: 市域の6割が浸水。  
■気仙沼市: 津波直撃に大規模な火災が発生。  
■名取市: 壊滅的な被害を受け、1,000人前後の死者を出している。

7

**家の土台しか残されていません**

12

**目次**

- I. ボランティア活動のきっかけ～なぜ石巻市～
- II. 東日本大震災～石巻市被害状況～
- III. ボランティア活動～概要・目的・内容～
- IV. 33日間のボランティアの意味～感謝会～
- V. 現地で学んだこと・感想・考察
- VI. まとめ
- VII. 今後の課題・計画



3

**雄勝町の状況**

8

**崩壊した車**

13



4

**言葉になりません**

9

**家の形は保たれているが、  
家の中は悲惨な状況です**

14

**I ボランティア活動のきっかけ  
～なぜ石巻市～**

- ・ 宮城県石巻市立大須中学校の校長先生が、淑徳大学の卒業生であった。
- ・ このため、校長先生からボランティアの要請があり、淑徳大学としてボランティア活動を開始することとなった。

5

**被害の甚大さが伺えます**

10

**バスが建物の二階へ**

15

海に流失した家屋



16

ほとんど窓ガラスが割れています



荒れ果てた建物、車などが残されていました。

[http://blogs.25am.jp/madabit\\_micromonika/2011/05/?E8A231A8E798148D9E5%9C%BD%E3%80%84%E5%98%B4%E5%B8%B2%E7%97%A5%E5%99%A2%E3%81%A8%E7%99%B3%E5%B7%B8%E5%B8%B2%E5%B0%B9%E6%89%80/](http://blogs.25am.jp/madabit_micromonika/2011/05/?E8A231A8E798148D9E5%9C%BD%E3%80%84%E5%98%B4%E5%B8%B2%E7%97%A5%E5%99%A2%E3%81%A8%E7%99%B3%E5%B7%B8%E5%B8%B2%E5%B0%B9%E6%89%80/)

21

大川小学校の校舎内



校舎内は机や椅子、木、泥、教科書などが散乱しています。校舎は2階でしたが、津波はそれをはるかに上回る高さであることが分かります。

<http://plaza.rakuten.co.jp/hikari812/diary/20110322/>

26

震災前の雄勝病院



雄勝病院は30床であり、慢性期の病院として機能していた。地域医療に力を入れていた病院であった。

<http://www.pref.miyagi.jp/fryou/KIGAKU/ISHI/N/jch/ta/jch/ta/02-09.htm>

17

毎日黙祷を捧げに訪れました



雄勝病院の周辺には、これまで使っていた書類、レントゲン、ナースシューズ、手袋などが見られました。また、写真が貼られており、お供え物がありました。

当時、ここで働いていた医療従事者・患者さんはどのような気持ちだったのでしょうか？

22

持ち主の見つからないランドセル



宮城県石巻市大川小学校での捜索活動で見つかった品々。校庭から逃げの途中、津波に襲われた。いまだに多くの持ち主が見つかっていません。捜索が行われていますが、行方不明者は今も海の中で眠っています。

<http://plaza.rakuten.co.jp/hikari812/diary/20110322/>

27

震災後の雄勝病院



震災当時は、患者：約40名、職員：約30名でした。しかし震災により、入院患者は全て亡くなり、職員はほんの数名のみ生存するといった甚大な被害となりました。

<http://blogs.yahoo.co.jp/fndy19600914/64360224.html>

18

大川小学校



全校児童の約7割(74人)の死者・行方不明者を出した。

23

仮墓地



ショベルカーで穴を掘り、盛り土をした仮墓地です。ここにはまだ名前も分らないご遺体が、眠っています。墓標として作られた板には、番号のみ記載されていました。

28

雄勝病院を横から見た光景です



19

石巻市立大川小学校の表札



<http://plaza.rakuten.co.jp/hikari812/diary/20110322/>

24

それぞれの避難所で生活している人数



29

沿岸部の状況



コンクリートでできた防波堤が粉砕しています。津波の破壊力が凄まじいものであったことが分かります。

20

大川小学校の位置



<3月11日>  
大きな地震で教職員11人と児童たちはいったん校庭に集まった。その後、学校から約200メートル離れた、やや高い北上大橋へ逃げようとして津波にのまれた。

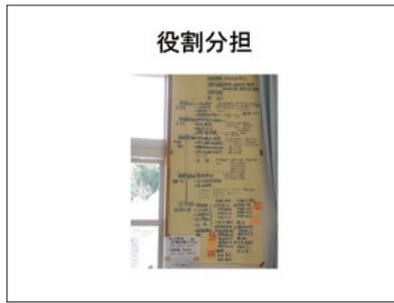
[http://tohoku311.blogspot.com/2011/04/blog-post\\_5304.html](http://tohoku311.blogspot.com/2011/04/blog-post_5304.html)

25

大須小学校で生活している人数



30



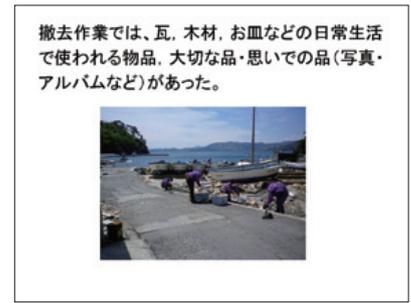
役割分担

31



石巻市立大須小学校  
～避難所として機能～

36



撤去作業では、瓦、木材、お皿などの日常生活  
で使われる物品、大切な品・思いでの品(写真・  
アルバムなど)があった。

41



日常生活を送る上での決まり事

32



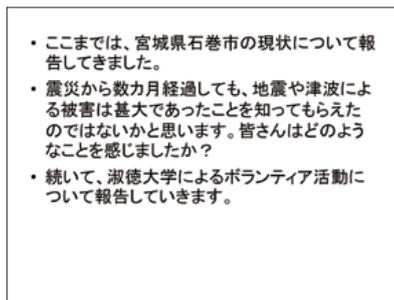
大須小学校は津波の被害を、直  
接受けずに済んだ学校でした。

37



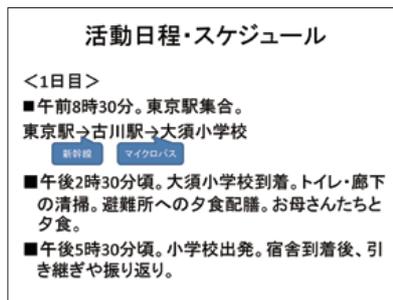
キレイになったビーチを見ると住民の方は元気  
になる様です。

42



- ・ここまでは、宮城県石巻市の現状について報告してきました。
- ・震災から数カ月経過しても、地震や津波による被害は甚大であったことを知ってもらえたのではないかと思います。皆さんはどのようなことを感じましたか？
- ・続いて、淑徳大学によるボランティア活動について報告していきます。

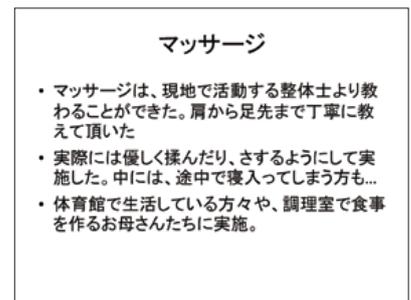
33



活動日程・スケジュール

- <1日目>
- 午前8時30分。東京駅集合。  
東京駅→古川駅→大須小学校
  - 午後2時30分頃。大須小学校到着。トイレ・廊下の清掃。避難所への夕食配膳。お母さんたちと夕食。
  - 午後5時30分頃。小学校出発。宿舎到着後、引き継ぎや振り返り。

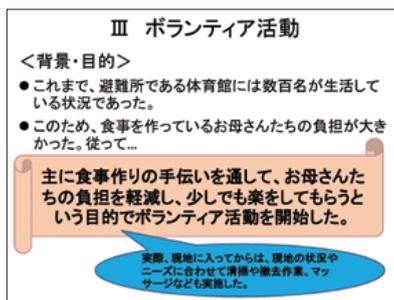
38



マッサージ

- ・マッサージは、現地で活動する整体士より教わる事ができた。肩から足先まで丁寧に教えて頂いた
- ・実際には優しく揉んだり、さするようにして実施した。中には、途中で寝入ってしまう方も...
- ・体育館で生活している方々や、調理室で食事を作ってお母さんたちに実施。

43

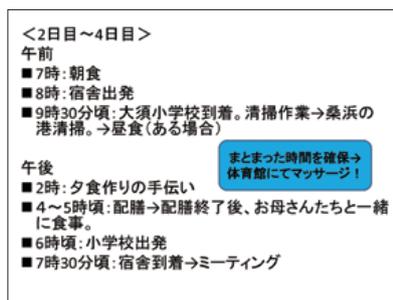


Ⅲ ボランティア活動

- <背景・目的>
- これまで、避難所である体育館には数百名が生活している状況であった。
  - このため、食事を作っているお母さんたちの負担が大きかった。従って...
- 主に食事作りの手伝いを通して、お母さんたちの負担を軽減し、少しでも楽してもらおうという目的でボランティア活動を開始した。

実際、現地に入っからは、現地の状況やニーズに合わせて清掃や撤去作業、マッサージなども実施した。

34



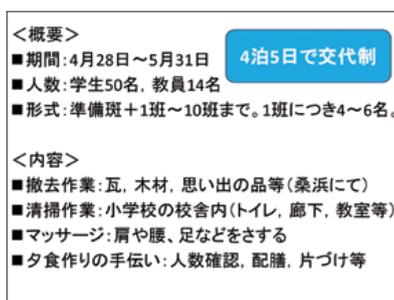
- <2日目～4日目>
- 午前
- 7時：朝食
  - 8時：宿舎出発
  - 9時30分頃：大須小学校到着。清掃作業→桑浜の港清掃。→昼食(ある場合)
- 午後
- 2時：夕食作りの手伝い
  - 4～5時頃：配膳→配膳終了後、お母さんたちと一緒に食事。
  - 6時頃：小学校出発
  - 7時30分頃：宿舎到着→ミーティング
- まとまった時間を確保→体育館にてマッサージ！

39



整体士さんから教わっている光景

44



- <概要>
- 期間：4月28日～5月31日 **4泊5日で交代制**
  - 人数：学生50名、教員14名
  - 形式：準備班+1班～10班まで。1班につき4～6名。
- <内容>
- 撤去作業：瓦、木材、思い出の品等(桑浜にて)
  - 清掃作業：小学校の校舎内(トイレ、廊下、教室等)
  - マッサージ：肩や腰、足などをさする
  - 夕食作りの手伝い：人数確認、配膳、片づけ等

35



午前中：撤去作業

- ・石巻市桑浜漁港にて撤去作業。
- ・地元の方が「淑徳ビーチ」と名付けた。



40



丁寧に教えて頂きました。

45

午後：夕食作りの手伝い

- 地元のお母さん達と避難所の夕食づくりを行う。
- 午後1時半頃から開始。



46

皆で協力して夕食作り！



51

記念写真



56

調理室です！



47

配膳の準備



52

今までの淑徳大学による活動内容が記されたホワイトボード



57

まず、配膳する人数の確認！！



48

いざ、配膳っ！



53

ボランティア終了



58

前もって準備→作業がスムーズに♪♪



49

お仕事が終わった後の肩もみ♪



整体士さんから教わったことを活かすことができました！

「気持ちいいね〜♪」

54

- ・ここまで、宮城県石巻市におけるボランティア活動の内容について、報告してきました。
- ・そして淑徳大学では、33日間にわたって活動してきました。この活動してきた意味について、振り返りたいと思います。
- ・また淑徳大学の理念である「共生」についても、考えていきます。

59

役割分担して進めています



50

お母さん、お疲れ様です！



55

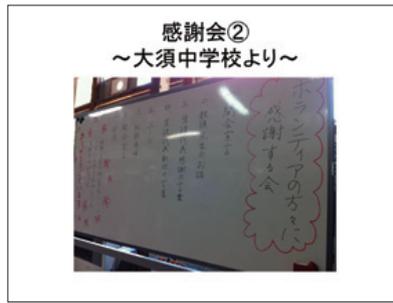
IV 33日間のボランティアの意味  
～感謝会を通して～

小学校、中学校の生徒さんより、感謝の会を開いてもらえた。

60



61



66

ボランティア・感謝会から見てきたもの  
～共生の姿・あり方～

- ・感謝会を通して、「共生」とは何かを考える上で、より視野を広げることができた。
- ・共生とは、「どんなに辛い状況でもお互いを励まし支え合いながら生きていくことである」と思われた。

71



62



67

V 現地の方々と触れ合う中で

- 現地の方々と触れ合う中で、様々な話を聴く事ができた。
- Aさん、女性:「家は津波で流されてしまった。でも自然の大災害だし、仕方ないね」(苦笑)
- Bさん、男性:「昔からずっと漁業をされていて、毎日体を動かしていたんだ。天気の良い日は、ずっと体育館の中で過ごすことになっちゃう。体を動かしたいな」
- Cさん、男性:「俺も漁業の仕事でよく釣子に行くんだ。千葉も良い海だなあ。」「普段はもっと綺麗な海なんだ。いつか元の海を見せてやるからな!」
- Dさん、女性:「まさかあんな大津波が来るなんて思ってたかったわ。かろうじて逃げてくれたのよ」

72



63



68

大須中学校長先生からの話

- ・「震災直後、みんな身体的・精神的に限界の状態でした」
- ・「はじめは、数百人が体育館で生活していた」
- ・「自分の住む場所が見つかるようになって、今(5月31日)では約70人近くになった」
- ・「現地の人々は、(徐々に)気持ちに余裕が生まれてきているのではないかと思います」

73



64



69

- ・これまで石巻市の現状、ボランティア活動とその意味について伝えてきました。
- ・また、現地の方々から貴重な話を聴くことができ、非常に内容の深いボランティアとなりました。
- ・そしてボランティアを通しての気づき・学び・感想・考察などを伝えていきます。

74



65

- ・はじめはここまで感謝されるとは思っていなかったため、驚きと同時に感動した。
- ・準備班からこれまで継続してきた支援があったからこそ、このような素晴らしい感謝会を企画してくれたのである。
- ・我々が続けてきた支援は、現地にとって少なからず役に立った！と言える。
- ・現地の人々も辛い状況であるにも関わらず、懸命にエールを送ってくれた。人は励まし合って生きていく存在であることを、実感できる時間があった。

70

VI 現地で学んだこと・感想・考察

- ・震災の恐ろしさ～テレビだけではわからない～
- ・震災で亡くなっていった人の想い
- ・日常生活への影響
- ・心理過程～どのように気持ちが変わっていったのか～
- ・より良いコミュニケーションの在り方とは何か
- ～非言語的コミュニケーションの必要性～
- ・震災をどのように乗り越えてきたのか?
- 現地の人々の強み～結束力・協調性～
- 周りの支援(ただし、ニーズの把握をし、それに見合った支援が大切～支援物資～)

75

## Ⅷ まとめ

- ボランティアした経験をこれからの学生生活にどのように活かしていきたいのか(就職して働いていく場合でも)
- 共生をどのように認識するようになったか

76

## Ⅶ 今後の課題・計画

- 今回の被害により、教職員の数が減少した  
→ 学習支援が必要  
→ 淑徳大学では、夏休みにまた学習支援の目的で活動する予定。
- 多くの人が仕事を失い、職を求めている？  
→ 就労支援の必要性
- 今現地が必要としている物品が届けられているのか？ ニーズにあった支援ができているのか？

77

支援活動参加者名簿

時系列にそって支援活動ごとに参加者を掲載します。

平成23年

■千葉県旭市 昼食提供 3/23(水)

小宮 成登	四釜 脩	倉持 裕子	中村 亮佑	海老澤 たまえ	土屋 麗絵
五十嵐 祐貴	鵜沢 穂	青嵐 千尋	長妻 保那実	佐藤 恵理香	金塚 はるな
古滝 岬	石川 友紀子	田中 友美	今井 里美	清水 葵	倉西 美友紀
渡邊 義規	平田 めぐみ				
林 房吉(教職員)	石川 紀文(教職員)	長谷川 俊哉(教職員)	松崎 滋(教職員)		

■千葉県旭市 がれき撤去 3/23(水)～3/28(月)

江井 健吾	黒澤 和寿	小川 大介	篠崎 哲郎	朝日 哲也	大森 優光	鈴木 信喬
渡邊 義規	中村 暢之	蒲野 慶	加納 寛之	門多 冬馬		

■千葉県千葉市蘇我駅前 日赤募金活動 3/30(水)～4/3(日)

金塚 はるな	仲田 惇	渡邊 義規	平島 あゆみ	渡辺 孝輔	青嵐 千尋
荻 倫帆	高岡 美波	清水 葵	倉西 美友紀	田中 成美	益田 英明
清宮 優花	松本 美奈子	伊藤 優花	内山 陽子	高野 知代	大森 優光
江井 健吾	鈴木 恵理	花見 佳織	山口 祐太	屋崎 有斗	林 理絵
深山 碧	本吉 晋太郎	加納 寛之	刈込 卓也	風間 いづみ	竹 彩那
安藤 裕太	新関 裕己	海老名 直也	星見 友香	福本 真志	杉本 麻美
山下 大貴	大野 咲子	宮下 千穂	高橋 麻衣	長内 将大	橋本 洋平
西田 直樹	山崎 聖也	扇谷 侑樹	板倉 稔	佐久間 良太	勝呂 祥帆
佐久間 亜有美	橋本 侑美	石原 幸太	岩瀬 和平	吉田 奈美紀	小林 芽伊子
魚井 巧平	小宮 成登	坂井田 圭二	四釜 脩	倉持 裕子	杉山 鉄馬
宮下 玲	綱島 知美	梶田 咲季	海老澤 たまえ	中村 亮佑	阿部 陸
池田 峻輔	鵜沢 穂	佐藤 弘樹	五十嵐 祐貴	石岡 良平	片山 雄太郎
村上 加奈子					

■宮城県東松島市 日赤がれき撤去ボランティア 4/22(金)～4/24(日)

立野 智史	宮下 玲
-------	------

■宮城県石巻市雄勝町大須地区支援活動

準備班	4/28(木)～5/5(木)	中村 亮佑	若狭 啓太
1班	5/1(日)～5/5(木)	坂井田 圭二	倉持 裕子 中村 亮佑

2班	5/4(水)～5/8(日)	近藤 大樹 四釜 脩 石橋 宗一郎 大徳 誼之	大木 達也 嘉山 さゆり	若狭 啓太 泉 優介
準備～2班	4/28(木)～5/7(土) 4/28(木)～5/8(日)	松崎 滋(教職員) 本多 敏明(教職員)		
3班	5/7(土)～5/11(水)	津田 康平 仲田 惇 石川 紀文(教職員)	後藤 公介 鎌田 祥宏	行木 洋貴
4班	5/10(火)～5/14(土)	榊原 一成 杉本 麻美 スーザン・ウィリアムズ(教職員)	篠原 巧	矢島 健三(教職員) 大野 咲子
5班	5/13(金)～5/17(火)	小林 芽伊子 篠 加奈子 長谷川 俊哉(教職員)	吉田 奈美紀 倉西 美友紀	岩瀬 理子 山田 壺千(講師) 矢尾板 俊平(教職員)
6班	5/16(月)～5/20(金)	井上彩也香 酒井 美幸 本多 敏明(教職員)	鈴木 譲 関 瞬也	松本 直也
7班	5/19(木)～5/23(月)	橋本 侑美 関根 洋平 藤森 雄介(教職員)	佐久間 亜有美 神保 千波	清宮 優香
8班	5/22(日)～5/26(木)	依田 一樹 堀井 美穂 松山 恵美子(教職員)	澤口 有紗 田尻 琢也	藤野 尚子
9班	5/25(水)～5/29(日)	村上 加奈子 高木 菜央 土井 浩信(教職員) 本多 敏明(教職員)	岡本 幸恵 森井 貴史	若目田 拓馬
10班	5/28(土)～6/1(水)	宮下 玲 鈴木 颯太 渡邊 弘美(教職員) 足立 叡(教職員)	山本 龍太 斎藤 拓実	菅 侑也
11班(消防)	6/1(水)～6/5(日)	阿部 陸 五十嵐 祐貴 筒井 義一	竹内 翔一 小宮 成登 濱本 千尋	鵜沢 穂 池田 峻輔
4班～11(消防)班	5/11(水)～6/5(日)	松崎 滋(教職員)		

## ■福島県相馬市 ボランティアバス

千葉県社会福祉協議会

6/10(金)～6/12(日)	鈴木 悠	岩瀬 昌子
6/17(金)～6/19(日)	石田 有香里	
6/24(金)～6/26(日)	岡本 昌子	大塚 駿

## ■宮城県石巻市雄勝町大須地区支援活動

孫の手ボランティア 7/29(金)～8/2(火)	大徳 諄之	松崎 滋(教職員)	
学習支援ボランティア 8/6(土)～8/12(金)	大野 咲子	杉本 麻美	志氣 龍太郎
	岩井 敦美	松戸 直也	
学習(埼玉)	細川 芽生	森山 みどり	
	スーザン・ウィリアムズ(教職員)		神 陽子(教職員)
	松崎 滋(教職員)		

## ■招待ボランティア大須中(淑徳大学にて)

再会ボランティア 8/6(土)	岩瀬 理子	倉持 裕子	近藤 大樹
	坂井田 圭二	四釜 脩	泉 優介
	石橋 宗一郎	小林 芽伊子	篠 加奈子
	倉西 美友紀	酒井 美幸	松本 直也
	宮下 玲	海老澤 たまえ	立野 智史
	坪山 奈月	高田 和美	吉田 奈美紀
	後藤 力	高橋 美也子	中島 英里
	菅森 香奈	小野田 優香	柴崎 葵
	井出 毅		
	杉野 明子	谷口 瞬	水頭 恵理
	内藤 郁美	酒井 奈々子	小堀 陽平
	高田 真優子	蝦原 美代乃	久保田 弥生
	鎌田 祥宏	斎藤 はるな	北川 ゆう
	小林 美星	小島 修平	須藤 駿太郎
	長谷川 俊哉(教職員)	松崎 滋(教職員)	

## ■宮城県石巻市 保育所

保育所ボランティア 8/10(水)～8/12(金)	伊藤 貴大	竹沢 航	後藤 亮介
	山崎 麻柚子	小林 芽伊子	奥 裕齊
	長谷川 知美	渡邊 拓実	
	仲本 美央(教職員)	榎 英子(教職員)	
	金子 保(教職員)		

## ■岩手県陸前高田市

ソーシャルワーク教育団体連絡協議会 仮設住宅サロンボランティア

8/14(日)～8/18(木) 岸 みなみ 上原 裕美 関根 洋平  
堀井 美穂 猪狩 勇輝  
渋谷 哲(教職員)

## ■宮城県石巻市雄勝町大須地区

パネルシアターキャラバン①

9/13(火)～9/15日(木) 矢田部 建佑 松島 沙羅 新井 晶子  
関 友希子 石橋 涼子 菅生 温史  
溜 佐恵子 福田 綾香 藤田 佳子(教職員)

## ■宮城県石巻市雄勝町大須地区

復興祈念イベント 10/22(土)～23日(日)

杉本 麻美 大野 咲子 倉持 裕子  
佐藤 朋代 岩瀬 昌子 志氣 龍太郎  
細越 貴裕  
米村 美奈(教職員)

## ■岩手県釜石市

卓球講習会 11/5(土)～7日(月)

石垣 優香 大場 咲陽子 馮 叶  
白鳥 舞 松澤 茉里奈

## ■宮城県石巻市雄勝町大須地区

プレハブ(店こ屋) 11/19(土)～20日(日)

今井 里美 日下部 美香 中村 理沙  
立野 智史 佐藤 祥平 藤枝 芽生  
松崎 滋(教職員)

雄勝花壇① 12/3(土)

田島 喬史 山際 あかね 立野 智史  
倉西 美友紀

## ■宮城県石巻市

専門家仮設相談会①

12/10(土)～11日(日) 千田 鳳美子 根岸 慧

## ■宮城県石巻市雄勝町大須地区

雄勝花壇② 12/10(土)

近藤 大樹 行木 洋貴

## ■宮城県石巻市

合同復興市 2/11(土)

根岸 慧 志氣 龍太郎

専門家仮設相談会②

2/25(土)～26日(日) 三浦 あかね 岡村 麻美 藤井 慧太  
織原 大 道塚 文乃

■宮城県石巻市雄勝町大須地区

店こ屋②	2/26(日)	立川 絵梨	齊藤 葉	土井 洋佑
		今野 智子(教職員)		
車を届け隊	3/3(土)～4(日)	五十嵐 祐貴		
		長谷川 俊哉(教職員)	吉崎 秀紀(教職員)	
		松崎 滋(教職員)		

■千葉県千葉市

千葉市イベント	3/11(日)	清水 葵	倉西 美友紀	志氣 龍太郎
		山崎 麻柚子	熊谷 萌香	立川 絵梨
		釣出 祥平	石渡 宥輝	佐藤 広海
		坂井田 圭二	倉持 裕子	宮下 玲
		後藤 公介	津田 康平	中村 亮佑
		大野 咲子	熊谷 萌香	
		石川 紀文(教職員)	長谷川 俊哉(教職員)	
		松崎 滋(教職員)		

■文教学院大学

パネル展示	3/25(日)	坂井田 圭二	中村 亮佑	近藤 大樹
		長谷川 俊哉(教職員)		

平成24年

■宮城県石巻市雄勝町

こいのぼり設置	4/28(土)～4/30(月)	斎藤 拓実	森井 貴史	若狭 啓太
		松崎 滋(教職員)		
こいのぼり片付け	6/8(金)～6/10(日)	斎藤 拓実	水野 未央	木村 有花
		松崎 滋(教職員)		
おがつ店こ屋④(ウニまつり)	6/16(土)～6/17(日)	嘉山 さゆり	倉持 裕子	鈴木 悠
		松崎 滋(教職員)		

■宮城県石巻市

専門家仮設相談会③	6/29(金)～7/1(日)	志氣 龍太郎
-----------	----------------	--------

## ■宮城県石巻市雄勝町

おがつ店こ屋⑤(七夕)	7/13(金)～15(日)	土井 洋佑 松崎 滋(教職員)
-------------	---------------	--------------------

## ■岩手県遠野市他

ソーシャルワーカーの声プロジェクト①(大槌町、大船渡市、釜石)

	8/21(火)～8/25(土)	小野田 優香 榊田 綾子 伊藤 千尋(教職員)	安川 紗代	大木 達也
パネルシアター③	8/27(月)～29(水)	菅生 温志 長谷川 翔一 松島 沙羅 松本 赳夫 短期大学部 平岩 美咲 菰田 めぐみ 浮須 裕美(講師)	福田 綾香 高野 勇樹 小島 瑠璃 深井 茜 齋藤 由香里 藤田 佳子(教職員)	石橋 涼子 瀧口 加奈 草村 寛樹 國分 暁子

## ■宮城県石巻市雄勝町

学習支援ボランティア②	8/6(月)～10(金)	坂井田 圭二 伊藤 均 スーザン・ウィリアムズ(教職員) 松山 恵美子(教職員) 松崎 滋(教職員)	澤口 有紗 武田 有滋	濱津 恭平 立沢 周也
おがつ店こ屋⑥(灯笼流し)	8/11(土)～14(火)	土井 洋佑 松崎 滋(教職員)	秋元 佳奈	
ハンドタッチケア体験	9/28(金)～30(日)	大塚 瑞紀 うすき 友美(講師)	大福地 優衣 松崎 滋(教職員)	阿部 有紀子
ハンドタッチケア体験②	10/26(金)～28(日)	大塚 瑞紀 加藤 茜 水野 未央 うすき 友美(講師)	大福地 優衣 柴田 萌子 松崎 滋(教職員)	佐藤 仁美 内山 絢望

## ■宮城県石巻市

専門家仮設相談会④	10/26(金)～28(日)	濱津 恭平 伊藤 均
-----------	----------------	---------------

■宮城県石巻市雄勝町

拠点開設準備 11/16(金)～18(日) 石橋 宗一郎 伊藤 均 中村 亮佑  
松崎 滋(教職員)

■宮城県石巻市雄勝町

おがつ店こ屋⑦(一周年) 11/16(金)～18(日) 石橋 宗一郎 伊藤 均 中村 亮佑  
松崎 滋(教職員)

■宮城県石巻市雄勝町

音楽ボランティア 11/25(日)～26(月) 松崎 滋(教職員)  
篠塚 恭子(教職員) 宮内 波子(講師)

■宮城県仙台市

音楽ボランティア 11/30(金)～12/2(日) 池田 康平 鷲田 琢人 高橋 沙織  
(グリークラブ・SMC) 松井 晃樹 友利 仁美 岡田 彩香  
湯浅 智則 鈴木 友梨 生田 康洋  
松島 沙羅 小林 修理 宮田 愛  
小島 瑠璃 小布施 円 佐藤 萌未  
堀部 佳織 南澤 成美  
高橋 多喜子(教職員)

■宮城県石巻市雄勝町

拠点開設準備② 12/14(金)～16(日) 石橋 宗一郎 大木 達也 若狭 啓太  
泉 優介  
佐藤 朋代 松崎 滋(教職員)

■宮城県石巻市雄勝町

拠点開設準備③ 12/21(金)～23(日) 石橋 宗一郎  
松崎 滋(教職員)

■宮城県名取市・東松島市他

ソーシャルワーカーの声プロジェクト(石巻市、雄勝町)②  
3/3(日)～3/7(木) 大藤 未来 山口 恭平 三島木 大樹  
大内 育恵  
米村 美奈(教職員) 松崎 滋(教職員)

---

## あとがきにかえて

大須小学校避難所でお会いした方々、いま皆さんはお元気でいらっしゃるだろうか？

屋上にバスが乗っていた雄勝公民館や旧町役場、雄勝病院などの大きな建物の全てが取り壊されて更地になるという。あの光景を思い出させるものは無くなっていくのだろう。

しかし、この震災支援活動を通じて知り合った人々の顔はいまでもはっきりと思い出す。

飯野川のスーパーウジエや雄勝オーリンクハウスでばったりと再会してお互いの近況を伝え合うこともあった。震災がなければ、ここに来ることは無かったかもしれない。雄勝には豊かな海や山などの自然もあり、こころ優しい人がいる。美しい浜辺に戻るまで、熱が冷めない息の長い支援を続けたいと心から思う。

---

発 行：淑徳大学東日本大震災支援ボランティアセンター  
千葉県千葉市中央区大蔵寺町200  
043-265-7340  
編 集：淑徳大学地域支援室  
制作協力：(株)図書出版  
発 行 日：2013年3月11日

注) 報告書に掲載されている方々の、学年、職業、職位等は本報告書発行時(2013年3月11日)のものとなっています。



# SHUKUTOKU

